

藤 浩 久



「思索雑感/Image Trash」2004-2015：校正用ノート

藤 浩 久

記憶の編集／時間の圧縮

時間は記憶のなかで圧縮される。

今日から見て、昨日という時間はある程度の幅を持って記憶されているが、3日前の時間は昨日よりも圧縮されて記憶されている。ましてや1週間前、1カ月前となると、自分にとって印象的な出来事しか記憶されていない。しかし、面白いことに一度記録された記憶は、どんな些細なことでも編集されて残る。日記に書いたり、そのことを話してみたり、写真を見ながら思い返したり。

記録により記憶が再生された瞬間、時間は圧縮され、編集される。そしてそれを再生するごとに、時間はさらに圧縮されてゆく。1カ月前の出来事と1年前の出来事、10年前の出来事では記憶のなかでその時間の幅は過去にさかのぼるほど短い。10年前に1年間ぐらしかけたプロジェクトでも記憶のなかでは瞬間の連続のものでしかない。逆に10年前、瞬間的に思いついたつもりでいても、じつのところ、数週間、数カ月、あるいは数年にわたりいろいろな人と出会い、語り、妄想し、試行錯誤し、言葉を重ね、そして忘れ、編集されてきた結果のものだったりする。

パプアニューギニアから日本に帰国する1988年、本気で人生をかけて美術に取り組もうと決心し、「地域素材、協力関係、適正技術」を手法とした美術表現を模索しはじめたことになっているが、おそらくこの考えも1986年ぐらいいから1991年ぐらいの5年間の記録と編集の結果定着していったのだと思うし、「美しさとはなにか」を教えてください。パプアニューギニアでの「野豚を追うヤセ犬」の体験も、瞬間的な感動として記憶されているが、現地でのさまざまな人との出会いや対話、体験が圧縮されて編集された物語なのだと認識している。

共有と連鎖のきっかけ

僕はひとつの視座を確保し、多くの資料や記録に触れながら物事を考えてゆくタイプの人間ではない。どちらかというつねに動き回り、体や足や手を動かしながら、いろいろな立場や角度から人と接し、空間と接し、思いもよらぬ出来事に向き合いながら、さまざまな違和感を抱き、共鳴し、脊髄のあたりになにかが蓄積され（この表現は大学時代からよく使っていたなあ）、移動中にじわじわと思いが募る現場タイプなのだと自覚している。

とくに美術周辺に流通している言葉や概念がすっかりこなくてなじめないの、あーでもないか、こーでもないかと、こびりついてくる些細な対話を繰り返しているのだと思う。2004年にブログを使い始めて、結果としてではあるが、そんな些細な言葉を記録することになっていた。現在使っているさまざまな言葉がどのように重ねられ、変化していったのか、そんな意識の変遷を読み取れるのかもしれない。

ブログは僕自身の内面との対話でありながら、いろいろな現場の人との対話の記録でもあり、それを公開する場でもあった。ブログのなかでの記録は僕の記憶を編集してゆくと同時に、それに関わるさまざまな人の記憶にも共有され、さまざまな言葉や意識へと連鎖していったのだと思う。それがいまの状況にどれほど影響を与えたかは測れないけど……。

そしてこの記録がこうやって印刷され、多くの人の対話の素材として利用され、さらに再編集されることになる。そのプロセスでなにが起こるか！ それもまた興味深いなあ。

藤浩志（美術家）

* 藤浩志「野豚を追うヤセ犬」<http://www.geco.jp/top.page/DogsWalk/YaseinuStory.htm>



パプアニューギニアの村でみかけたヤセ犬

はじめに 藤浩志 002

思索雑感/Image Trash

2004 008

- 001 client 05-20 00:01
- 002 緑視率——窓からの眺め 06-05 21:55

2005 010

- 003 目に見える風景 02-23 17:03
- 004 ブログ1年うーん、すごいかも 03-01 10:40
- 005 ステーションという場 03-01 22:36
- 006 おもいつき 05-28 09:04
- 007 動きすぎだなー 06-03 23:53
- 008 土佐の高知の桂浜 06-12 21:12
- 009 粉碎ロボ、炭焼きロボ、鑄造ロボの合体ロボ? 06-18 12:37
- 010 かれこれ10年前のイメージの再現 07-05 10:34
- 011 水戸の市内にあふれるグラフィティ 10-20 13:53
- 012 こんなにいっぱいモニターはあるのに…… 11-29 15:13
- 013 高知空港で発見! なんと流通している! 12-06 14:19
- 014 またまたたくまに1年が過ぎてしまうなー 12-31 18:54

2006 026

- 015 また今年も出張がはじまりました 01-11 12:55
- 016 structureとskin!? 01-27 09:18
- 017 街の皆で動物を飼う! 01-27 12:25
- 018 useless selectionってどうだろう? 02-25 00:15
- 019 ヨーゼフ・ボイスと化学反応と……、飽和状態…… 06-02 12:10
- 020 ものすごく小さな関係だけにおいて発生する価値の例を見つけた! 08-05 23:14
- 021 崎陽軒のお弁当のしょうゆさしを……、つつい…… 09-04 14:32
- 022 イメージはこうやって流通してゆくんだなー 09-14 13:32
- 023 頼まれる仕事ならなんでもやってきたなー 10-10 22:37
- 024 新潟県中越地震の震央から収穫されたお米 10-23 21:46
- 025 島唄・島踊りは住民参加、住民主体の原型…… 10-29 18:56
- 026 遺伝子の騒ぎどころ! 11-01 22:16
- 027 お茶うけ! 11-13 23:57

2007 046

- 028 入院中に描いたドローイング 04-13 08:36
- 029 結局、誰と……の連鎖なのかな……と、思う 04-30 23:20
- 030 プロフェッショナルとはなにか? 06-01 23:31
- 031 第0回+artsなオープンディスカッション開催 06-19 23:59
- 032 岡野バルコと岡野バルミ 06-21 22:43
- 033 風と土について…… 09-16 23:14

034	地域の活性化ではなくて地域の豊穡化!	11-13 15:35
035	まだまだこれから! 地域でのアートプロジェクト!	12-11 17:15
036	マスキングテープ	12-13 13:00

2008 _____ 064

037	展示=伝えるという罨	01-13 23:01
038	知っているようで1%も知らない日常	01-29 11:55
039	唯一の凄いいもちゃ。「カニ?」	02-22 19:15
040	世代年について	04-01 01:01
041	描くことに理由が必要である理由	05-13 23:08
042	「描く」の現在進行形draw+ing……。なんだなー	05-17 12:23
043	予想できない自分をつくる……	05-30 19:59
044	窓からの眺め、空気の流れ	08-21 23:45
045	学校の先生に向けて書いた原稿	09-01 12:44
046	結局いじっている	09-17 05:59
047	いわきから大河原へ日沼(大)さんとドライブ	10-11 17:42
048	ストラクチャル・アート?	10-23 09:33
049	鹿児島市立美術館についての鹿児島の新聞記事	11-19 23:54
050	それぞれにコアがしっかりしつつも、開放系であるかどうか。そこがポイントかな	12-21 23:32

2009 _____ 100

051	どうもだまされているような気がして仕方がない	01-04 23:12
052	無意識のなかで……。じつは相当な妄想をしている	01-28 23:19
053	珍しく夜中に夢で起きて、その延長で考えてみた	02-12 04:15
054	編集。そこにあることと、どのようにあるかということ	03-08 23:00
055	皆既日食の瞬間、常識を超えているようでありながら、公倍数が永遠に続くように……	07-22 09:28
056	70年代「平面と立体」→80年代「空間」→90年代「場」→00年「システム」……とか?	12-19 23:06
057	社会システムとフォーマット	12-23 11:49

2010 _____ 115

058	WishとDreamの違いのモヤモヤ	01-02 23:58
059	状態をいじる性質(タチ)なのかな……?	01-12 20:09
060	たとえば、「monster stick」——名づけと存在	01-13 10:58
061	引越し作業でモノにおし流されそうになりながら、モノ年齢について思いつく	05-16 15:27
062	ころろを揺さぶる——感動する。心をつくるために	06-29 06:30
063	システムと拠点——卵が先か鶏が先か……。あるいは両輪	07-04 12:39
064	日常的な行為と表現行為との違い	08-14 23:02
065	移動の数とブログ書き込み数は比例する?	08-23 08:29
066	新しい場とか機能とかステークホルダーの拡がりによってなされるシステムの更新	08-28 09:08
067	数の暴力——どのように向き合うのか	09-14 23:58
068	超識ってどうだろう?	10-08 10:11
069	基礎超識2 人の作り出したモノゴトに関する時間軸	10-08 12:45

070	基礎超識3 作品は味わうもの。美味しいかどうかが問題	10-08 13:23	
2011			139
071	基礎超識4 地域イベントと地域実験の大きな違い	01-22 18:18	
072	作業と仕事、そして労働の違いとそのあいだ ——中間領域 (b_a) について	02-14 23:21	
073	製品と廃棄物の中間領域 (b_a) その2	02-16 10:20	
074	自分の時間に向かい合うツール	02-23 23:59	
075	結果として……、連続することが多い	03-10 10:19	
076	突然敵は目の前に立ち現われて、そこから闘いがはじまる	03-19 08:38	
077	存在しないのに龍はなぜ存在してきたのか?	04-24 19:19	
078	いないのにいることと、あるのにないようなこと	04-30 18:51	
079	ブログから離れていく自分の時間	10-20 09:15	
080	過程と結果は……、じつは自己の視点と 他者の視点なんじゃないか	11-21 09:27	
081	損害賠償請求預金ってどうだろう?	12-06 20:40	
2012			167
082	3331での311のモヤモヤ会議	03-11 23:11	
083	十和田での「わからないことだらけ」の1カ月	05-06 22:21	
084	地域系アートプロジェクトに関する 雑感の再考を試みようかな	06-01 19:37	
085	イイという価値観について (再考1)	06-01 23:40	
086	地域活動での土、風、光、水の性質について (再考2)	06-02 07:30	
087	つくる時間を楽しむ (再考3)	06-03 21:18	
088	地域で表現することとその仕組み (再考4)	06-04 23:59	
089	イメージはどこから来るのか (再考5)	06-05 23:15	
090	仕組みが先か拠点が先か。それは問題ではなく、 その在り方について (再考6)	06-06 01:01	
091	そういえば藤浩志企画制作室20周年記念日だった	06-06 06:06	
092	コンピュータを使い始めた世代だからかなあ…… (再考、というわけでもないが……)	06-07 00:10	
2014			192
093	開くことと閉じること	10-26 08:49	
2015			193
094	このブログを研究のネタに使うんだって	02-09 22:05	
本プロジェクトのねらいと展望 森司			197

思索雜感 / Image Trash

クライアント……。

別に美術作家になりたかったわけでもなく、美術業界に憧れたことがあるわけでもない。むしろそこから逃れようとしてかなり長い時間もがいてきた。そうこうするうちに40も超え、企業に就職なんてできない年齢になってしまった。

今日もまた、ろくな作業をするわけでもなく、コンピュータのトラブルと雑用に追われ、時間だけを消耗し、疲れ果て、自宅までの道をドライブしつつ、ふっと「client」という存在が自分のなかにいることに気づいた。

クライアントという意味は詳しくはわからないが、通常はクライアントが外部の顧客や相談者としていてそれに対応する側がいる。どうやら僕自身のなかにはその両者がいるように思えてならない。じつはクライアントが僕自身のなかにいたんだ。

そこが大きく違うんだと思う。なにをやっても、どこにいても、どういう状況でも、どんなに他者とのかかわりのなかで仕事をしていようとも、1日24時間、じつはクライアントは僕のなかにいたんだ。

なんでいままでこんな単純なことに気づかなかったのだろう。

緑視率……。

80年代の終わり、都市計画事務所に勤務しているころ、東京の不動産価値を高めるひとつの指標として、緑視率（緑が見える割合）、空視率（空が見える割合）について話をしたことがある。都市の風景の持つ空との稜線の景観が住民の心理状態に与える影響とか、そんなものにも興味を持っていた。

もともと、窓からの眺め、特に部屋からの夕日の眺めを重視し、東京で引越しを繰り返していた僕にとって、そのことは日常生活にとってとても重要なことであり、部屋の広さと間取り、駅からの距離、建築物の築年数のみが不動産価格を決める当時の価値観に違和感を感じていた。実際、築年数50年以上の天井高の高い、水と緑が豊かな地域にある、眺めのいい窓のある物件をどれだけ探したのか。

出張が多く、格安ビジネスツアーのホテルの常習利用者である僕にとって、部屋の窓からの眺めはとても重要である。ホテルにチェックインして部屋に入ってまずその部屋からの眺めをチェックする。突然目の前に大きな壁がそびえていると落胆し、息苦しくなる。逆に空視率が高く、遠景率（遠景が見える割合）が高いと、それだけでいい仕事ができる気がする。

半年ほど前に飛蚊症にかかり、それがきっかけで緑内障の宣告をうけ、特に左目が30パーセント程度見えなくなっている事実を知って以来、とくに風景がいとおいしく感じるようになり、視線が風景のなかの緑を求めようになっている自分に気づいている。

緑内障と緑視率、関係ないけどどちらも緑か……。

先日関西の出張で、京都と大阪に宿泊したついでに窓からの眺めを撮影してみた。一方は山も含め、緑視率は20パーセント、そしてもう一方は0パーセント、空が見えたことでまだ救われた気がした。



京都で利用したホテルの部屋の窓からの眺め



大阪で利用したホテルの部屋の窓からの眺め



この写真は事務所の僕の机から見える日常の風景。モニターが七つもある。これがまた視力を低下させる原因のひとつ。メガネをかけて両目で視力が大体0.6程度。この道40年以上なので運転免許の視力検査のときは気合と勘でクリアする。右目は生まれつきの不正乱視でメガネをかけても0.1程度。中心部は見えるがその周りが見えにくい。視界のなかにぼけているところが多くあり、物音のするほうを見るのに頭や体を動かして見えるポイントを探す癖がある。たまに疲れると黒い斑点が見える。老眼が進行中で3年前より遠近両用メガネを使用。ここまで汚い風景ではないが……、今日の風景はこんな感じ。

昔から弱いのは立体映像と月や星の観測。満月でも三日月でも多重に見えるので気分は複雑。そのぶん、多重に複雑な柄が拡がっていると安心する。だからいっぱい並んでいると安心するのかな？ 遠近感がないので、子どものころはキャッチボールができずに高所恐怖症。斜面に吸い込まれる錯覚に陥る。美術大学受験のデッサンで、見たとおりに描けといわれてもよく見えないので認識で描く術を獲得する。

1 大阪医科大学眼科学教室「緑内障」
<http://www.osaka-med.ac.jp/deps/opt/glaucoma.html>

2 平島病院ホームページ「眼科（飛蚊症）」
<http://www.mc-shojin.or.jp/06eye/hibun.htm>

最近、どうも目の調子がよくない。緑内障¹と診断されてかれこれ1年。緑内障と飛蚊症²と不正乱視と近視と遠視（老眼）が進行中で遠くも近くも周辺も中心付近も見えにくい。眼科で目薬をもらい、緑内障の進行をおさえているはずだが、どうしても出張で目薬を忘れ、無理して遅くまで起きていたりして疲れると次の日、飛蚊症も発生し、風景のなかに黒いものがうろろう見える。どうも目の中心周辺にも見えないところが発生しているのか、やっぱり見づらい。

見えなくなってくると逆に視覚にこだわる。認識のなかで物事を見ようとする。生まれつき右目はほとんど視力がないのでほとんど片目の生活には慣れているが両方侵されてくるとまた日々の暮らしの風景がいとおしくなる。毎日の忙しさでほとんど気にしていない目に見える風景だが、ふと日常の生活に戻るとその風景をしっかりと認識したいと思う。

僕が風景に関わりたいたいとこだわるモチベーションはもしかするとこの目の特性からきているのかな？ 自分では自覚していないが、見えないぶん、それだけに見えないものを捉えようとする努力をしてきたようにも思える。こんなときにいつもある感情が芽生える。

「あー、絵が描きたい……！」 日常の風景の絵を描きたい。

B級動物彫刻家の楠丈以外にもう一人B級風景画家の人格でもつくろうかな。名前なににしようかな？ 風景画家っぽいのがいいね。誰か名前をつけてください。老後の楽しみにしようとしていたけど、目が見えなくなるといけないので、ぼちぼち描き始めようかな？



今日から3月、このエキサイトのブログを利用し始めて1年が過ぎる。エキサイトがブログのサービスを始めたのが1年前の2月からというので、サービス開始1カ月後から始めたことになる。とりたててそれほど意味を感じているわけでもなく、日記を書く習慣もなく、なんとなく新しいもの珍しさに始めてみたが、どうだろうか。周辺でどんどんブロガーが増え始め、彼らの日常と意識を共有しはじめ、なんだかすごいかも。

BBSを使いはじめたころ、2000年の1月、誰も来ないBBSの空間で一人佇みひとりごとをしゃべっていたりした。誰という相手もいずに、人に言えないことを一人書き込みどきどきしていたのが懐かしい。もちろん、サイトにリンクした時点でこれらの書き込みは消去してしまったが。BBSでは表面の会話や挨拶程度になりがちだったが、ブログではけっこう自分自身に突っ込むところもある。基本的に一人の空間で自分の内側に向かいつつ書き込むので、通常の対話と少し自分自身のチャンネルが変わる。最近はミクシィとの連携で友人の日記が更新されているのを知ることができるので、ミクシィ&ブログ等のツールでリンクされている人の日常は、一緒に暮らす家族の日常や、近くの友人、あるいは一緒に仕事をする同僚の日常よりも近い。不思議なことになってきた。

新しい人に出会うときもある人のことを知りたいときもこのツールにつながっているかどうかで理解度が変わる。これまでのウェブサイト上のホームページでは、その人の表面的なある面しか見られない場合が多かったが、ブログを続けている人についてはよりその人の内面に近づくことができるような気がする。そしてなによりもリンクしやすいところがすごい。トラックバック・システムなんてよく考えたものだ。

もちろんひとつの情報のツールとしての可能性でしかないが、人がその本人を表現するツールとしてますます興味深くなる今日このごろ。来年にはもっと違うツールを使っているのかな？

先日、岐阜からの乗換えで久しぶりに京都駅に降りた。いろいろ物議をかもし出した京都駅だがこれできてもう何年になるのかな？僕が学生時代過ごしたころの京都駅はいつでも工事中。つぎはぎだらけのフェンスと通路でプレハブの駅だった。

地下鉄の工事が始まる前ぐらいからおそらく30年近くはずーとつぎはぎの京都駅だったように思う。その新築に向けて建築家の指名コンペが開催されたころ、かなり話題になり、僕自身も注目していた。京都の玄関がどのようなものになるのか……。個人的にはあのデザインが選ばれたことに裏切られた気がしていたが、完成してはじめて京都駅に降り立ったとき、感情としては批判しながらも内部空間のスケールの大きさに感動したのを覚えている。たまに乗り換え等でスキマの時間があるとエスカレーターを乗り継ぎ屋上まで上り、京都の街並みを臨み学生時代の思い出にふける。

この日も30分ほどの乗り継ぎのスキマに駅の改札を出て屋上に向かおうとした。そこで眼にしたものは、盛り上がる集団……。京都のサッカーチームのサポーターのイベントで駅前の巨大な空間の大きな階段はなんだかすごく、すごく、すごく盛り上がっていた。なるほど。こういう使い方がされてたんだ。京都にそのサッカーチームがあることを示すデモンストレーション。予測しなかった京都の別のエネルギーにどきどきした。駅はまさにステーション、ステーションは拠点であり、さまざまな価値観が交差する施設であり、だれもが経由するゲートでもある。そこをキーとするネットワークの象徴的な場となりうる。

ステーションの機能はギャラリーやミュージアム的でなければならないし、ライブ会場やコンサート会場、劇場でなければならない。インフォメーションでなければならないし、ステーションとリンクするさまざまな地域の様子をブラウズできるトップページでなければならない。そしてさまざまなものが俯瞰できなきゃいけない。さまざまな活動が展開でき、街中への導線を生む魅力的な空間である必要がある。人が溜まり、流れ、集い、別れ、さまざまな物語が展開する舞台としてふさわしい空間であるべきだと思う。

先日新聞に福岡の博多駅が作り替えられるという記事が出ていてぞっとした。もちろんこれは説明のための断面図でしかないのだろうが、人々のそのような行動がどのようにデザインされるのかとて





も気になる。博多駅に降り立つとしっかりと福岡が見えるのか。アジアが俯瞰できるのか。ホークスのサポーターたちが優勝の瞬間を共有する場は確保されているのか。誰もが感動する劇場としての空間はどのように組み込まれるのか？ 九州各地、アジア各地へしっかりリンクされているのか？ そこから魅力的な導線がデザインされているのか？ 福岡に帰ってきたときに「ああー、帰ってきたんだ」と誇りに思える場となるのだろうか？ いまだにデザイン・コンペの話も聞こえてこないし企画のコンペも聞こえてこない。いったいどうなってるんだろう。いろんなアイデアや意見を持つ周辺住民や利用者がステーションづくりについて考え、話し合い、研究し、意見を交わし、かたちづくるもっとも楽しいプロセスに関わる仕組みがどのようにつくられてゆくのだろうか？ 福岡の力が問われ、2世代先まで影響を与える重要な現場なのだが……。じつは僕が知らないだけで福岡の市民は皆この話題で盛り上がっているとか？

ふと、おもいつくことがある。

たとえばこの瞬間は「桜島のみえる芋畑でいもの天ぷら」。

いまは神戸のホテルの朝食会場で陳腐なクラシックバックミュージックを聴きながら珈琲を飲んでいる状態で、まったく関係ないふとした「芋」について考えている自分に気づく。

それを記録にとどめることはほとんどないが、いったい1日何回つまらないことを思いつくのだろうか？

そんな思いつきのかけらが脊髄のあたりにこびりついて、何度も繰り返し思いつかれ、取りつかれ、蓄積してしまいどうしようもなくなったとき、動き出すのかな？ なにかが。

関係ないけど、今日は神戸NHK支局でのかえっこだー。



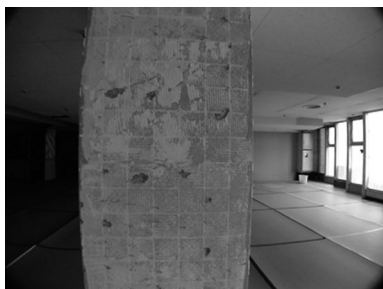
この1年ぐらいとくに動きすぎですね。今週は水曜日から、神保町の美学校、練馬区立美術館、取手アートプロジェクト、ワークプラザ勝田と打ち合わせで回り、いまから福岡に戻るものそのまま家に戻れず、神戸の名谷駅前でのカエルキャラバン第3弾の実施。六甲山牧場のワークショップには行けず。それが終わると四国の高知の四万十川へ下見に……。ちょっと動きすぎですよ。なにやっただか……。明日は娘の小学校の「楽しい楽しい運動会！」だというのに。……考えてみるとこの20年、ずっと動き続けていますよね。東京にいたころは東京都内をうろうろしつつ、地方都市へ仕事の合間で数日単位でうろうろ。鹿児島にいたころは鹿児島県内をうろうろしながら、数カ月に一度、1カ月単位で国内海外をうろうろ。それが福岡に来て数週間に一度1週間単位ででかけるようになり、最近は何日に一度1日単位で家に戻るようになった。で、今回は1日も家に戻れない。は～。



そんな移動の途中で水戸に立ち寄り、日比野さんが展覧会の準備をしているところを訪ねてみる。8月から水戸芸術館で開催される「日比野克彦の一人万博」の準備のために用意された元デパートの廃墟の最上階。ダンボールが敷きつめられ、水戸市民が自由にダンボール工作ができるための工房ができていて、七つのコーナーに日比野さんからの七つの指令が出ている。面白い。

子ども向けの工房というよりは大人が子どものときに体験しえなかった(当時削除されていた?)遊び感覚を疑似体験するための場のよう。

日比野さんの独特の手わざや所作がその現場に生であふれているのだが、80年代前半から情報や商品として流通してしまっている日比野イメージのために、それが本人の手作業によるオリジナルな空間であるにもかかわらず妙にフィクショナルな商業空間の匂いがして不思議な空間だった。



妙に商品化された空間の中でビルの内装をはがしたコンクリート面があちこちにむき出しになっていて、そのバランスが絶妙で心地いい。天井や壁がやぶれ、日比野さんの作品に登場するようなテクスチャを持つ素材がむき出しになり、商業施設の破綻の現実を強く見せているはずの廃墟空間を覆うように、僕らには懐かしい感じのする80年代の商業施設のウソっぽさがつぎはぎに重ねられ、僕にとっでは逆に心地いい空間になっていたのかな……。

しかし、あれが廃墟を離れ、ホワイトキューブのギャラリー空間に
展示されたとき、どうなるのかな……？ とにかく楽しみ楽しみ。
ねえ、Mさん。

土佐の高知の播磨屋橋、桂浜……。なぜ知っているのだろうか？ 全国各地になぜか有名なところであるが、なぜ僕らはそれを知っているのかということを考えると怖い。知らず知らずのうちに歌や昔話あるいはさまざまなメディアによって名称と漠然とした実像ではないイメージがインプットされている……。



ある時代のある策略家がかつて個人利益のために膨大な額を投資して広報を重ねた結果、現在の多くの人々の脳裏に刻まれているのか、それともふとした些細な表現が人づてに伝わり誤解が誤解を生み出しとても重要な場所になってしまったのか。人物に絡み歴史や地理の教科書に載っていて勉強して暗記させられたのか……。



たぶん坂本龍馬とセットで記憶に刷り込まれているに違いないが、名所のような気がするのはなぜだろう。その知名度をあげたプロセスに興味がある。名月で有名だとか、観月の名所であるとか……。微妙な季節の月と海の方角の関係や、砂の素材感によるものか……。個人的には京都に桂川というのがあり、僕はそこの川沿いの道を大学に通っていたことがある。その桂川との連想による僕個人だけが感じている価値観なのか。



……と四万十川のプランを考えながら、僕にとってのイメージ上での高知のシンボルの桂浜に行ってみると……。このすべての写真は桂浜の周辺に現実に展開している風景。テトラポットの島や護岸、超大型クレーン、桂浜の風景をぶち壊すために作られたような国民宿舎、なぜか桂浜に面した水族館。入り口のへたくそな闘犬場の案内。くたびれかけている観光全盛時代の亡霊のようなみやげもの屋。最近の学食のほうがましな食堂。料金が高い駐車場。駐車場からみやげもの屋への導線を無理矢理つくるための海岸沿いの不揃いの鉄格子と金網。暗いトイレ。桂浜を歩くためのコンクリート固めの歩道。で、高知市街地から桂浜へ入る入り口にある廃墟となったファッションホテル「リパティ」……。ある種の見方をすればこれがそれぞれ昭和の観光時代を彷彿とさせるキツネな田舎観光地の典型的な原風景。利用の仕方によっては闘犬もホテルもみやげもの屋も廃墟と化したファッションホテルも、編集と加工しだいで相当面白い状況となる素材。四万十川のプログラムそっこのけで桂浜再生計画構想のイメージならばいろいろ企画書に落とせそうです。しかし、坂本龍馬、まさか自分の知名度だけで、これだけの人にお金を稼がせているとは夢にも思わなかったでしょうね。



地元の青年会議所主催(?)の地域活動で、数カ月にもわたり竹炭を作って川に敷き詰め川の浄化をしようというプログラムに子どもたちが参加している。いつもは出張と重なって参加したことがないが、たまたまの休日だったので竹切りと竹割り作業に参加することに。近所の小学校の横の竹林から竹を切り出し、小学生が枝を落とし、中学生が中心となり竹を割る。

はじめはなんとなく保護者モードで眺めていたが、相当な量の竹を割ることになってきたので手伝ってしまう。用意されたナタが小さいために余計な力が必要。で、思わず没頭。ふと気づいてみると相当な運動量。スクワット何百回の状態。炎天下での慣れない運動にのどが渇き、脱水状態、筋肉がびくびくしている。

やばい。あわてて休んだが手遅れ。その後ひどい筋肉痛で動けなくなる。ところで、竹の枝を落としたやつを粉砕するトラックがあり興味津々。後ろから竹を飲み込みみがガガーと竹を砕く。おそらく砕いた竹は竹林に? これ、トラックごとロボット風にデザインしなおすと相当いい地域活動密着型のパブリックアートになるな……と取手の椿昇の炭焼き釜「窯象」²を思い出しそれとの合体ロボをイメージする。

どこかで実施できませんかね。そういえば田川の母里聖徳さんが提案していたアルミ缶を溶かす鑄造釜の車の案もあつたな³。鑄造ロボットもいいな。こんど取手のフォーラムにゆくときに椿さんと会えるので話してみよーっと。



1 一般社団法人糸島青年会議所
<http://www.itoshima-jc.or.jp/2015/>



2 椿忍術研究所「窯象、取手に参上」(2004年10月28日)
<http://ninken.exblog.jp/737467/>

3 取手アートプロジェクト
<http://www.toride-ap.gr.jp/>





韓国のソウルから少し行ったところの安養というリゾート地(?)で越後妻有のようなアートプロジェクトを行なうということで、韓国の知り合いのディレクターから連絡をもらった。時間がないので徳永君に下見に行ってもらい、現場の調整をしてもらうことになったが、とにかくなんらかのプランがほしいとのこと。うーん、10月実施のプロジェクトについていまそんな状態なので時間をかけて現場でじっくりかかわりながら考える余裕はなさそう。とりあえず、10年も前にイメージした川のカエルのプランをアンケート調査を行なうといういま興味を持っている手法と組み合わせて提出してみる。……でもやっぱりこれってマンネリ? しかし、1996年当時に考えていたプランというのをほとんどなにも実現していない自分に気づく。カイトプランとか10年かけて行なおうと思っていたプランが10年経とうとしているのになにも現実のものになっていない。発想力もイメージ力も反発力も抵抗力も衰えてきたのかな? いや、そうそう。枯れながらもじっくり作り出すような仕事を指したいと思っていたんだ……。忘れていた。でもこのままではただ枯れるだけ……。はあ……。

水戸の市内はなぜか完成度の高いグラフィティであふれている！

というのはじつは水戸芸術館¹で現在開催中の展覧会「X-COLOR/
グラフィティ in Japan」展²のしかけ。

僕が暮らす福岡の田舎町でさえも中途半端なグラフィティもどきの落書きはよく見かけるが、それが洗練されていって落書きを超えて作る側にもアーティスト意識が芽生えていった結果できたもの……なのかな。

とにかく街中のいたるところに、やたらと完成度の高いグラフィティがあるのは不思議。ここはNYダウントウンか！ さらに不思議なことに水戸芸術館の展示室の中がダウントウンの裏通りのような感じになって落書きされまくっている。

ある意味おもしろいが、ある意味とてもビミョー。

本来ルールを破るぐらいの反社会的なエネルギーから発生した行動としてのグラフィティが、用意された空間の中で用意されたエリアに収まりつつはみ出さずに（じつは床や天井などにはみ出て心配するところもあるのだが……）描かれている。自分の存在を示すマーキングのようなものかと思っていたが、これは企画展なので、企画が終わるとマーキングは消える運命。まあ、そんなことはどうでもいいのかもしれないが……。

とにかくこれも社会とのかかわり方の表現のひとつ——かかわりしろ——社会システムと個人表現が接する厚さ0.1mmのスキン（皮、膜）——みたいなのだろうな……と思いつつひたちなかの現場に移動する。



- 1 水戸芸術館
<http://arttowermito.or.jp/>
- 2 水戸芸術館「X-COLOR／グラフィティ in Japan」展（2005年10月1日～12月4日）
<http://www.arttowermito.or.jp/xcolor/xcolorj.html>



1 「ガマン・ザ・TV」
2005-01-19 11:11

家にテレビがないというのは何度か話したことがあるが、……ていうかモニターはPCの液晶を含め写真のようにいっぱいあり、自宅にあるものも含めると軽く10台以上はあるものの、アンテナが繋がっていわゆるテレビ放送を見る装置がない。

で、先日他界した義父についてのテレビ番組が今晚放映されるというのでたいへんである。子どもたちにとってはやさしい「奈良のおじいちゃん」の番組とあって、「あとからビデオで見ればいいじゃないか!」というわけにはいかないらしい。どうかオンエアをリアルタイムで見たいというので、どこか見れるところを探そうとするが、なかなかない。番組自体が9時以降の遅い時間なので、家族全員でどやどやと他の人の家にテレビを見せてくれとあがりこむわけにもいかず、ラーメン屋とか温泉とか、テレビのありそうなところで見ようとか、テレビを見るために旅館に泊まろうとかか話はどんどん大きくズレる。昔使っていた室内アンテナを引っ張り出して適当なモニターに接続してチューニングしてみるが、やはりここは田舎なのでまったく電波が届かない……。テレビを見るってたいへんですね。……てここはいったいいつの時代だ!

2 「義父の死で思う」
2005-07-29 23:24

生前、プロジェクトXの取材がきたと自慢げに話していたが、その後容態を悪くして急逝した²。義父はとても楽しみにしていたのにな……。それはさておき、テレビ見れるところどこかないかな? 電気屋? ヨドバシカメラ? 飲み屋? それとも車に室内アンテナとテレビを積み込み電波の入るところを探して出かけるとか……。

土佐の高知の高知龍馬空港で四万十川から福岡に戻るとき、待ち時間が長かったので何気に書籍販売のコーナーをうろうろ、どこかで見たような見たことないような本の山積みが目にとまる。『高知遺産』というタイトルの本。

何気に手に取り、中をパラパラブラウズしてみると、これって新開地アートストリートプロジェクト¹で井上明彦²さんが制作した『湊川新開地ガイドブック』じゃないか!

内容といい、レイアウトといい、デザインといい、タイトルの構成といい、イラストや年表の作り方といい、最後に漫画があったり、カバーをはずすと地図になっていたり、ほとんど、新開地本が雛形となって高知遺産というかたちに再編集されて制作されていてびっくり!

思わず発行人や関係者のなかに知り合いがいるはずだと思ってみると協力者に井上明彦本人の名前を発見。いや……、なんだか……、よかった。

以前から**アートプロジェクト**や**さまざまな表現活動の種は、その地域で育つよりも、じつは遠くの思いもよらないところに拡散し、育ち開花するものだ**と考えているが、まさにこれ。しかも表現によってイメージがつくられ、それがビジョンとして流通するなどといったが、まさにこれ。新開地本のイメージは、ある書籍のビジョンとなって見事に流通し、書籍化されている。しかも、新開地ガイドブックでは販売ターゲットはほとんどポイントでしかないアートプロジェクトの産物だったが、高知遺産となると、購入層の範囲が広くなり、空港でさえも山積みされる現象が! しかも僕もついつい購入したし……。なかなかやるなー。

そういえば、この本ができた当時、高松の丸亀町商店街での街づくりでなにかを仕掛けようとしてた人にこの本と新開地のプロジェクトを紹介して僕の楽座のときに来てもらったが、それが四国に伝播した最初の種かな? そのあたりのこと、どうなんでしょうか? ちょっと知りたい気がします。

とにかく『高知遺産』が売れているようなので、これは日本各地のさまざまな地域でこのイメージの遺伝子は成長するような気がして



1 「新開地アートブックプロジェクト「新開地アートストリート (SAS) ——まちの地質調査」
<http://www.kavc.or.jp/art/sas/index.html>

2 INOUE Akihiko
<http://w3.kcuu.ac.jp/~aki/>

ならないのであるが……。とりあえず、僕の思いもこの『高知遺産』とはかなりシンクロするのでたいへん興味深い流れではあるのです。さて、この流れ、もっと加速すると何かが変わると思うが……。つまり流れない加速しないという四万十的な流れなのですが……。

また、瞬く間に1年が過ぎる。なにをやらうとするのではなく、ただ流れるままにまた1年が過ぎてしまった。

ほんの数年前まで毎月のように就職情報誌を定期購読状態で読み、就職先を探していた。なにか自分を変える就職先があるに違いないと思い、いろいろマークしてみるものの、身の回りの雑用と日銭のために頼まれる仕事を断れないままに就職する時間がないままに月日が流れ、35歳の年齢制限でかなり就職先が限定され、あせっているうちに40歳を過ぎ、いつしか就職情報誌に希望を見出せなくなり……、その代わりといっちはなんだが、そのころから、このまま貧乏暇なし状態の個人商店、自転車操業でやってゆく覚悟を決めたような気がする……。

将来がわからないように自分を持ってゆく……はずだったが、なんだか最近1年がますます急激に流れているので流れ着く先が見えてしまいそう……。そろそろ澁みが必要かな……。でもその澁みから抜け出すエネルギーが残っているのかどうか……。

とにかく来年はどこに流れ着くのやら……。

はあー。年末やねー。





長い休み——といっても家の整理やら新しい自宅の事務所づくりやらでゆっくりした記憶はないが——が終わり、また今年も動き出しました。で、久しぶりに関東出張。美学校→ワークショップに関する知財研究会→東雲の小学校への説明会→バングラ打ち合わせ→登戸の人とうちあわせ？ などなど、関東にいます。



今年はどんなメディアに興味がゆくのかな？ とりあえず記録メディアを変えたいなー。

サイトも大改造したいなー。

ところで、写真は僕が暮らす地元の地域の新年の初寄の様子。22軒の家長が集まりその年の行事の役をくじ引きでいろいろ決めて皆で食事、日本酒をくろう。

バン格拉デッシュからの帰路で目にする街や都市やすべての風景が、景観といってもいいのかな……。いやー、すべてがストラクチャーとスキンに見えてきた。これまではストラクチャーには目がいていたがスキンという視点で見えたことはなかったなー。

たまたまコレクションしている洗剤のボトルを洗うと、偶然泡がきれいな模様をつくる。この目に見える状態すべてがスキンだとする、で、この泡の模様ができるにはある構造があり、それを維持するストラクチャーがある……。逆にこのスキンをつくるためにはそのシステムを理解し、ストラクチャーをつくるプログラムを理解しなければできない。





奈良市民には見慣れた風景かもしれないが、奈良市の中心部には鹿がうじゃうじゃと歩いている……？

見慣れた風景！？

いや、よく考えてみると日本の都市でこの風景は珍しいですね。しかし、やっぱり動物がいる風景は和む。やさしい気分になれるのは僕だけでしょうか？

奈良はなぜ鹿なのかわかりませんが……。羊やヤギではいけないのかな？

ウサギとか、カンガルー系のやつとか……。ロバとか、馬とか。個人的には山羊がいいかな。亀とか。

公園とかでみなで飼うとか……。

鹿せんべいの売場の周りに鹿が集まっていたのはなんとなく悲しかったけど……。

どこか本気で仕掛けたい地域があれば一緒にやりましょう。

この数日、僕の廃棄物のコレクションに呼び名をつけようと考え続けてしまっている。こうなってしまうとだめだ。脊髄あたりにこびり付いてなかなか離れてくれない感覚。

こうなってしまうと、どうにか形にして体の外に出さなければずっとそれに捉われてしまう。しかし、体から外に出したら出したで、今度はそれを抱え込みまた動かなければならなくなったりするが……。

長い場合は数年にわたりこびり付き、早いものでも数週間はこびり付く。染み出てくるような感じ。

きっかけは先日skyjackのメンバーが屋上にカフェをつくるということで、¹作品のための素材をうちのスタジオに探しにきたこと。これらの表現活動に僕のコレクションの廃材が使われるというありがたい事態に対して、じゃあ、その素材に名称をつけようか……というところからはじまり、僕の頭のなかではその延長にある僕の活動のベクトルをぐるぐると考えてしまうようになった。

もうすでにビニプラやポリプラを超えた全素材のコレクションについてのネーミングなので、今までのビニプラコレクションとか、ポリプラネット系ではいけないし、コレクションというのも僕のなかでは使い古したのでちょっとしたズレが欲しいところ。

コレクションを整理していてこれらはある種のエレメント (element) なのかなと思うようになり、eleの重なりから**useless elements selection** になり、今日「アトリエ」で友人に相談して**useless selection** がいいのではないかと。

……もうちょっと熟成してみよう。

……最近本当にいやになるぐらい未整理でゴミ化してきたので、ここいらでひとつ高級ブランドにも匹敵するような名称でもつけてやらないとやってられない。

たんに素材を提供するだけの表現。



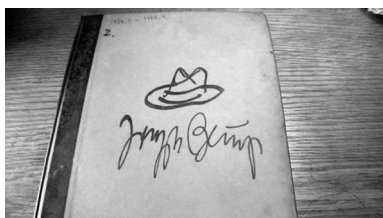
1 skyjack屋上日記「藤さん工房リベンジ」
(2006年2月16日)
<http://okujyoblog.exblog.jp/852064/>

展覧会とかパフォーマンスとかワークショップとかにかかわらず、人の体験に関わることすべてについていえることだと思うが、あることがら、出来事、物事に接したときのその対象からの伝わり方でさまざまにある。

出会った瞬間にガツンと衝撃を受ける「**ガツン型**」、そのときはなんでもないことだけれどもジワーッと浸透してくる「**ジワーッと型**」、なんじゃこりゃと不可解に思った疑問が腫瘍のように残りつつも知らず知らずのうちにモノゴトに侵されていく「**ナンジャコリヤ型**」、嫌だなー、嫌いだなーと思いながらもそれを気にするうちに無視できない関係になってしまう「**イヤヨイヤヨ型**」、ほかにもいろいろ……

これらは個人の意思というよりは、趣味志向というよりは、むしろ化学反応に近い状態で反応が引き起こされるような気がする。

おそらく条件として主体が化学反応を受け入れる状態にあること。そしてその反応を十分に促す触媒があること（この触媒の問題から美術館とかの施設の問題とか地域環境の問題とか深められそうな予感が……）。



経験値と年齢が反比例する状況を捉えると歳をとればとるほど主体の経験値——つまり化学反応歴——は多くなるので、化学反応しにくい体質になっているのかもしれない。

それに比べると年齢の重層が少ない主体は化学反応を受け入れやすい状態になっているといえる。

……なんてややこしい表現をしたが、最近の僕の周辺の活動を研究対象にしようとしている人からヨーゼフ・ボイス¹との関わりを質問されて、1984年のノートの記録を探し出した。



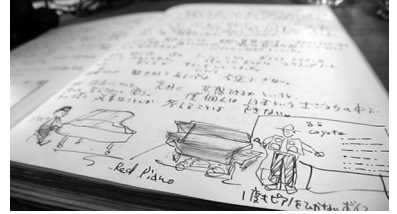
僕としてはまったく無自覚で当時衝撃的な出会いをしたわけでもなく、それほど意識したわけでもなく、むしろあまり詳しく知らないが……。当時のノートの記述を見る限り、ボイスの活動に興味を持って当時京都から東京までパフォーマンスを見に行っているし、そのパフォーマンスや展示についてむしろ批判的なことを書いているが、ちゃんと当時のノートの表紙にはサインももらっているし、かなり意識していることがうかがわれる。

1 Wikipedia「ヨーゼフ・ボイス」
<http://ja.wikipedia.org/wiki/ヨーゼフ・ボイス>

僕にとってボイスはジワーツと浸透型？ とにかく経験値の少ない状態で多くの化学反応を受け入れようとしていた状態であることは確かで、当時経験した多くの事柄が確実に現在の僕自身の活動の根っここの部分をつくっている。

それからすれば、いま周辺の現代美術といわれているもののなにを見ても飽和状態を感じるし僕自身になんの浸透性も衝撃もないのはそういうことなのか……。

とにかくこの飽和状態をどうにかしなければ……。



1 「義父の死で思う」
2005-07-29 23:24

奈良の義父¹と義母が他界し、彼等が残した遺品の整理を手伝う。

ソーラー・エネルギーの実用化に向けて生涯をささげた義父とそれを支えた義母であったが、その七十余年の人生を物語る家具、日用品、衣服、書籍、論文、資料、写真等……。

モノゴトの価値は誰にとって、どのような時期に、どのような状況で接するかによって変化する……。つまりさまざまな関係性のなかに価値が生まれ、ある状況の変化とともに価値は失われてゆく。

ある個人にとって、とても大切だったモノがある時期を過ぎるとなんでもないものになってしまうこともあるし、なんでもないものがある時間と場所を経由することでとんでもない価値を生み出すことだってある。

つまり絶対的価値ではなく相対的価値……。

しかもそのなかでも近年一番興味深く深めたいと思っているのが、**誰と**そのモノゴトに対峙するかによって変わる価値について……。



義父の遺品のなかにあった1970年代のソーラー・エネルギーに関する研究報告書は当時その実用化を夢見た開発者たちにとっては相当価値の高いものだったに違いないし、数百枚はある老夫婦の旅行の写真はその旅行に同乗した家族や友人と一緒に見るから価値がある。

逆に、たまたま知り合った人の家で彼等の結婚式や彼等の子どものアルバムを見せられる苦痛を体験したこともある。彼等にとっては大切なものだとは思いが……。

ということで、ほとんどいつかは廃棄処分される運命にある数百枚におよぶ旅行の写真……。

そんななか、義父母がカラオケを歌っている数枚の写真が目にとまった。1997年の友人たちとの旅行写真の中の一コマ。彼等にとってもそれほど意味深い写真だとは思えない。

もちろん、つい最近までは僕にとっても誰にとっても価値のあるものではなかった。ただ富山県の氷見のアートプロジェクト²に参加し

2 アートNPO ヒミング「ヒミングとは……」
<http://www.himming.jp/2-about.html>

て、その途中で訃報を受けて直接ここに来た僕と妻とわずか数名の友人関係において妙な価値が発生していることに気づいてしまう。

つい数日前まで10日間もの長いあいだお世話になっていた氷見の永芳閣の浴衣をきている10年前の義父の姿。

これは多くの人にとってなんでもないものだが、僕と妻と永芳閣³のおかみと対峙したときにほんの少しだけ価値が発生するかもしれない予感。

ということで永芳閣のおかみのブログ⁴にトラックバックするという行為によって初めて発生する価値。

まあ、モノゴトの価値なんて多かれ少なかれそんなもんかな。で、表現というのはこうやって写真を撮影し、文章を書きブログにアップしたりしてトラックバックをつけるという小さな行為全体。

この表現は作品とは呼べないが……。しかし、この延長で……。

想像を絶するくらいすごく大きな関係を作り出したものが数億円の絵画になったりするのかな……。

興味あるなー。



3 氷見温泉ホテル 永芳閣
<http://breezbay-group.com/eihokaku/>

4 氷見温泉永芳閣女将と板前のおいしい日記
「濃すぎる夜だぜ」(2006年7月28日)
<http://blog.eihokaku.net/?eid=90462>

とても小さなネタですが……。



横浜にある東京ガスの環境エネルギー館で行なったイザ!カエルキャラバン¹。

そこでスタッフに配布されたお弁当の片隅に珍しいものを発見してしまう。

赤いキャップのものでもなければ魚の形もしていないちょっとだけ小ぶりのしょうゆさし。

- 1 イザ!カエルキャラバン!
<http://kaerulab.exblog.jp/>

ちゃんと崎陽軒とロゴが入っている。



このしょうゆさしのロゴでこのお弁当がああ崎陽軒²のお弁当だということを知る。さすがに横浜。

一般的にはなんの価値もないゴミの一部にしかならないのだろうとは思いますが、1997年1月より家族全身体制で家庭内の廃棄物を念入りに洗浄して分別してコレクションしてきた僕にとっては横浜でしか手に入らないとても貴重な珍しい素材。しかも30名近い人がこのお弁当を食べるので一声掛けるとこのしょうゆさしのコレクションができてしまうことに気づき戸惑う。

- 2 崎陽軒
<http://www.kiyoken.com/>



こんなことはみつともないことだろうなと思いながら……、変な人だと思われるだろうなと思いながら……、しかし、家族が喜ぶ姿とこれを利用してつくられる鳥の姿を想像してしまい……。つついスタッフのみんなにこのしょうゆさしの回収をお願いしてしまう。

考えてみると1997年の1月、家庭内の廃棄物をコレクションしはじめの前にメキシコのチャパス州で開催された国際彫刻シンポジウムに招待されて約1カ月メキシコに滞在したとき、毎日30名近い作家やスタッフに配布されるランチボックスに使用されていた発泡スチロールのトレイに違和感をおぼえ、皆に呼びかけてせつせと毎日回収して洗浄して……、最終的に小さな町の教会で開催された彫刻シンポジウムの報告の展示会の作品の一部として出品した。

1カ月近い滞在中に作家たちが消費した1000個に近い発泡トレイをそのままハンモックに詰め込んで見せる表現……。あのときは本

当に胃潰瘍になったんですよね。いろいろ個人的につらくて。

それが家庭内の廃棄物を集める前に行なったコレクションというか
たちの最初の表現。で、メキシコから帰国したら福岡の引越した
ばかりの農家で妻がゴミをたまたま捨てられずにいてコレクション
していたというのが発端。

とにかくこれを鳥の形にしてイザ！カエルキャラバン！2006年横
浜バージョンの鳥を制作しようかなと思います。

完成したら写真撮影してここで公開しますね。

**で、問題は結局そこなんだなと思うんですよ。性質（たち）なんで
すよ。職業意識ではなく性質（たち）。**

**必要ではないけどしてしまうという性質！ 周辺の他の人たちには
なんでもない事柄が気になりつついつい行動にってしまうという性質。**

そういえば……。富山の氷見でのヒミングで会場整備のために抜き
取ったさび釘を使って鳥を制作して会場の片隅に展示してしま
が……。なんとヒミングが開催したオークションでプログラムに参
加していた若手漫画家の普津澤画乃新⁴（ふつざわかくのしん）君が
僕の釘鳥を「サンキューフジサン！」という価格でご購入いただ
いたとか！

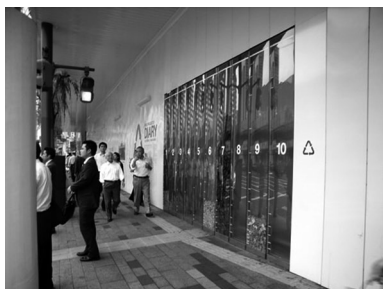
3 「軽茶ステーションという構想」
2006-07-24 09:46

4 漫画大辞典「普津澤画乃新」
<http://seesaawiki.jp/w/peko4852/d/%c9%e1%c4%c5%df%b7%b2%e8%c7%b5%bf%b7>

いやー、ありがとう。ありがとう。感謝感激です。ちなみに僕も『赤
マルジャンプ』購入したからね。ジャンプを購入したのは生涯で最
初で最後かも。

沖縄に出品中の2005年に出張したホテルで集めた髭剃り⁵はいくら
で売れるかな……。

5 WAANAKEY'S BLOG「作品展示9月1日～15日
まで!」
<http://waana.exblog.jp/3670417/>



飛行機までのわずかな時間の隙間に久しぶりに銀座に立ち寄ってみると……。

あれ？

工事現場のフェンスに……。

どこかでみたことのあるような風景を発見！



あっ！ これぼくがやりたいと思っていたこと。

やられた！

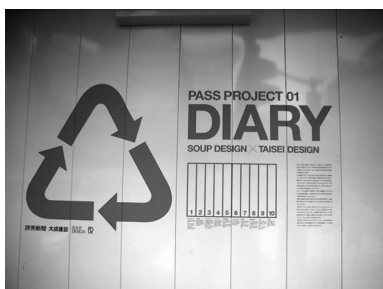
これは建築現場の廃棄物（木片、鉄材、プラスチック、コンクリート片など）をチップ状にしてストックしつつ見せてるショーケース！



そうか、工事現場のフェンスできたか！

なるほど。大成建設¹とデザイン会社のコラボレーションのプロジェクト？ アートプロジェクトのデザイン化。

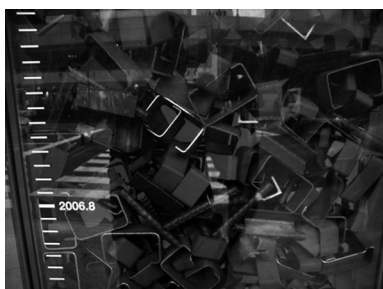
イメージが流通しているじゃないですか！



きれいなポリカーボネイトのケースにあまりにも不自然にきれいに切り取られた鉄材の破片。

これわざわざ切りそろえている人がいるな……。

とにかく僕が1999年に立ち上げたもやもやが7年を経由してイメージとして流通しビジョンとなって消費されている現場に出くわし、複雑な気持ち。



この手法、もっといろいろなところで流通するぞ！ きっと……。

たまには街を歩いてみるもんだ……。

1 大成建設設計本部
<http://www.taisei-design.jp/de/index.html>

ハードディスクとケーブルが急遽必要になったので、鹿児島島の郊外に新しくできた大型の電気屋にあわてて買いに行く。

するとその電気屋の入り口の目の前にずいぶんと懐かしい中古車屋のカエルのマークの看板が……。

鹿児島にいてほとんど収入になる仕事がなく、石橋問題と合唱に忙しくしているころ、知り合いの知り合いが新しく中古車屋をオープンするということで依頼されたロゴマークの制作の仕事。

石橋取り壊し反対運動を行なっていることでちょうどカエルのキャラクターの絵を描いたりしていたので、「カエルの絵ならありますよ」と答えて一晩で仕上げた唯一のものがこのカエルのマーク。

これ以外は制作する気もなく、他を頼まれたら断る気でした。

なぜかカエルがタイヤを履いている。

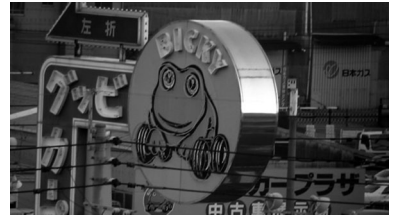
カエルがタイヤを履いていることに意味があるのではなく、たまたま石橋保存のキャンペーンのためのカエルのキャラクターの絵を描いているときに中古車屋からロゴを頼まれたのでタイヤをつけただけのもの。

この仕事でいただいたお金でそのお店で中古車を購入してその後15万キロは乗った。

しかし考えてみると、営業活動はほとんどしたことがないが、飛び込んでくる仕事をほとんど断ったことがない。ギャラの多い少ないにかかわらず、仕事の内容にかかわらず、なるべくアートから遠い仕事に関してはとくに断ろうと思わない。

逆に、たいへんそうな国際展へのプロポーザル提出の依頼とか、欧米での展覧会への出品依頼とかについては、お金になりそうでもなんとなく会場の雰囲気とそれにいたるプロセスが読めるので断った記憶がいくつかある。

しかし、美術活動とは無関係な仕事ほど、めったにできないので喜んでやってきた。



性格がねじれているのか、自分の仕事を限定したくないのか、美術の中心部に行くのを避けたがる意気地なしなのかわからないが……まあ、しかたない。

このカエルの看板……、考えてみると僕の今までの仕事で10年以上継続して設置されているものでこれだけ大きなものはないなー。

なんだかこの看板、がんばって働いている感じがして妙にうれしかった。

知らないうちに「ピッキー」という名前までついているし……。

新潟県中越地震¹から今日でまる2年。

災害に遭遇するとこれまで見えなかったものがいろいろと見えてくる。

はるか地下に潜む断層もそうであるが、日常は考えたこともないようなその土地の地層の歴史。水害などでは微妙な高低差が明暗を分け、はるか昔の土地の記憶や経験がそのまま反映されたりもする。

そして、人間力、地域力、それぞれの関係性、さらにさまざまな社会システム、政治力、経済力……。

日常では意識できない大きな地球規模の変化……。

そんな地表での人間の営み。

それを象徴するかのよような稲穂をもらってきた。この写真がそれ。

新潟県中越地震の震源地の中心の真上がたまたま川口町の山深い地域の棚田で、その中心から直径3メートルぐらいのところの田んぼから先日収穫してきたお米。

写真のお米がそれ。

これを福岡で植えて育ててくれと頼まれた。

…

今後起こりえるさまざまな出来事を乗り越える力の象徴としてのお米になりえるのか！

とにかくそこから多くのことが動き始めているし、ここからなにかが始まる。

1 新潟県「新潟県中越地震に関する情報」
http://www.pref.niigata.lg.jp/bosai/chuetsu_daishinsai.html





1 旅フォトギャラリー「奄美八月踊り」
http://homepage3.nifty.com/studio_pelant2/kasari/hachigatsuodori.html

2 パプアニューギニアレポート「ラバウル・マスクフェスティバル」
http://www.png-japan.co.jp/pngreport/rabau_mask.html

奄美大島の生活にまだなお高齢者を中心として染み付いている島唄・島踊り¹。

奄美大島では8月のある日にはまちの辻を移動しながら昼中から夜中まで唄い踊り続けるのだとか。

そこでは住民の皆が唄い手であり、演奏者であり、踊るのだとか。

皆で円環になり、海辺で、青空の下で、星空の下で、皆で掛け合いの唄を唄いあいながら、鼓動のようなミニマルなリズムをトランスを求めるかのように繰り返す。

それは皆がつながり、日常を飛び越える術だ！

僕が20年前にパプアニューギニアの田舎²で体験したものと……。

あるいは10年前にパキスタンの田舎で体験したものと……。

なんらかの新しい社会システムに組み込まれたアプリケーション（もちろんニューギニアやパキスタンほど過激ではないが……）。

日常の中にごく自然に、あまりにも普通に組み込まれている……。

いや、いいなー。

ところで、この動き、首・手首・肩・腰・ひざ・足首とひねる運動の連続のために、相当血流は活性化するんだろうな。

で、脳内ではなにかえも言われぬものが分泌されているんだろうな……。

奄美大島の犬熊（だいくま）というかつおの漁港の集落。

僕の父も母もこの集落の出身で、両親の記憶の限り父方の祖父祖母も母方の祖父祖母もこの集落の出身であるらしい。そのさらに上は定かではないが……。

戦争がなければそのままその集落で暮らしていたのかもしれない。

とにかく父親の世代は戦争で人生の多くが変化させられ……、結果として両親とも奄美大島を離れて暮らす人生を歩んだ。

とにかく自分の遺伝子のなかに組み込まれたいろいろな認識できない感情や興味、趣味、嗜好はこの地域に多く潜在しているのかなど……。

僕の祖父・藤三太郎（漫画のような名前だが……）がこの集落の大工だったことは話に聞いていて、その三太郎じいさんが若いころに建てたと聞いているのがこの集落の山手にある龍王神社。

そこにある手水鉢に龍の細工モノがある。昔はなかったような気がするなー。

この地域はキリスト教が盛んで、僕の曾祖父の時代は皆キリスト教徒だったとか。それが原因で先祖の墓を祀るという習慣が断絶されたというのは父たちの話。

海岸になびくコイノボリ。……ではなくカツオノボリ！

なるほど！

そうそう。田中一村が通っていた大島紬の工場や魚の写生をしていた魚屋もこのあたりにあったという事実は直接の関係はないが……、なんだかうれしい。

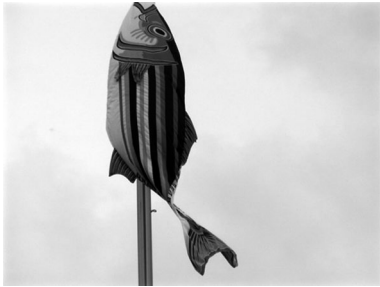
集落の端にわずかに残された自然の海岸。

おそらく僕の遺伝子にはここで遊んだ記憶がかなり重層に組み込まれているのだろう。



1 怪異・妖怪伝承データベース「竜王, 弁天」
<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/0770118.shtml>





そこで戯れるカラスを眺める。

なんだかとても自然な不思議な情景。

心騒ぐ。

集落の端に墓地があった。



そこに藤家の墓を見つけ気になってみると大正時代になくなった藤都喜安さんほか2名が入っているだけの様子。そのあたりでは一番小さく古いお墓。

僕の父親の名前は藤都喜二で叔父が都喜七なのでかなり近いはずだが、父親に聞いても……、「???’」の表情。

都喜元さんという名前は3世代遡るところで聞いた気がするが……。



先祖の霊を大切にすることよりも経済成長のほうが大切だった世代の人だからあまり興味がないのかもしれない。

子どもの頃いったいどの墓をお参りしていたのだろう？

で、ふとまわりを見渡すとせいぜい数百程度の墓。

一世代遡ると2家族の遺伝子を受け継いでいるという事実を単純計算してみると7世代遡るともう128家族の先祖の数になる²ので、このあたりの墓の数に等しい。

藤家の墓の意味を考えるよりもこの墓地全体をお参りすることの意味を感じつつ、気になる墓それぞれの全体にお参りする。

で、村を出たところにある大きなカエルの石像。

親子で「無事カエル」だって……。

なんだかな……。

龍、さかな、カラス、墓、カエル……。

2 藤浩志「33年 33年 66年 66年 99年 99年」
<http://geco.jp/top.page/DogsWalk/%82h%82m%82t.pdf>

まいったな。





そうか、お茶うけだ！

おちゃうけ！

ochauke!

なんでいままで注目しなかったんだろう！

お茶請！

ちゃうけ！

ちゃうけ？！



最近、奄美大島から味噌を買って帰ったのがきっかけとなり、それに鰹節とかいりごとか黒砂糖とか黒ゴマとかピーナッツとか、いろいろまぶしながらアレコレとお茶請味噌をつくるのがマイブーム。

ほんの1週間ぐらいだが、出張なく自宅にいるのでつついこのよ
うなものをつくってしまう。

お茶請はお菓子だけではない。お漬物もお茶請。

漬物をつくるのも好きで漬物も好きだが……、とにかく「お茶請は最高！」

お茶請はその地域独自の素材を重要視し、風土と絡み、日常に絡み、コミュニケーションに絡むツールだ！

お茶請の向こう側には幸せで懐かしい空気がある。

ああ、なんでこんなに素晴らしいツールにいままで注目しなかった
んだろう。

たまに家で過ごすのもいいものだな。

で、じつはお茶請お茶請といいながら、実際は黒糖焼酎とあわせて
みたり、芋焼酎とあわせてみたり、麦焼酎とあわせてみたり……、

なんだ焼酎ばかり……。

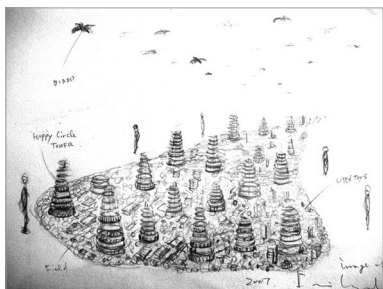
しかし、ああ……、お茶請、お茶請ですよ。

これ使えますよ。きっと。

で、数年後には来ますね。ochaukeブーム。

……たぶん。

はい。失礼しました。仕事します。



入院中に描いたドローイング

かえっこをこのまま20年ほど続けてゆくと、このような風景をつくる素材が揃うかな……と。

で、北京で行う展覧会のイメージとして住友さんに送って見る。

もちろんこんなスケールで具現化できるわけではないが……。

だって永遠に続く風景ですから。

でもこの風景の増殖のきっかけになったりするかな。

そこになにかあると、とにかくいじる癖のひとがいる。

さわり、あつかい、あそんでしまう。

別になにをつくるという目的を持つわけでもなく、ただあつかう。

子どもたちを砂浜につれて行くととりあえずそこで砂をさわり、掘り始める。

かなり初期の段階でそこに誰といたかによってある瞬間、なんの疑いもなしに目的化される。

「ああ、トンネル掘ろう！」と横の大人がイメージと目的を与えることで砂いじり＝トンネルづくりということになってしまうのかもしれない。ちなみに僕はトンネルづくりばかりしていた。

うちの子どもたちは地域の祭りの影響¹か、もしくは僕がある時期に妙な情報を与えてしまったかわからないが、とにかく祭壇をつくり海にお供えをする。

一番下の子はまだなにやらわからない状態で、犬と一緒に散歩していたのが影響したのかとにかく掘り続ける。

そんなものかもしれないな。

とくに目的があったわけでもなくただ扱っていただけなのに、絵がうまいとほめられて、美術だと勘違いし、それに疑問をもちつつも、表現を極めようとその気にさせられている。

その時々誰かと一緒にいてなんらかのインフォメーションを与えられ疑問を持ちながらもその気になってゆく。その連鎖がいまの状況を生み出しているのかな。

そして僕もまたいろいろな人にインフォメーションを与えつつ誤解の連鎖を生み出しているのかもしれない。

もともと素材に対峙したときについ扱ってしまう癖をもっていただけなのに……。



1 「筑前深江の川祭り」
2006-07-02 06:42

鶏がらスープに浮かぶ油の斑点を見つけると、つついお箸で合体させようとするみたいに……。

結局受けた情報の連鎖が活動を更新させてゆくのかな……。

横浜でふと時間に隙間ができたのでBankART Studio NYKに立ち寄ってみる。

そこは20名を超えるアーティストがスタジオとして公開制作をしている現場。先月行なった地震EXPOの会場が見事に作家のスタジオに変わっている。

これがギャラリーとか、美術館とかの面白さ。中身が変わると空間ががらりと変わる。模様替えが大好きな僕にとってはこの変化がたまらない。

空間を扱っている作家は皆、じつは模様替えフェチだったりして……。

その会場で、久しぶりに10年来の友人の作家の開発君や去年取手で知り合った足立君とかに出会う。彼らはその参加作家。

写真は足立君の新作の剥製。

開発君は表現が微妙にシンクロしていてずっと興味深い作家のひとり。彼の表現は理由なく感覚の部分でやたらと理解できる。10年以上前に僕が鹿児島でカフェを経営していたころに365日かけて日本全国365カ所を巡るプロジェクトを行なっていて鹿児島のお店でもトークとパフォーマンスをやってくれた稀有な存在。

しかも僕のビニプラと同時期に彼はずっと発泡スチロールを扱った表現を展開している。

新しい作品も服をそのまま解体してつくるぬいぐるみ系？

彼らの活動を眺めていて、1992年にいまの個人事務所をつくったころ、プロフェッショナルとアマチュアの違いはなにかという問いについて考えていたことを思い出した。

その活動に一生涯というものを本気でかけているかどうかの違い。

それでお金を稼いでいるかどうかという問題を超越して、人生というリスクをそこに投入できるかどうかの本気度の問題なのではないかと考えていた。



92年当時、作品のためにインタビューを行なった松井孝典さんに「結局、個人ができることといえば、生涯という時間のすべてを使って理解しようとする事しかできないんだから」と一喝されて、彼の本気度からそれを教わった。

その仕事に生涯をかけて本気で取り組んでいるかどうか。そこにプロとアマの違いはある。

彼らの姿を見ていてなんだか原点に立ち返り、そんなことを思い出した。

○○+artsという考え方。

あくまでもartsを主語にするのではなく、○○が主語となり、既成概念にとらわれない常識を超えた手段で○○に対峙し、○○に関わる手法としてのarts。

それを探求しようとする視点。

artsは人間の作り出すさまざまな技術のなかに含まれる。

ハイテクノロジー、ローテクノロジー、適正技術、伝達術、表現術、描写術、再現術、制作術、コミュニケーション術、段取り術、運動術、発声術、演奏術、振舞術、所作術、笑顔術、説得術、切捨て術、料理術、企画術、生活術、編集術、整頓術、分類術、移動術、就寝術、etc.

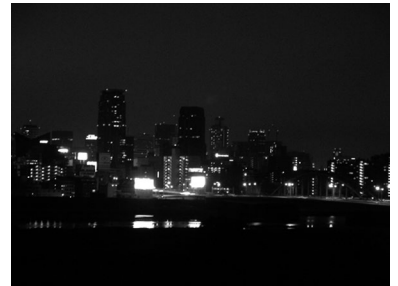
……あー、きりがいい。

そのさまざまな技術のなかでも、一般的で常識的な技術を超えて、だれもが予想できないような突拍子もない技でありながら……、しかも、感動をとまなう技術について、人は芸術だ！と呼んでいるような気がする。

そのような、相対的な関係において「超えている技術」をartsと呼ぶのかもしれない。

体操の世界において以前、ムーンサルト（月面宙返り）という技術は芸術的だったが（ちょっと古い？）、その技術が流通してしまった現在、観客はそれを超える技を求めてしまうように、つねに流通している技術との相対的な関係において、感覚的なところで芸術性は評価される。

ラーメン屋の世界でも、一昔前まで「¹一蘭」や「²一風堂」というラーメン屋はラーメン屋の一般常識を超えて芸術的だったかもしれないが（そうでもない？）、これだけ流通してチェーン展開されてしまうとそれを芸術的だと感じる感覚は失われてしまうものだ。



しかし、それらが以前は確かに常識を超えた感動を伴う存在——芸術的な（artsな）存在——であり、人の心を捉えたから、結果的にそ

1 天然とんこつラーメン 一蘭
<http://www.ichiran.co.jp/>

2 一風堂
<http://www.ippudo.com/>

の技術が流通し、その世界の時流を変えていったのだと思う。

そこに+artsな価値はあるのだと思う。

そのようにつねにartsは感覚的な相対的なところにあり、人の心を捉えることができるかどうかというところにある。

そのような技術を個人の生活の内側、あるいは延長にあるさまざまな事柄——、つまり〇〇にぶつけてみる概念が+artsといえるのではないかな。

じゃあ、〇〇のところに挿入される身の回りの事柄はなにか……。

僕として現実的に関係が深いのは……、生活、家族、老人、子ども、田舎暮らし、自然、収入、祭り、etc.

基本計画書的には福祉、教育、防災、環境、商業、工業、農林水産業、環境、医療、経済、etc.

場という視点でとらえると、都市、サイバー、山林、海、河川、道路、住宅、橋、広場、たまり場、etc.

ほかにも……、メディア、こそだて、ともいく、屋台、ペット、散歩、巡礼、サイン、移動、旅行、食事、おやつ、お茶うけ、体力、気力、etc.

あーきりがない。

そうそう。そんな〇〇+artsなことについてディスカッションをする場を関西にもうけることになりました。

今日はそのディスカッションのためのディスカッションが開催され、今後毎月1回くらいのペースで開催されることになりそうですので、興味のある方はぜひご参加ください。

岡野バルブのさび付いていたバルブが、思わず、昔つくっていても京都芸大の池にいる「ハニワ」に見えてきた。

リバーウォーク北九州の前の川沿いにいい感じの池があった。

で、

ついついこんな絵を描いてみた。

岡野バルブさん。

こんなに力ぬいてごめんなさい。

ごめんついでに……。

バルコとバルミという名前をつけてしまった。

ああ、これはいかん。つくってしまいそう。

- 1 Fuji, Hiroshi Works「ゴジラとハニワの結婚離婚問題」
<http://www.geco.jp/top.page/idea/FujiWorks/Works.html#haniwa>





- 1 「三重県の伊賀でのアーティスト・イン・レジデンスでプログラムでの基調講演」
2007-09-08 23:25

- 2 log osaka web magazine「log people
vol.16:iop都市文化創造研究所 永田宏和」
[http://www.log-osaka.jp/people/vol.16/
people_vol16_1.html](http://www.log-osaka.jp/people/vol.16/people_vol16_1.html)

風と土で……、風土。

伊賀のアーティスト・イン・レジデンス¹のテーマがこの風と土に絡んでいた。

で、シンポジウム会場で若手作家の「はくまえすすむ」が勢いよく疑問をなげかける。

「風と土は本当に融合するのか？」

その疑問がずっと頭にこびりついていたのだと思う。

今日の住民参加者ゼロという画期的で前代未聞のワークショップの帰り道、永田さん²が僕に疑問をなげかける。その疑問は違う質問だったと思うが、僕にはこのように聞こえた。

「僕らは土にはなれない。それをどのように捉えればいいのか？」

そこで伊賀での質問を思い出し、風と土について思いをめぐらす……。

土が熱を発することで上昇気流が起こり、風が発生する。

土が熱を発することがことのはじまり。

風は種を運ぶ。

風は雨雲を運び雨を運ぶ。

種に水が注がれ、光りが当たることで発芽する可能性が生じる。

土に養分があれば見事発芽し、それがかれるかもしれないが土の養分となる。

発芽し、開花し、花粉や種を風が運ぶ。

周辺の土が豊かになる。

……豊饒化。

風と土は融合するものとしてあるのではなく、協力関係にある。協力関係は信頼関係の上になりたつ。

信頼の上になりたつ土と風のいい協力関係がその土地独自の風土をつくる。

……そんなものかな。

……とすれば

いまの僕らの役割はあきらかに風。

良質のその土にふさわしい種を運び、雨雲を運び、光りを運び、花咲くころには静かに眺め……。

土がなければ空虚を運ぶだけ。

地域の活性化……。

この言葉はどこから発生してどうやって浸透していったのかわからないが、僕が地域づくりのコンサルタント会社にいた80年代後半にはすでにこの言葉について疑問をもちつつも蔓延していたような気がする。

それから20年以上経過し、あらゆる価値観は変化しつつあるのに、いまだに活性化という言葉が形骸化しつつも蔓延していることに対する違和感がある。

この夏に三重県の伊賀で行なった講演の原稿の校正を行なっているが、そのなかで初めて口にした「豊醸化」という言葉が気になりあらためて調べてみる。そういえば調べていなかったな。

コンピュータで入力すると豊穰と豊饒という言葉は変換してくれるが豊醸という言葉は一発では出てこない。

豊穰という言葉は作物が豊かな状態。ちなみに「地域 豊穰化」とグーグル検索してみると84件のヒット。ピンとくる用法はない。

豊饒という言葉は土地が豊かなこと。これもなかなかいい概念。ちなみに「地域 豊饒化」とグーグル検索してみると183件。こちらのほうが多少は意味が近いかもしれないが、「ゆたか」が二つ重なるのがどうも気に入らない。

で、豊醸という言葉。これはお酒、味噌、しょうゆなど、じっくり時間を掛けて作る「醸す」という意味が加わる。お酒……。いいなー。やっぱり地域は醸さなくてはいけないでしょ。

ちなみに「地域 豊醸化」で検索すると……。「地域 豊醸化に一致するページは見つかりませんでした」となる。

つまり地域活動において豊醸化という言葉を使用した例はない。

ということは僕が最初!

いいなー。

なんとなく大発見をした気分になる。

で、これをアップしたとたんに1件のヒットになるのかな？ あれ
ならないなー。

ちょっとこの言葉流行らせてみようかな……。

これからは地域の活性化ではなくて**地域の豊醸化**ですよ。……とか。

とにかく活性化に替わるこのような言葉をそれぞれの地域がまず考
えるというのが大事なんでしょうね。

豊醸化よりもいい概念があれば教えてくださいね。

ちなみに「地域 活性化」とググると2,950,000件。すごいね。活
性化という言葉にこれだけ騙され踊らされているんですね。

ちなみにこの写真は隣のめぐちゃんが最近飼い始めた鶏のひよこ6匹。
むちゃくちゃ可愛い。これが半年後には鶏として卵を産むのだとか。
背中が最高です。



- 1 アサヒ・アート・フェスティバル
<http://www.asahi-artfes.net/>

AAF2008¹の選考会で、地域のアートプロジェクトの企画をブラウズしながらの雑感。

- 時には刺激的で圧倒的な作家が入りこみ、作品を露出させることも必要。
- じわっと住民に浸透し、知らないうちに住民が主体となって活動がはじまるようなタイプの表現は欠かせない。
- 作品が点在し、その期間、その地域の風景がさりげなく、しかし、あきらかに変化している様が見えなければいけない。
- 住民参加なんてものはぬるい。住民主導のシステムに組み替えなければならない。最低でも住民とつくるということ。
- 地元作家に、いかに刺激を与えるか。地元作家から、いかに刺激を受けるかのバランスが大切。
- 問題はそこからなにが立ち上がったのかということ。相対的な変化の度合い。
- シンプルでありながら多チャンネルなのがいい。
- 本気の人が増えればいい。
- 面白い人が増えればいい。
- アーティストだと自覚している人はもっと、もっと、圧倒的に面白く魅力的な活動へと逸脱すべき。
- アーティストの周辺の住民はアーティストの過剰さに疑問と問題を投げかけるべき。
- 地域のコーディネータはもっと貪欲になるべき。
- もっと、もっとディスカッションすべき。
- もっともっと、実験すべき。

□もっとオープンに！

□固まるな！

……ということで、がんばろっ。

…

そうそう。

裏側では一人こもってじめじめと悩み苦しみいじり続ける作家の姿が大切だと思うのです。それが前提としてあって、その裏側にある地域でのアートプロジェクトなんだということを忘れられがち……。

あー。こもりたい。

ってなところからAAFに、あるいは地域のアートプロジェクトに必要なものは……、

- 地域に入り込んで、やる気のある作家の公募（アーティスト公募）
- 地域で実践してみたいプロジェクト作品の公募（アーティストプラン公募）
- 地域に入り込んで、やる気のあるコーディネータの公募（コーディネータ公募）
- どこかの地域で実践してみたいコーディネートイメージの公募（コーディネータプラン公募）
- なにかをやりたいけど、なにをやっていいのかわからない地域の公募（地域活動団体公募）
- このままではもったいないけどなにに使っていいのかわからない地域素材の公募（地域素材の公募）

…

以上の要素のお見合い……でしょうか？

結局、やる気をぶつけてゆかなければ面白くならないんですよね。



あ、基本的すぎましたね。

AAF2009 (2008の次) はこのどれかが実践できるといいですね。

* 写真は東京都現代美術館²で公開されている岡本太郎先生の大作《明日の神話》とその一部。それに先日階段上り口付近³で見つけたなんでもないけど無視できない行為。



2 東京都現代美術館
<http://www.mot-art-museum.jp/>

3 「小山田君の京都のゲストルーム」
2007-12-07 10:41

マスキングテープ。

ちょっと上の世代のグラフィックの世界にいる人なら、あるいはある程度ちゃんと塗装をやったことがある人なら使ったことがあると思う。

絆創膏のテープと同じだと思っていたがどうも粘着性の点で違うということに気づき、素材として注目し始めたのはもう30年以上前。

そのマスキングテープをピッ！とちぎる感覚。

ごく僅かであるが「うれしいかんじ」。

エアキャップのプチプチを潰すかんじが「プチわる+心地いいかんじ」であるが、こっちはもっとなんだか正義感に裏付けられている。

なんともいえなく、いい感触。

テープをびびっと引っ張るときの触覚もまたいいが、ちぎる感覚よりは後ろめたさをとまなう。

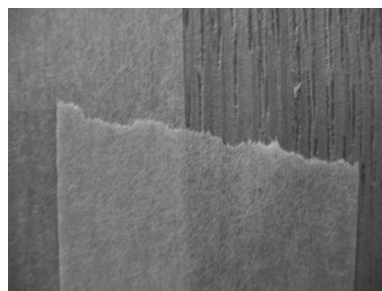
ある種のフェチ的要素があるかもしれない感覚であるが、ほとんどの場合、その微かな感覚は無視されがち。

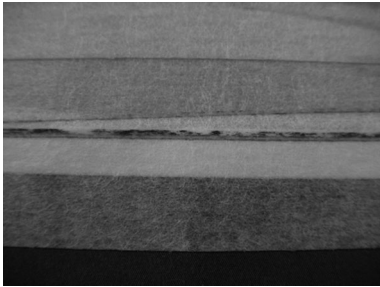
写真撮影をするときに、写真そのものへの興味よりも、あのシャッター音に微かな喜びを感じる性質と似た感覚かもしれない。

さらにマスキングテープに絵の具やドロ잉がのっている感じが捨てがたくいい。

ドロ잉や水彩画、建築パースなどを描いていたころ、作品が仕上がり、最終的に縁取りしていたこのテープを外すとき、このテープの微妙な透明感とそこに積層した絵の具等の状態の耽美さを無視できないでいたのが20年以上前のこと。

しかし、テープを外した後に現われる想像を絶するほど見事な顔料のエッジの劇的な登場を見たいために、とたんにマスキングテープは脇役となり丸められる運命にあった。その丸められたマスキング





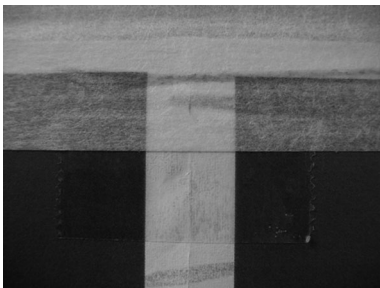
テープの団子も数分間はもてあそばされるものの、せいぜい残っても数日間。

僕の活動歴のなかでけっして表には出てこなかったけれど、確かに心を捉えてきた素材だ。

展覧会の搬入に向かうとき、マスキングテープとマジックを数本携帯してゆくだけで、作品の仕上げを担保するような気がしていた時期もあった。

小学校のとき、水彩絵の具を使って描いた水彩画の作品よりも、水彩画を描いたあとのパレットの状態や、それを洗い流しているときの永遠に続くかのような絵の具色の水の流れに興味を注いでいたのが初期体験だとすると、マスキングテープは受験以降中期の体験に位置する。

作品を作るためのツールでありながら、ある種、作品よりも感情的に親密だったと思う。



確か、80年代半ばころ、同じような感覚でマスキングテープを扱っていた作家もいた。

去年、横浜でマスキングテープの上に植物を描き、増殖させてゆく作家、浅井君¹に出会って、そのマスキングテープに感じていたフェティッシュな感覚を再び呼び覚まされた。

今回、高校時代からの友人の小山田君²に会場構成を依頼している関係で、彼からも「フジサンは昔からマスキングテープ好きやったもんな〜」と指摘され、再認識してしまった。

1 「狩野君と浅井君と田中さんとスーさんと……面白い組み合わせ」
2006-12-15 12:26

2 「鹿児島島の蒲生町で不思議な縁の縁側」
2005-08-16 23:10

あー、今回の防災EXPOの会場設営の現場、マスキングテープをいっぱい使うことになりそうだ……。どきどきするなー。

楽しい人のところに楽しい人が集まる感覚と同じことであるが、制作している人たちが最低でも必死に楽しもうとして、ある種フェティッシュに、ある種マニアックに、ある種感覚的に納得しながら作業を重ねてゆく現場でなければ……、言い方を変えると個人的価値観に裏づけされた状態をしっかりと積層してゆかなければ、魅力

的は空間なんて立ち現われることはない。

関わるだれもが責任を転嫁するために、仕事上の立場だけで、実体のない公共性と実感のない常識をガイドラインに取り繕うことによって成立した物事のなんとつまらないものか。

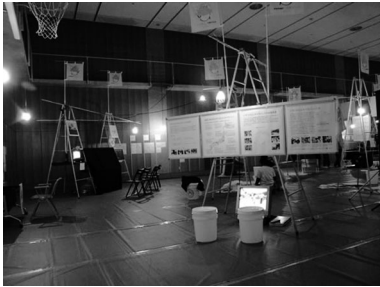
それをつくろうとする人のなんと多いことか。

仕事に対するスタンスを少しでも変えたい人は、マスキングテープを100回ちぎるトレーニングから始めるのはどうだろう。

脳内に小さな喜びの感覚が発生することでなにか価値観が大きく変わるかもしれない。

そうか。いい仕事って仕事に対するフェティッシュな感覚の積層の上に発生するのか……？

防災EXPOが始まり、展示会場の気に入らないところを触りながら、展示について考えてしまう。



展示はなにかを伝えるものであるという常識がじつは大きな罫なのではないか……。

最近、この課題が頭の片隅にこびりついている。

展示会、展覧会、EXPO、博覧会、ショー、トーク、ライブ……。

これはなにかを伝えるために行なっているものなのか？



……というより、なにかを伝えるために行なうという編集方針に変換されたその時点でその会場の空気感に嘘っぽさがにじみ出てきて、リアリティの薄れたつまらない空気感が漂いはじめるのではないだろうか？

確かに伝えたいということがきっかけとなって伝えることが目的で行なわれる展示の類も多い。しかし、僕らが日常的に興味深く接している多くの展覧会やトークやライブは必ずしも伝えるというところから始まっているものではない。

少なくとも、伝えられに行くのではなく、なにか新鮮な体験や驚きや深みなどの非日常を期待して出向く。じつは感動を期待して足を運ぶ。

観客は誰でも、その空気感を読み取る感性を持っているのだと思う。

その空間の持つ感性が嘘でつくられているものなのか、リアリティのあるものなのか。それをそこに存在する要件から瞬時に感じ取ることを行なっている。



僕らは伝えるためにモノゴトをつくっているのか？

物事に接し、過剰に扱ううちに、深く関わってゆくうちに、なにかしらの「えも言われぬものごと」が出来上がってしまい、その面白さを誰かと「共感したい／見せたい／聞かせたい／話したい……」と思う。

その「共感したい……」の部分で「伝えたい」とやってしまい、伝え

るという意味が誇張され、あたかも意味を伝えることが重要なふう
に勘違いされズレてしまっている。

関係において面白い状態を作り出すために展示するのであって、伝
えるために展示するのではない。

伝えるためにつくられた展示物が嘘っぽく違和感を感じるのはその
ためか。

伝えるという言葉に内在する「教える」とか「伝達する」の意味が強
調され、説明的になったりする。

観客との面白い関係をつくりたいのだとすれば、だらだらとした説
明は退屈で面白くないのは当然。

興味深い切羽詰った状態のモノゴトをストレートに見せる。その裏
側でいくらかでも「論じるフェチ」が論じていてもかまわない。

コミュニケーションとか、通じるとかの意味が重要だったりもする
場合も多い。

そんな展示にしなければならないのに……。

まだまだできていない。

…

とにかく……。

展示はなにかを伝えるためのものではない。ということを再確認する。

さらに、伝えたい本人でもないのに、伝える事を目的として代理人
がつくってしまう空間（ツール）の、なんと嘘っぽいことか。……
ということも確認すべき。

で、さらに、展示は新しい関係を築く状態を目指すべきなのではな
いかということ……。

話はずまらないところからはじまるが……。

これまで数百回は通っている羽田の東京国際空港……。



そこに国際線ターミナルがあることはなんとなく知っていたが、はじめて利用することに。

はっきりいって……ともしょぼい。

ゲートは三つだけあるが、地方の空港のターミナルビルより小さくて貧弱。

じつは東京の国際空港がこんなに貧相だったんだと思うとなんだか嬉しくなり、おかしい。

考えてみると僕が利用する羽田空港は、ほんのひとつのルートでしかないことに気づき、僕のまったく知らない羽田空港があることを考えてふと思う。



そういえば、自分の暮らしてきた街であれ、仕事で通っていた都市であれ、用事のあるところか、もしくは一般に開かれた共有空間しか知らないため、じつはほんの僅かな面しか知らなかったということに思いをめぐらす。

いくら数十年、暮らしていても、その地域社会のなかのすべての場に立ち会うことは不可能……。ということは先祖代々暮らしていても、数十年、そのまちで働きまわっていても、知っていることはほんの数%もないのかもしれない。

しかし、そのことをわかっていない。

知らない世界を知ることは魅力的なことであり、新しい世界とのぶつかりから新しいイメージが発生することがある。

1%も知らないということは……。



それだけなにか新しい魅力が発生する可能性に満ちているということ……。

なんてこと考えたりして……。

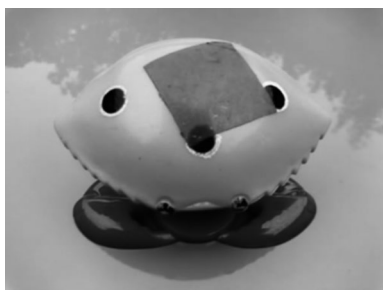
ソウルの展示に行ってきます。

このおもちゃは凄い。

誰からも価値を認められなかった唯一のおもちゃという凄いおもちゃ。

本来、バネが生きていたらひっくり返る動きをするおもちゃだが、バネが内部で壊れていて、絶対にひっくり返る様子はない。

今日、中国から作品が返却されて、美術運送が返却作品を運んできた。そのなかに丁寧に梱包されていた唯一の残りのおもちゃ。



1 「いわゆるモノとしての、あるいは空間としての作品？」
2007-12-25 23:06

あんなにいっぱいおもちゃがあったのに……。

ちなみに返却された作品と掲載記事資料と展示状態を記録した写真があり……（横の写真はそのファイルのなかの写真です）。



おお！ あの大量のヌイグルミやおもちゃがなくなっていて、部屋の片隅の床面に僅かに残っているのが見える。

それに反して、おもちゃをもらうために観客が描いたおもちゃのスケッチの柱は隙間なくスケッチで埋められている。



日本から20箱近く送ったかえっこの残りのおもちゃたち。それが中国にわたり、価値を認められたおもちゃはスケッチされてもらわれていった。

で……。

唯一誰にもスケッチされることなく残り、日本にもどってきたのが最初の写真の「カニ？」1点のみ。



来場者が5万人を超えたという展覧会のなかで、誰にも価値を認められなかったとても価値ある「カニ？」

これは僕にとっては凄いおもちゃだ。

赤いビニールテープがついているってことは……、あざみ野²でやったかえっこで1ポイントだったおもちゃかな……。あのときシールがなくて急遽ビニールテープで代用した記憶があります……。

2 横浜市民ギャラリーあざみ野
<http://artazamino.jp/>

先日北川さんと話を¹して「君、1世代は20年だよ！」といわれてズレを感じた。

1 「パブリックなアートの話」
2008-03-17 23:59

確かに20歳で子どもを生むことはあるし、40歳で孫がいてもおかしくない。

20年で時代の価値観は変化してゆくかもしれない。

僕がたまたま父親が33歳のときに生まれた子どもであり、僕が33歳のときに1人目の子どもが生まれた。

そこから33年=1世代説の立場をとってきたし、3世代99年で計算するほうがよりリアルに感じる。先祖代々といってもほとんどの人は3世代遡った曾祖父や曾祖母が4人ずついたなんて認識したこともないし、その8人の名前を知っている人なんてほとんどいない。

先日、²太宰府天満宮の宮司の西高辻さんとお会いしたときに彼は39代目だと話していた。息子が40代目なのだとか。自分が何代目といえることがすごい。

2 太宰府天満宮
<http://www.dazaifutenmangu.or.jp/>

³菅原道真の時代が800年代半ばなので彼の例をとると一世代は約30年弱の計算になる。

3 太宰府天満宮「道真公のご生涯」
<http://www.dazaifutenmangu.or.jp/about/michizane>

そういえば、朝日新聞の小川さんに環境についての原稿を頼まれたのでこの世代年についての考えを少しだけ紹介した。

その文章をここに掲載しときます。

以下、朝日新聞への文章（一部校正されて違うところもあります）。

...

97年1月、妻と相談し、自宅から出るすべてのゴミを完全分別してためる「家庭内ゴミ・ゼロ・エミッション（排出）」を始めた。「自分はどれだけのゴミを出しているのだろう」「ため続けたらどうなるのか」。増え続けるゴミを前に、そんな疑問や違和感を無視できなくなったのだ。

生ゴミは裏庭の畑の土へと分解できた。紙ゴミは廃品回収へ。2年後、膨大な量になったのが、食品トレイや容器などのビニールプラスチック系のゴミだった。それらをなんらかの素材として再利用するしくみをつくり、地域活動にもつなげようと決意した。子どもたちが不要なおもちゃを交換する「かえっこバザール」はそんな発想から生まれ、全国に広がっている。

石油からつくられ、現代にあふれるビニプラ素材。僕が生まれた60年ごろにはまだ珍しかった。これらは、僕が老人になるころまで存在し続けるのか。そんな疑問のなかから思いついた「世代年」という考え方を紹介したい。

平均的な寿命の人間の一生を三つに区切り、便宜的に33年をひとつの単位「1世代年」ととらえてみる。

人は33歳ごろまでの1世代年目は、自分を取り巻く周辺を理解し、活動をはじめ。2世代年目は子どもを育てる時期に重なり、活動がその時代をつくることになる。そして3世代年目は、自分たちがつくった時代を検証し、次の世代にアドバイスする責任を負う。3世代年を生きた人間は、大きく変化する3種類の時代を目撃する。

たとえば、明治初期に生まれた僕の祖父が子どものころは車も電気もなかった。彼は奄美大島で大工として神社や船をつくり、西洋・近代化の波と闘う2世代年目を生きた。⁴

4 「遺伝子の騒ぎどころ!」
2006-11-01 22:16

その時代に生まれ育った僕の父親の2世代年目は、大量生産による経済成長をめざし、原油と電気の消費を拡大させ、車や家のローン返済のために働き続けた。

5 「義父の死で思う」
2005-07-29 23:24

同じ時代、僕の妻の父親は太陽光発電の原理に興味を持ち、企業人としてその実用化のために生涯をささげたと聞く。⁵

僕は公害が問題となるその時代に喘息とともに生まれ、スーパーやコンビニエンスストアの誕生を目撃しつつアレルギー体質で育ち、いまここにいる。

祖父が僕の時代の価値観を予想できなかったように、僕が、孫たちが目撃する22世紀の価値観を想像するのは難しい。

ただ人の日常の活動が、次の時代の価値観を変え、その環境をつくることは確かであり、それぞれの世代年の人が果たす役割は大きい。

いまでも大量にたまり続けるビニプラゴミ。そろそろなくなって欲しいのだが、さて、どうしましょう。

描くことに理由が必要になったのはおそらく小学校の低学年ぐらいからなのかなー。

もっと幼い頃は描くことに理由なんてない。



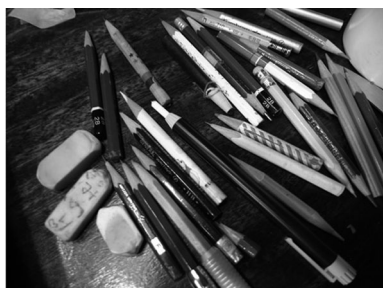
いじることの延長の不思議な現象として「描くこと」があったのだと思う。

しかし、小学校のころからある社会的価値観の外側のことは「無駄なこと」「余計なこと」として生活のなかから排除され……、なんのためにもならない時間を費やすこと自体が非難される対象とされ……、とにかく、無駄に描いていると「おこられる」ような気がするし、唯一上手に役に立つ絵を描くことのみが「ほめられる」ような気がしてきた。

現在でも多くの子どもたちが描くことにさえ理由を求められているのだろうな。

かわいそうに……。

理由なく描ける人をうらやましいと思ってきたが、じつは自分と描くことの関係性を守るために相当社会的な外圧と戦ってきたのかもしれないなー。もしくは守られてきたか……。あるいはそれぞれの理由を編集し続けてきたか……。



とにかく、僕にとっては多くの人もそうであるように描くことには理由が要る。

この年齢で、ただ描いているだけの時間を過ごすことは「おこられ」そんな気がする。

ということで、この数日間、久しぶりに描き続けながら¹そんなことを考え、いろいろな「いいわけ」を自分の中で考えている。……おとめ座、A型、末っ子長男の性(さが)なのかもしれないなー。

いくつかある「いいわけ」で、もっともわかりやすいもの……。

子どもたちが小学校の高学年になって以来使わなくなってしまった

1 『『藤浩志とクスタケン』という個展のためのドローイング制作中』
2008-05-08 16:21

使い古しの鉛筆。

これが山ほどストックされている。例によってくっつけて鳥にしてみたりしたが、なんだかまだまだ絵が描けるので、もったいない。でも生涯つかっても使い切れないぐらいの量の鉛筆がある（ペンもあるんですけど……）。

とにかくこの鉛筆を使いきるために描く。

これは社会的に正当な理由に違いない！

……そうでもない？



この1週間、ほとんどこもって描き続ける。本当に珍しい。

スタジオがおもちゃで占拠されているので、今回は自宅での制作。

自宅がまるで絵描きのアトリエようになってきた。

描き続けてあらためてドローイングのこと……。drawということ。描くということについて考えることができた。



もやもやした状態のモノゴトを具体的な形として……。つまりイメージを**引き出す**作業。

風景のなかに、あるいは地域社会の中に何らかの**形を導き出す**作業。

draw-ing



結局、僕がこれまでやってきたことも、今週末から1週間宮城、福島、茨城、東京、大阪で行なうことも、地域での活動も、対話の場をつくることも……。

DRAW……。描くことでありつつ、なにかを引き寄せることでありつつ……。なにかを抽出しようとすることでありつつ……。しかもその現在進行形……。

まさにドロー・イングなのだなー……と考える。



以前より僕の行為はpaintingではないし、sculptureでも、modelingでもないと思っていたし……。

なるほど、画家でもないし、彫刻家でもないし、造形家でもないし……。

……じゃあ素描家？

とにかく**イメージが立ち上がる状態に一番興味がある**んだと思う。

そしてそこからなにかがはじまることへの**期待感**が一番好きなんだと思う。

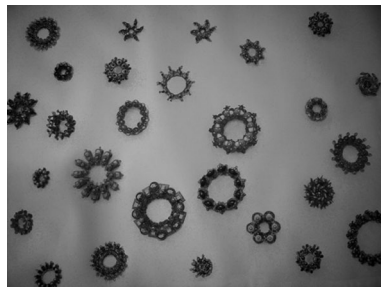
だから仕上げるのが嫌なのかな。

終わってしまうことも嫌いだし。

……というか仕上げるのが下手なのを知ってるからね。

終わりがいいことも知っているし……。

連鎖してゆくんだと思うんですね。





1997年、鹿児島から福岡に引っ越してきて、家庭内から排出されるゴミをコレクションしはじめ……。

この予想問題をつくった当時、自分自身、それらがどのようになるのかまったく予想もできなかった。ただ、自分の活動の延長に将来はつくられる……という妙な確信をもって、自分を含め、だれも予想できない自分をつくることに確かに興味を持っていた。

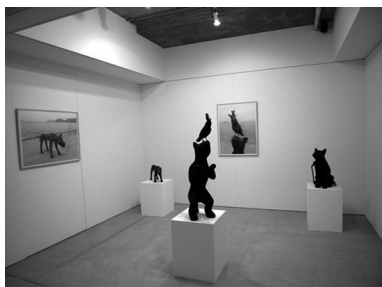


……つまり、自分が何を行なうのかによって、自分の周りの人の属性が変わり……、周りの人との関係によってまた自分がつくられてゆく……。

……昔、不動産関係にいたころの末期はやはりかなりお金の流れをかぎ分ける人や怪しい人が事務所に集まっていたし、鹿児島でカフェを行っていたころは鹿児島で活動するいろいろな人が周りにいた。

ギャラリーの周辺には美術関係者が集まるし、ホールの周りには音楽、演劇関係者が集まる。

かえって、ビニプラを始めるようになってから、全国各地の子どもの問題や環境の問題に詳しい人たちとの仕事も増えて、僕自身いろいろな影響を受ける。



お金の集まるところにはお金を求める人たちが集まり、**興味の集まる**ところには**興味を求める人たちが集まる**。

次に自分自身が**なにをツールとして手に持つかが、じつはその後の自分自身の周辺の環境を変えて自分自身もその環境によってつくられる**。

つくる……ということの意味はそこにあると思う。幸い……、この10年、僕はなにかをつくろうと活動してきたので、なにかをつくることに興味を持つ人が集まってくる。だからいっそう、なにかができるような予感が満ちてくる(だれもお金を持つ人はいないが……)。

なにかをつくろうとすると、結果としてなにかができあがる。できてしまったモノゴトは多くの場合ズレズレのものであるので、そこ

がきっかけとなりまた次をつくろうとする。それがまた面白い。

とにかく、ギャラリーでのオープニング、11年前に行なったクイズの答え合わせを行なう。

残念ながら100万円該当者は不在。

2004年に楽座を行ないラクダを扱っていたので、さすがにそれはだれにも予想できなかった

しかし、ニアミスが2名、桑畑さんと長谷川さん。その2名には連絡をとって10万円相当のドローイングを進呈することになりました。

おめでとう。

他の方、残念でした。

多くの人の予想は……。

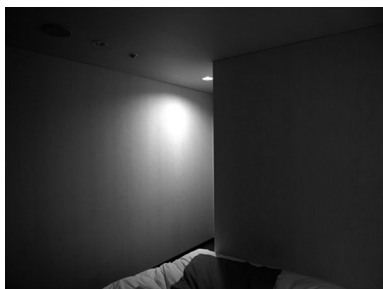
そのまま深江に暮らし、店舗経営者になり、魚をキャラクターに環境問題を扱い、ゴミをそのまま作品化……、という予想でした。

まあ、だいたい合っているけど、まさかゴミをツールにシステム型の作品をつくっているとはだれも予想できなかったでしょうね。



窓からの眺めがあるということはじつは精神的に贅沢なのかも……。

窓をあけて気持ちのいい空気が流れ込むというのも、じつは贅沢なことなのかもしれない。



日本では珍しい窓のないホテルの部屋で2泊3日を過ごすことになり、精神的に圧迫され、不安を感じている自分と出会う。息苦しい。

子どものころに押入れや床下に閉じ込められた恐怖がよみがえるのか……？

もう四半世紀前に計画されつくられたこどもの城ホテルには窓のない部屋がいくつかある。前回宿泊したときも、今回も偶然、窓のない部屋……。

そういえば、いつも宿泊先の窓から眺めを気にしているな……。

いまの自宅も台所の目の前に広がる田んぼの風景と、田んぼの上を横切って吹いて来る海風が気に入って暮らしている。

1 「大阪の淀川沿いに……」
2007-05-13 15:35

大阪のロッジ¹にしても、淀川沿いの河川敷に面した風景と涼しい風がいい。

2 「緑視率——窓からの眺め」
2004-06-05 21:55

窓からの緑視率²も重要だが、窓から流れ込む空気の質も評価要因になるな……。

そういえば、以前宮崎のシーガイアに宿泊したとき、海に臨む眺めは最高だったけど、窓が開かずに、海風が遮断されているのを息苦しく思ったことがある。

海沿いの、海との関係を遮断された施設。

そうか、シャッターの発想とおなじか。

シャッター→シャット+アウト！の価値観。

ある時期、関係を断ち切り、遮断する考え方が普及し、それが商品化されていった時代があるんだろうな。

僕はその真っ只中で生まれ育ってきたのかもしれないな。

広島学校教育委員会にいる先生から頼まれて以下の文章を書きました。

...

「と」の関係性

関係ないところ

ある街に関するヒヤリング調査を行なったときに女子中学生に投げつけられた言葉が心に沁みた。

「ここ、関係ないところ、多すぎい〜！」

自分が生まれて育ってくるなかで自分の暮らす街には自分には関係のないところばかりだという。

住宅地、マンション、企業ビル、大型商業施設、文化施設、公園、海岸、河川——。大人の価値観からすると、とても暮らしやすそうな場所だが、確かに子どもたちだけでは立ち入れないところばかり。公園や河川、海岸も、もはや危険地域ということで子どもたちだけの立ち入りは禁止され、企業や文化施設、大型商業施設の入り口では警備員が監視の目を光らせる。住宅地やマンションは塀で囲まれ、監視カメラが不審者の侵入を拒否している。

街のあらゆるところから子どもたちは関わることを拒否され、自由に使うことも触ることもできない。

もちろん、それなりの手続きを踏めば使えるシステムを持っているのかもしれないが。

大人たちから許されている空間は自宅と学校。

そこが自由に関わり、使える場所であればいいが、はたしてどうだろうか？

結局、彼らを受け入れる空間がメディアやアニメの空間、子どものためにデザインされ、管理された空間だけだとすれば、成長の段階で悲劇が起こってもおかしくない。

多様な空間が子どもたちを多様な人々との関わりに導き、子どもたちはそのなかからさまざまな対話力を身につけ、判断力を養う。学

校や家庭のなかの、固定され束縛された関係ではなく、選択可能で更新性の高い人間関係が子どもたちの社会への興味や可能性を導き出し、その存在を裏付ける。

関係性と存在

2004年12月、インドネシア・スマトラ島沖地震で発生した津波によって、ある村が壊滅するほどの被害をうけた。村の住人のほとんどは亡くなり、被災時にたまたまほかの村に出かけていた数名の住民だけが生き残った。

彼らは家族、親戚、友人、家、街、学校、職場、生まれ育った風景のすべてを瞬時に失ってしまった。つまり自分自身の存在を位置づけていたすべての関係性を失ってしまったのだ。

彼らは生き残ったが、自分自身が何者であるかその存在を失っていて、それを回復させるのが大変であるという。関係するすべてのものや人を失うことは、自分の存在を失うことに繋がる。

人は関係性のなかに存在するというのを忘れてはならない。

束縛のなかにあるのではなく、選択可能で自由で多様な関係性が、子どもだけではなく人間の存在には欠かせないという視点が重要なのだと思う。「だれと」その時間を過ごし、「だれと」出会い、さまざまなモノゴトに対峙するのだからその個人の存在の意味や価値は変容する。

はたして子どもの周辺にそのような多種多様な関係性をつくりえる多様な空間が開放されているのだろうか？

大人たちは、あらゆるリスク回避のために可能な限り子どもたちの侵入を拒絶しているのではないかな？

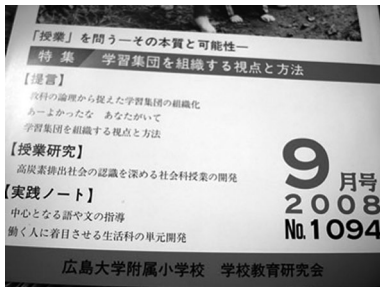
いじる→使う→できる→つくる

幼い子どもはとにかく「いじる」のが好きだ。

体をいじり、身の回りのものをいじり、道具をいじり、場をいじる。いじるという行為において目的は存在しない。

なんらかの結果を求めていじるのではなく、なにかをつくらうとし





てでもない。ただ、いじりたいからいじるのである。

いじる行為は「使う」行為に繋がる。

指を使い、手を使い、体を使い、頭を使う。身体を使うことの延長に道具を使うという行為がある。

言葉や文字、数字を使うという行為もある。

身体を使うことを覚え、その延長でさまざまな道具や言葉、文字、数字などを使うことを覚える。

そしてそこと繋がったところにさまざまな空間がある。

社会のすべて、大げさな言い方になるが、宇宙の存在のすべては身体の延長にあるという感覚が大切だ。

そしてできるならばそれらのすべてをいじる行為が大切だ。

いじることが使うことに繋がり、その結果としてなにかができてしまう。

その順番がとても大事なのだと思う。

手の延長にあるさまざまな道具。鉛筆を持つのか、絵筆を持つのか、ナイフか、楽器か、ボールか——。その結果生まれるものが変わってくる。

声を過剰に使うことによって歌が生まれ、言葉を過剰に使って詩が生まれる。

そのプロセスには驚異の発見があり喜びがある。

結果が前提となる罫



物事の認識は結果からしか捉えられない。

近年ようやく「結果ではない。プロセスだ!」と言われるようになったものの、相変わらず結果が提示され、最短距離で導き出すプロセスが求められているように見える。

100のプロセスの結果、100通りの結果が生じているのがもっとも興味深い現実であるというのに、そのなかでたまたまひとつの結果があたかも正解のように提示され、そこを目指して「がんばれ」というふうになってしまうという罫に気付くべきだ。

子どもにとって必要なのは「なにかをつくろうとする行為」なのだろうか。いじった結果なにかができてしまうという脅威の体験なのではないのか。

身体の向こう側に繋がっている世界はすばらしく驚異に満ちて面白く、興味深いところなのだ。

「いじり」と「使い」の経験を経て初めて「つくること」の喜びを体験できる。

「いじり」、「使う」ことの延長にある「つくる」こと。この順番を大切にしてほしい。

プロセスは記録に残りにくい。

その理由から、制作プロセスにおいてはまず完成がゴールとして設定されることが多い。

その途端にそのプロセスはある流れをフォローすることになり、子どもの創造性や感性とはかけ離れたものになる。

なにができるかの驚き以前に答えが用意され、それをなぞるように強えられる。

そこに驚異の発見も喜びもない。

もしかすると声や音、道具をいじること以前に音楽や図画工作があり、文字や言葉以前に国語があり、数字以前に算数があり、周辺の空間以前に社会や理科が用意されているのかもしれない。

そしてそれらは身体的な行為の延長ではなく、情報という遠いところで発光している無縁のものであるのかもしれない。

「だれと」の関係が決定付ける。

いじり、使うプロセス。その時間と空間をだれと共有するのか。

それがすべてを意味づける。

なんでもない行為に方向性が与えられ、許可され、賞賛され、あるいは否定される。それは親や兄弟や祖父母だったり、近所の人や友人、先生、メディアの向こうの人だったりする。

「だれと」の関係性、「だれ」かの価値観がじわっと伝わりさまざまな結果を導く。

先日妻が興味深い話をしてくれた。

つい最近まで、ただ色や形を楽しんでいた5歳の息子が保育所で描いた絵が突然児童画の模範解答のような絵に変わったのだそうだ。

不思議に思い他の子どもたちの絵も見てみると、同じような構図の羽を広げた力強い鶏の絵が並んでいたという。

先生に悪意はないはずだが、その先生と絵を描くことによって子ども

もたちは羽を広げて正面から見た鶏という記号を力強いタッチで描くことを覚え、そうすることによって「ほめられる」ことを覚えたのだ。「だれと」の関係が子どもたちの絵を変え、価値観を変えた瞬間なのだと思う。

1年ほど前、当時4歳の息子と砂浜に行ったときのこと、一緒に散歩していた犬が穴を掘り始めたのを見て、息子は猛然と犬のまねを始めた。

僕はそこで躊躇しながらあえて面白がった。

結果息子はしばらくのあいだ、砂を見ると犬の真似をして穴を掘る行為に熱中していた。彼の行為は僕との関係においてほめられもしなかったが認められたのだ。

子どもの周辺には「○○をつくりましょう！」という結果を前提とした、いかにも創造性に乏しく陳腐なプログラムが溢れている。

教育というミッションを隠れ蓑にして、じつは貨幣経済上の利益を前提とした商品もたくさんある。

いかにも魅力的な「答え」や「ゴール」を用意して子どもにつきまとう大人「との関係」が子どもたちを危険な方向に導いているように思えてならない。

子どもがいじり、使いまくった結果立ち現われるイメージのなんと興味深いことか。

それを面白がり、認め、褒め、あるいは批判する多種多様な魅力的な大人「との関係」が子どもの存在を裏付ける。

子どもたちは「だれと」数字や言葉や音をいじり、自然や街や歴史をいじり……、そのプロセスにおいてどれだけ驚異の発見を繰り返しているだろうか。

大人はちゃんと多種多様な価値観に興味を持てるような魅力的な存在にならなければならない。

そして子どもたちとの関わりを積極的につくってゆこうとする意思が必要なのだと思う。もっと楽しみながら……ゆっくりと……。

藤浩志

自宅にいるとずっと、机の上に溜まっている資料とか整理しつつ、分類しつつ、いじっていたり……、

ついには机の位置が気に入らなくなり、少し動かしてみたり、いじってみたり……、

やりかけのポスター、ちらしのレイアウトをいろいろいじってみたり……、

電気の配線がごちゃごちゃ気に入らないのが気になってきて気づいてみるといじっていたり……、

デコプラなのか、デコポリなのか、……頭の中でタイトルをずっといじっていたり……、

冷蔵庫の中に溜まっているものを整理して新しい器に入れ替えたりしながらいじっていたり……、

庭の草が伸び放題なのでせめて車に当たる部分だけでも……風通しが悪い部分だけでも刈りそろえてみようかといじってみたり……、

台所の片隅の油污れの塊を磨いているうちに台所全体をいじっていたり……、

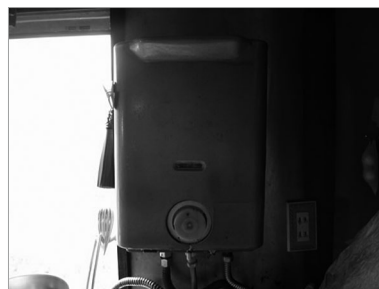
山積みになっているペンを分類しながらいじってみたり……、

スケジュール帳のなかでパズルのような予定をいじってみたり……、

…

結局いじってばかりで……、つくっているわけではないな……。……。

でも結果として、できてしまう……。



台所に20年以上前からある瞬間湯沸かし器。さび付いたり壊れたりしてるのを塗装したりいじっているうちに……、そのうち金属タワシを置く場所をいじっているうちに、この瞬間湯沸かし器に磁石をつけて……、顔のようになり、面白いとおもいはじめ……、そこに金属タワシをくっつける……、という作法が、この一年ぐらい前から出来上がってしまった。

午前中、いわきアリオスの壁面の「プランツ！レポート」の設営。午後から宮城の大河原の現場へ移動。



1 空間実験室2010
<http://artizan.fromc.jp/spacelab/>

2 アサヒ・アート・フェスティバル 2008
<http://www.asahi-artfes.net/program/2008/>



3 「お気に入りの絵」
2005-06-05 05:41

青森の空間実験室¹の日沼さん(大きいほうと呼ばれている方)がまたアリオス・プランツ！に来てくれて、そのまま次の日も壁面の設営を手伝ってもらおう。

そのまま大河原駅前で行なっているAAF²の参加プロジェクト「屋台プロジェクト」に手伝いに行くということで二人で福島のいわきから宮城の大河原まで3時間のドライブ。

その途中でみつけたのがこのよくある案内看板。

そうか、キャッスルか……、シャトーでもなく、パレスでもなく、キャッスルだった！

こんなところで、こんな瞬間に次のベクトルがなんでもない理由で決まってしまう。

よくみると、この看板のイラストのタッチって全国各地のいたるところにあることに気づく。

そういえば、僕が暮らす現在の地域、筑前深江に暮らすことになったのもこの看板のイラストと同じタッチのイラストが原因³。

これは同じ人のイラストなのか、それともこの描き方のイメージがなんらかのかたちである時期、日本全国に流通していったのか……？

いずれにしても、この種のイラスト……。おそらく70年代から80年代にトタン板に油性のペンキで描く案内板には欠かせないイラストとして、日本全国のJRの駅、高速道路、登山道、自然公園、etc.のなかにこの種のイラスト看板が流通して、かなり多くの人がこのイラストのイメージによって多くの行動、……次に行くべきベクトルが誘発され、新しい行動を導き、その先の出会いへと繋げていたのかな……。

つまり、「次はどこいこうか？」と悩んだときにこの看板をみて、そのイラストからかもし出される魅力だけで「ここにいてみよう

か！」と導くイメージとして……。

しかし、この看板イラストの存在については誰もがそれほど気にしていなくて、それほど多く語られることもなく、つまり僕らの人生に浸透している存在……ということになる。

大げさですが……。

そんなあり方もいいですね。表現のあり方として。もちろんこれは流通目的に必然のなかから形作られた描写スタイルなのでしょうが……。



- 1 水戸芸術館「日常の喜び」
(2008年10月25日～2009年1月18日)
<http://www.arttowermito.or.jp/art/modules/tinyd0/index.php?id=4>



水戸芸術館での展覧会「日常の喜び」¹オープンまであと2日。一日中空間をいじる。

吊りものをじわじわいじったり、ライティングをいろいろいじってみたり、映像をつくってみたり、部屋の中で流す環境音のようなものをつくってみたり……。

手伝いに来てくれた宇野沢君と越智君と三人で空間制作を楽しむ。

やっぱりこの作業時間は僕自身好きな時間。

まさに日常の喜びなのかな。

じつはこうやってなんでもいいので並べてみたり、配置してみたりして、納得の行く空間をつくるのが僕にとっての喜び。

並べるものはじつは食器でもいいし、本でもいいし、柄でもいいし、石ころでも木切れでもいいのかもしれない。

その意味で、僕にとって「喜び」の部分ではおもちゃである必要はない。

空間をさわりながら、今回の出品作家が表面的な見え方(スキン)だけでも面白いのだが……、空間の成立を読み解くことで、そのストラクチャーがとても深く、興味深いことに気づく。

おもちゃでなくてもいいのだが、おもちゃであるのはストラクチャー的に今回はそれでなくてはならないから……ということになる。

つまりどうやって素材が集められたのだとか、どのようにして展示されたのだとか……。どうやって撮影されてどうやって形になったのだとか……。

形になる前のプロセスにかかわることであり、表現行為が作品として編集されるとき構造の問題なのではないかと……。

そのプロセスの構造(ストラクチャー)がとても深く、興味深く、面白い作家が出品してるんじゃないかな……。

このブログでもたまに、ストラクチャーとスキン²のことを口にする
ことがあるが、ストラクチャーがしっかりしているとスキンはその
結果としてできてくる。

2 「structureとskin !?」
2006-01-27 09:18

今回の出品作家を語るうえでこのストラクチャーとスキンの関係か
ら作品性を語る事が重要なのではないかと思えてくる。

それぞれのストラクチャーがいわゆる美術システムの内部にあるか、
その外部にあるかを見てゆくことも面白い。

もしくは学校で教わる美術のストラクチャーとはいかに無関係にあ
るかも重要かもしれないし、地域社会との関わりや家庭生活への介
入性にストラクチャーなものを感ずるものもある。

もちろん今回の展覧会タイトルにもある「日常」のなかにそのスト
ラクチャーの核のようなものが関与しているかどうか興味深い。

ところで、この作家は折り紙作家の神谷さん。

一枚の紙を折り紙してつくるという普段はなかなか出会えない出品
作家。

出品作家のジャンルがさまざまであるのも面白い。

日常に関係しながら、じつはその表現のレイヤーが、あるいはコン
セプトやテーマ、ストーリーがまったくばらばらで、バリエーショ
ンに富んでいるのも面白い。

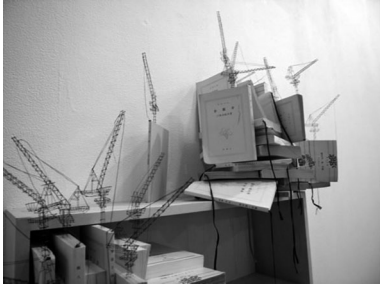
つまり多種多様な価値観ということ。

「そこをそうやっていじるのね……」とやたらと納得するものが多
いのは僕の性質のせい？

日常には多種多様な価値観があふれていることの証明？

日常はまだまだ捨てたものじゃない。





日常の些細な行為が多種多様に拡張増幅されているんだな……きっと。

僕にとってはおいしい作家ばかりだったが、特にこのイスラエルの作家、ガイ君にはやられてしまった。

僕のなかで久しぶりのヒット。映像は全部必見です。



常々、面白くて、深いこと！を求めたり、探したり、作ろうとしたりしているが、まさに面白くて深いものが集まってきたというかんじでしょうか。

ストラクチャル・アートという言葉はないと思うが、明らかに過去のコンセプチャル・アートとは違い、90年代、00年代を経て発生しつつある表現の領域にかかわる傾向として、そのようなものが自然発生しつつあるのかな……。



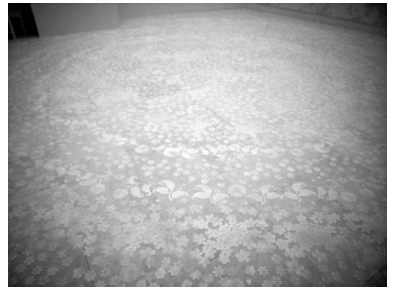
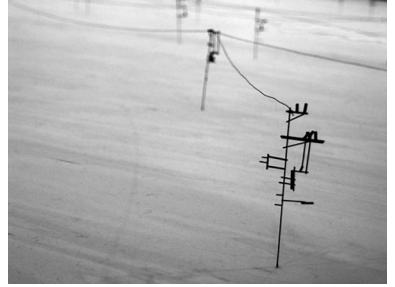
これまでもいろいろな時代のいろいろなところにそのような作品はあったのだろうが、そのような視点や切り口で編集されてこなかったのかな。

ということで、ただだれかこのあたりについて、しっかり論じて下さい。



いや、じつはちゃんと論じ尽くされているのに、僕が知らないだけなのかもしれないな。







1 南日本新聞社
<http://373news.com/>

父親のお別れ会のために鹿児島に行くと、数人の知人から鹿児島大手の地元新聞に僕の美術館に対しての意見が載っていたとの話を聞く。

実家にある新聞に目を通すと……。確かに、こりゃ目立つ。

そういえば、先日東京にいたときに鹿児島の新聞社から電話がかかってきて、入館者数が伸び悩んでいる鹿児島市立美術館に対する意見を聞いてきたので、話せば2時間ぐらいかかりそうな内容について省略しつつ、早口で急ぎつつ、20分程度、意見を述べた。

それがなんだかクローズアップされている。

新聞にその内容のほんの一部が紹介されていたが、少しはここでフォローしようかな……と思うが、……大変になりそうなのでやめておこうかな……。

でもちょっとだけ。

現在のあり方の美術館というものそのものが日本においては歴史がない。まず、そのことは知っておいたほうが良いと思う。

美術という概念そのものが明治以降のものであり、西欧化の波とともに輸入されたものなので、美術館自体、生活に近いところにあったわけではない。

しかも、西欧においても、絵画・彫刻に類する美術作品が建物に組み込まれた不動産の一部だったものから切り離され、額縁に納められて動産として流通の対象となったのは歴史的にそう古いことではない。

日本においては美術館以前の美術（明治以降、日本美術と呼ばれてきたものに類するもの）は生活に密着したところにあったということにぜひ注目してほしいのだが、そんなことを電話で質問してきた新聞記者に説明することなどできなかった。

つまり、仏像として、寺社、仏閣の建築物の一部として、庭として、あるいは襖絵、天井画として、もしくは祭祀、儀礼のツールとして、

民芸や工芸、生活習慣や生活様式のなかに、浮世絵や歌舞伎、浄瑠璃、能、大衆芸能などのなかに（…中略…）日常に対する非日常への導きとして数多く存在していたが、西洋から美術の概念が導入され、白人男性の価値を中心とする美術観が権威として構築されてきたために、これらのものと別のあり方で美術が捉えられるようになった。

簡素化していえば、額縁に入れ、美術館に収めることで、日常より高いレベルの価値へと高める貨幣経済と連動した仕組みがつくられた……ということかな。

わずかに僕の祖父母が生まれて以降の世代の出来事ではない。……ちなみに僕の祖父は1880年代生まれ。

その権威の構築に大きな役割をはたしたのが全国各地にできた日本における第1世代の美術館と会員制度を持つ美術展業界、国立大学美術教育系学部、そして地方の大手新聞社だったと言える。ついでに額縁屋と画材屋の役割も大きかったが……。

その仕組みは昭和の世代に強靱に熟成し、1970年代までは次の世代の活動へと連鎖を生み出すうえでとても重要だった点には注目したい。

現在の鹿児島市立美術館は、もうすでに第2世代の美術館が発生しつつあった80年代半ばに立て替えられたものの、そのありかたについては第1世代のコンセプトをそのまま引き継いだために、西洋美術を根拠とする鹿児島美術業界の権威を裏付けるものとして今も存在し続けている……のかな？

余談ですが……、僕が高校2年生のときに最初にギリシャ彫刻の石膏デッサンの講習会という形で西洋美術の洗礼を受けたのは建て替えられる前の鹿児島市立美術館でした。当時の美術館は荘厳でありながらも、夏休みに鹿児島県内各地から100名を超えて集まってくる高校生のデッサン講習会に1週間以上も展示室を開放するというおらかなものだったな……。そこに影響を受けていまの僕自身が存在して活動をしているわけだから、個人的にはそのような僕を本気にさせた美術館の存在に感謝しているんです。

その美術館の入場者が減っているとすれば、その権威構造に変化が

生じているということなのかな？

そんなピラミッドの構築に重要な役割を担っていた新聞社が疑問を投げかけているということは、もうすでに「西洋美術だから価値があるんだ！」という上から目線の指導的態度に、魅力が薄れてきたからか、あるいは1世代前までは保持されてきた地方の近代化の構造がすでに崩れてしまっていたことの現われなのか。

西洋美術だから価値があった時代は日本において確かに存在した。いまだに東京、上野の美術館での印象派系作家の作品展や権威の頂点にいる作家の作品展は数万人の入場者を動員できるし、美術史にとって重要だとされる作家の展覧会は「有名観光地の名所・旧跡の来場者数」と比例して観客が多い。

しかし、西洋美術の様式を踏襲しているからといって全部の作品に価値があるわけではないのも事実。

作品に価値があるとすれば、その作品が、それぞれの時代の価値観を変えてゆくほどの重要なきっかけを作り出し、その当時の価値観が大きく変化したという事実を裏付けることができるので、結果として価値が高くなってしまったものたちだと思う。

その意味でも、作品の価値はそれぞれの時代における相対的な関係性に因るものであり、作品が物としての絶対的な価値を所有しているわけではない。そこについてなかなか理解してもらいにくい。

それと、博物館類は、社会教育に位置するというシステムの点で、過去における宝物殿とは少し違うところで存在している……らしい。

教育基本法で決められた社会教育の概念にのっとって、すべての国民が平等に文化的な生活を行なうための仕組みとして法的に存在している。

2 文部科学省「教育基本法（平成18年法律第120号）について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/001.pdf

国や地方公共団体は「豊かな人間性と創造性」や「伝統の継承」の振興に努めるために……美術（博物）館を運営しているということになっている²。……法的には。……たぶん。

西欧化、近代化そのものが文化的な生活そのものだった時代はそれ

でよかったのだと思う。ところが、西欧化自体が地域の独自の文化の醸成に弊害となり、近代化そのものが持続可能な将来の地域社会に害となってしまうことが明確な現在、それらの価値観を教育的視線で「興味を持って！」というほうがおかしい。

極端な話、女性の裸を美として公衆にさらけ出そうとする白人男性視線の価値観そのものが女性の人格を無視する差別的視線になってしまったことは否めない。西欧的価値観を押し付けること自体が伝統の継承にあたらぬし、創造性や個性を導く方向性にはないことも明らかになっている。

地域社会を見つめ、人々との対話や関係性を再構築し、環境、エネルギー、福祉、教育……、さまざまな現在の問題について、文化的な解決を探る視線を提供する場として、あるいはさまざまな文化的対話が交わされ、さまざまな地域における文化的、実験的活動の発生を促す場として開放される方向に……、つまり時代の価値観に対応しつつ美術館のシステムが変化することが大切なのだと思う。

全国のホールや美術館などの公共施設がそうであるように、その流れはもうすでに止めることができなくなっている。

もう人々の興味は近代の西欧化に位置する情報ではなくなってきた……ということだと思う。

研究者はしっかりとその本質を見極めながら、過去の時代の、あるいはこの時代の美術、芸術についてしっかり論じてほしい。

新しい美術館OS (オペレーティングシステム) についてのアイデアやイメージはいろいろあるが、話すともた長くなるので今日はこのへんで。

…

以前芦屋市立美術博物館についてのコメントを求められて回答したものがネット上にまだあるようです。興味のある方はこちらをご覧ください。

僕は展示室は街に広がるべきだと思っているんですよ。で、収蔵庫

は地震や災害に対して強靱なものでありながらエネルギーのかからない正倉院方式のものを、国立公園などの人の安全な場所へ。それとデジタルデータの保管が重要になってきているがそれに対応する美術館がまだ少ない。デジタルデータを保存管理できる地下貯蔵庫が必要になってくると思う。

学芸員は研究者として作品についてちゃんと研究する立場であることに変わりはない。それ以外に外部キュレーター、プロデューサー、編集者による展覧会がプロジェクトとして外部組織と協力しながら駅、病院、学校、役場、福祉施設などの公共施設に併設されているべきホール、工房、スタジオ、ギャラリーなどと連携して開催される……というのはどうか。

日常的にギャラリー規模の展覧会やワークショップ、ディスカッションやレクチャーが若いキュレーターやアーティストの実験場として地域内各所で年間数百の規模で開催され、それらのディレクションやアドバイス、あるいは評論、分析を美術館の専門家が行なう……。

このような美術館イメージについてはちょうど10年ほど前に芦屋市立美術博物館の存続が危なくなったときに意見したもので、もう古いかな……。

そういえば、最近、金沢21世紀美術館とか、水戸芸術館とか、福岡アジア美術館とか、直島の地中美術館とか、美術館が街中で展開するアートプロジェクトの拠点として動き始めているな……。

次はどう動くかな……。いま、動いていないところは、将来において最先端の動きをする可能性もあるということ……。楽しみですね。

新世界・西成での“アー”ツクールな実験。「まちが劇場 準備中」の公開実験が無事終了¹。

拠点マメゲキでのエンディングのパーティには関係者40名ほどが集まり、お世話になった新世界市場のなかで仕入れた食事で深夜まで盛り上がった。

その瞬間の皆の表情と話ぶりから、そのプロジェクトがどうだったのかがわかる。

今回もまた、いい時間を実感する瞬間。

なんだかいろいろなものが溶けてゆく感覚。

今回の新世界でのアーツな実験はけっして派手なものではなく、どちらかという表現の強度としてはむしろ弱いものであったが、それゆえの興味深いことがいろいろと起こった。

なによりも、今後一緒にいろいろなことを展開できそうないろいろな人や場所、物事や素材、そして地域の団体やしくみに出会えた。

そしてそれらとの関係がじわーっと深まり、なんとなく期待度が高まった気がする。

表面的な仕上げを重視するイベント性の高いアートプロジェクトに見られるような、完成形を目指すところに視点を置かず、春からの地道なディスカッションと参加者の発想で実現した「地域アーツ実験」として位置づけていたので、それぞれがそのプロセスに視線と感性を配ることができたのが適正だったのだと思う。

途中、アートプロジェクトの束縛の罨を感じつつも、それなりに等身大の感覚を麻痺することなくそれぞれが動いていたように思う。

これはこれまでブレーカープロジェクト²が6年間にわたり、この地域との信頼関係を地道に築いてきた結果である。

地域とアートが絡むアートプロジェクトは近年増えてきているが、いろんな疑問や違和感を抱えているアーティストや地域も多い。

- 1 まちが劇場準備中
<http://breakerproject.net/2008/machigeki/>



- 2 ブレーカープロジェクト
<http://breakerproject.net/>

地域でのアートプロジェクトは化学反応を引き起こす実験のようなものだと思っていたが、どうもなんの反応も起こらなければ、あるいはマイナスな摩擦ばかりが起これば、消耗しきっている現場もあるという話も聞こえてくる。



その原因が今回のプロジェクトを通して見えてきたような気がした。

それはそれぞれが開放系であるかどうかということ。

商店街に固執せず、街の人が仕事の領域を犯されまいと身構えず、あるいはアーティストとして固執せず、またはデザイナーとして領域を守ろうとせず、お互いがなにかをそこから得ようとする**態度と感性を開放しているかどうか**ということ。

お互いがお互いを理解しあえるなどと、安直で嘘っぱちな状態ではなく、あくまでもそれぞれが理解困難な状態であることを理解しながら、常識的な商店街という枠組み、あるいは地域づくりという枠組みの殻の浸透性を高め——ちょっと緩めた状態なのかな——、同時にアーティストや研究者やデザイナーもそれぞれのこれまで培ってきた概念や表現手法を崩す覚悟で……、いっそのこと「なにものでもなくてもいいんだ！」という態度と感性で、なにかを一緒にやってみようかなとする状態。



それがとても重要。

お互いが頑固な殻をもったままではなにも変化しないし、そこから新しい何事かは発生しない。

お互いに楽しもうとする余裕がなければ、なんの感性も動かない。

それぞれがしっかりと与えられた役割を演じてこなす、分業の義務とノルマの社会システム……、つまり、閉鎖系あるいは固執タイプもしくは、保守隠蔽系同士では摩擦はむしろストレスとなる。

これまでとは違うなにかを求めようとするれば、自然に開放系になる。

逆になにか立場や建前を守ろうとするればどうしても閉鎖してしまう。

いかにオープンであるか。いかに開放型の人と交差する状況ができるか。

あるいはいかに殻を打ち砕き、開放へと向かう状況をつくるのか。

そこに重要なポイントを見つけたのだけど、どうだろうか。

あ、そうか、それはなにもまちとアートのことだけではないですね。なんでもそうなんだ。家族との関係も、企業とも。行政とでも。



30代半ばまではたんなる情動から来る違和感でしかなく、それに対してひたすら根拠なき反抗をするか、自分に言い聞かせて服従するかの選択でしかなかったような気がするが、最近は自分の違和感の正体がそれぞれの現場でなんとなく見えるようになり、それに対する応じ方の作法のコツがつかめてきたような気がする。



それなりに社会経験も蓄積され、認識のボキャブラリーが増えてきたからなのか、反抗をすることで生じる摩擦で消耗するエネルギーが少なくなってきたのか、もしくはインターネットにより多くの情報や知識をブラウズできるようになったからなのか……。



とにかく「常識だ」とされることに立ち向かうのも面白くなってきた。とりわけ大きなお金が動き、ほとんどの人が多くを経験することのない弱み——つまり冠婚葬祭的なモノゴト——に関して、相当なお金が動くことが常識とされている。



「みなさん、多くの方はこのようになさっていますよ」とか、「昔からのしきたりですから」とかの言葉をついつい疑い、本当はどうなのだろう？と考えてしまい、僕なりの解を出そうとする。

どうもだまされているような気がして仕方ない。

まあ、お金を持っていないので疑ってしまうのは必然的なことなのだが……。



本当のことを求めることに意味があるかどうかはおいとも、とにかく騙された気がしたまま、自分を騙して動くことはできない。

せめて清らかな虚を……ということか。

父親が購入した墓地に墓を建てるという自然の流れを自分自身でどのようにとらえて、とくに戦後流通した商品や様式に騙されることなく、父親の遺骨を、あるいは自分の遺骨をどのような空間に納めるのか。

その問題を考えるだけで、いろいろなモノゴト、現実が見えてきて面白い。

僕自身の祖父母の墓も父親の世代につくったもので、昔から伝わる墓なんて知らないし、僕ら庶民にはじつは先祖代々の墓なんて縁がないということを意外と認識していない。

そもそも先祖の数を計算する話からすれば、祖祖父は4人、祖祖母は4人いて……、祖祖祖父は8人、祖祖祖母は8人いてと考えると先祖は無限大の数の……、鎌倉時代まで遡ると当時の日本の人口をはるかに超えた数の先祖になる¹……。かといって、社会の圧力・父系列をたどる選択をとって考えてみると無名の起源の1人にたどるしかないのかもしれないし……。

太宰府天満宮の宮司の西高辻信良さんは菅原道真の39代目²ということらしいが、さらにそこから8代遡ると無名だったわけだし……。

とにかく、人間が無限と感じられる長さがせいぜい99年の三世代程度で、祖祖父母程度、ひ孫までのことでしかなく、その縁に対してどのように接するか。その接し方の態度と行動を導き出すシステムをいかにつくるかということなのかな……と。

いろいろ調べているとウェブ上に墓をつくるという荒技⁴も登場……。そこまできたか。

ウェブサイトでの葬儀や焼香などももっと流通するのかな。

しかし、石は重いな。

態度として、いまの常識のシステムに反抗することなく、かといってそのまま受け入れるわけではなく、ささやかに変換、跳躍しつつ、システムにのっかりながらも、清らかに納得できるところで形にしてみよう。

代々残すというよりも、次の世代にはまた変換されるかもしれないという余韻を残しながら。

* この写真は1880年代生まれの祖父母と1920年代生まれの父と1960年代生まれの僕と。3世代が写っている珍しい写真。



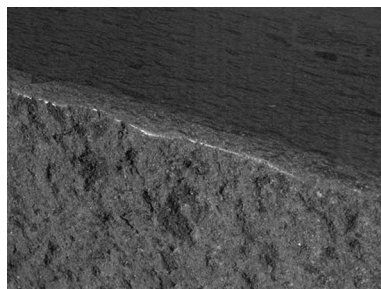
1 藤浩志「33年 33年 66年 66年 99年 99年」
<http://geco.jp/top.page/DogsWalk/%82h%82m%82t.pdf>



2 太宰府天満宮「天満宮とアートの歴史」
<http://www.dazaifutenmangu.or.jp/art/history>

3 家系図の倉庫「大江・菅原氏系図1」
http://keizusoko.yukihotaru.com/keizu/o-e_sugawara/oe-sugawara_1.html

4 アイキャン株式会社「ネットお墓参り」
<http://www.i-can-co.jp/net.html>





今年2回目のスタジオでの数時間だけの作業。

このために福島から福岡に戻ってきたようなもの。前回に引き続き、かえっこで回収分類されたおもちゃのうち、動物、恐竜系破片（腕がもげていたり、足が折れていたり……。意外ときれいなものもある）を繋いでゆく作業。

これ、ドローイングすると相当面白くなりそう……とわくわくしながらの単純作業。

作業中、次にどれをどのように繋ごうかとか、バランスをみたり、接合の具合を考えたりと、最初のうちは意識は作業に向いているのだが、だんだんと単純作業を繰り返すうちに、その意識の持ち方に慣れてきて、そのことをほぼ無意識で行なえるようになって、だんだんと頭のなかが心地よくなっていく。

静かで同じリズムの波長が流れているような感覚で……。脳内でなにかが分泌されているのか……。とにかく頭のなかが白くなったような無意識の状態になり心地いい。

じつは僕にとってなにかをつくるという行為はこのためにあるのではないか……。なにかをつくるということよりも、この時間が持てるということが重要なかもしれないとさえ思っている。

今日もわずか30分程度でその状態になり、ほぼ無意識の状態で作業に没頭しているなか、じつはそのさらに奥底で相当量の回転数で無意識に、なにか作業とはまったく関係のない別のことを分裂的に考えている状態に気づく。

そういえば、昔から単純作業のなか、いろいろなことを考えていることは自覚していた。

しかし、それが無意識の状態の奥の部分で無意識に行なわれているという単純なことに気づいたことはなかった。

無意識なので意識していないし、意識したとたんにはそれは無意識ではなくなる。……あたりまえか。



とにかく、この無意識の作業中、ふと無意識での思考を意識してみると……、どうやら東京でのツアーカンパニーの妄想をしていることに気づく。

家に帰って別の作業をする予定だったが、どうもその無意識中思いを巡らしていたイメージがなんだかこびりついていたので、企画書に落としてみる。

そうか。この作業が大事なんだな。こうやって形が生まれてくるんだな。

Tokyo tour company……。cobuta tour……。

明日から東京経由で埼玉の北本のディスカッションに入る。

週末は北本で……。なにか始めたい人はぜひご参加ください。

僕にとってはとても珍しいことなのだが……、夜中の3時ぐらいにずっと夢の延長で考え込んで起きてしまった。

意外と寝ながらいろいろな妄想しているんだろな……。僕の知らないところで……。

その10時間ぐらい前……、先日出会って以来、ずっと気にしていた埼玉の北本駅の近くの4階建ての元家具屋のビル¹を、借りる方向性で動き出したとの報告をもらった。

頭のなかで、そのビルの使い方のイメージに思いを巡らし、こびりついていたのだと思う。

で、家に帰ると、水戸芸術館から秋に行なった展覧会「日常の喜び」²のカタログと掲載記事資料が送られてきて、ひさしぶりに水戸芸術館での展覧会を思い出していた。

水戸芸術館でたく心を捉えられてしまったイスラエルの作家、ガイ・ベンナーの作品。

家具を組み替え漂流者に扮する作品や、IKEA³という世界中に広がっている大型家具屋で撮影した映像作品。

この作品に水戸芸術館で出会い、スッポリ僕のツボにはまってしまった。

送られてきた展覧会カタログを見て作品を久しぶりに思い出していたのが原因だと思う。

夜中の3時ごろに見ていた夢はガイ・ベンナーの水戸芸術館に展示されていたIKEA系の作品が、北本の家具屋にできたギャラリーで展示されているというものだったと思う。

それを夢だと気づく程度に目覚めつつも、そのイメージの面白さを考え続けていて、ついに耐えられなくなり起きてしまい、事務所の机に座り、暗闇のなか、しばらく考えを巡らした。

そういえば、一昨年、秋田の大館でのプロジェクト⁴でも、元家具屋



- 1 「北本アーツキャンプ、冬のディスカッション」
2009-01-31 23:56
- 2 水戸芸術館『『日常の喜び』記録集』
<http://www.arttowermito.or.jp/art/modules/tiny0/index.php?id=4>
- 3 IKEA
<http://www.ikea.com/jp/>



- 4 ZERO DATE Art Project
<http://www.zero-date.org/>

の空きビルが展覧会会場として利用されていて面白い空間だった。



全国各地の中心市街地にひとつぐらいは大きい家具屋はあった。家具屋は広いフロアを持っていて、ステップフロアだったり、エレベーターがあったり、展示室やワークショップルームとして再利用するには理想的。

ガイ・ベンナーのあのIKEAでの数十回におよぶ無許可での撮影によるホームドラマの作品は、このような日本全国に潜在する中心市街地の元家具屋で展示すると、もっと面白くなるのではないかな……。

そのような面白い作品をさらに面白く強烈に見せる状況をつくることももっともっと可能なのではないかな……。



僕が考え込んでいたのは、そのアイデアについてではなく、そんな面白いアイデアを実現させるシステムが普通に存在していないのかということ。

今回ガイ・ベンナーの作品を知ることができたのは彼がベネチアの国際展に出品していて、それを水戸美術館の学芸員が興味を持ち、美術館という場で紹介したから。

そのアートシステムのなかに「中心市街地の廃業した家具屋で展示する」という発想は繋がっていない。発想がないのでそんなシステムがあるわけがないが、発想があっても、システムがないから実現は不可能だと思ってしまう。

繋がっていない。関係性がない。つまりOFFの状態。

仮に、ガイ・ベンナーの作品と日本全国の元家具屋がONの状態に繋がってれば、相当面白い状況ができあがる。



それぞれの作品には、美術館の展示室以外に、もっと面白い状況になる場があるということで、その場とONな状態に繋がっているというシステムが重要であるということ……。

もっと作品性を深め、関係性を上げたいと考えるキュレーターは、その可能性を引き出すシステムのなかにいるべきではないかな……と

いうことを考えていた。

美術館が地域社会に対してONな状態であれば、たとえば、ガイ・ベ
ンナーの作品に出会ったとき、地域の元家具屋の跡に作品をもっと
もいい状態で見せることができるというイメージを、いとも簡単に
発想できるのかもしれない。

美術館で展示に要する経費を、まちに潜在する地域素材に手を入れ
る経費にすることで、もっと完璧に作品を見せ、さらに面白い状況
をつくることができるようになると凄い。

美術館やホールを箱だと考えずに、**地域社会にインストールされた
文化創造系OS**であると捉えるとそのことは無理ではないような気が
する。

そのあたりのことまで考えて……、頭が麻痺してきた。



存在と存在性の問題という、その字面だけでどうも引いてしまう人が多い。

あるいはいろいろ勉強している人にとっては、その言葉の持つそれぞれの意味や歴史が重なるので、さらにややこしくなる深い問題なのかもしれない。……けど、そんなことだと思う。

しかし、そこにあるためにはそれを認識している人がいるからそこにある。



つまり関係のなかにある。関係がない、つまり、無縁であると「そこにある」ことすらない場合がある。見えなかったり、無視されていたり……。

存在はしていても、ゴミとして存在する場合もあれば、厄介者として存在する場合もある。



とにかく、そこにあるかないかの問題ではなく、どうあるのかということが問題なのだと確信する。

つまり、僕にとっての問題は、「どのようにあるかという状態」をつくるのが大切なのだな……と感じつつひたすら繋ぐ作業を続ける。

そこに意思を作用させたり、想像力を利用したり、編集という作業によってそこにあるものはある状態を作り出すことになる。つまりどのようにあるかが変わってくる。

価値のなかったものが、あるいは存在すらなかったものが、存在し、新しい役割が与えられ、関係性のなかで価値が見出されてゆくプロセスがはじまるとすれば、その地道な編集作業の延長にある……と感じている。

いま、ここで、具体的に、問題にしているのは、元山下家という旅館の廃墟のなかに捨てられていた壊れた座卓と汚れた刺身盛り用のまな板のことですが……。

日比野¹さんと森さんに誘われて、時の芸術祭²というアートプロジェクトに参加することになり、その結果、種子島の南の端っこのJAXA(宇宙航空研究開発機構)³で皆既日食⁴を体験することになった。

幸か不幸かはわからないが……、残念なことにどんよりとした雲に覆われ、太陽は見え、例のダイヤモンドリングとかコロナとかは見えなかった。

個人的には満月ですらろくに見えない視力しかないのです、それほど期待していなかったのですが……。

しかし、その時間……、日食がはじまり、まだ午前中だというのに刻々とあたりが暗くなりはじめ、水平線近くや北側の空は明るいものの上空だけは真っ暗になる。

想像を超えた神秘的な雰囲気、いてもたってもいられないような……、重くて深い高揚感のようなものに襲われ、言葉を失ってしまった。

そして、そこからありえないスピードであたりが明るくなり、鳥が鳴き始め、重いものに押さえつけられていた風景全体がみるみるうちに溶けてゆくような感覚……。

太古の昔から多くの人のイメージを掻き立て、神話を生み出し、あるいは祭ごとに利用され、権威をつくる力として科学へと導いたエネルギー源であったのではないかと……との思いつきを強く確信する瞬間。

ものごとは常識を超えたありえないと思われていることでも起こる。

絶対に共通性がないように思われる数字に公倍数が必ずあるように、そしてそれは永遠に続く数が無数に存在するように、ありとあらゆる物事は、常識的なありかたや存在を超えてあるのだということを証明してくれた瞬間でもあった。

物理や天文や数学も面白いが、それを認識しようとしながら、その力を利用して人間の活動を作ろうとした人間のイメージ力もまた面白い。

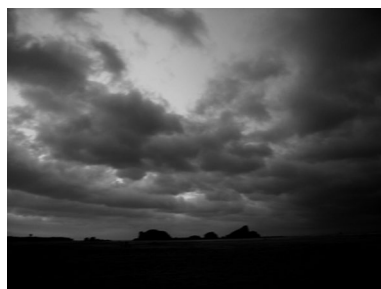


1 カフェヒビノネットワーク
<http://www.hibino.cc/>

2 時の芸術祭
<http://blog.tenblo.jp/tokinogeijutsusai/>

3 JAXA (宇宙航空研究開発機構)
<http://www.jaxa.jp/>

4 国立天文台「皆既日食の報告」
<http://www.nao.ac.jp/phenomena/20090722/index.html>





しかし、そんな人間の小さな思惑とは関係なく、とてつもなく大きな力で動いている存在があるのだということもまた実感した瞬間。

おそるるにたるなあ……。



今年の福岡アジア美術トリエンナーレ¹のカタログに寄稿した文章のなかにちょっとだけ書いてみたが……、僕の周辺には、地域社会のシステムに介入し、活動を発しているアーティストが増えてきたように思えて興味深い。

僕が美術史を語る立場にないことは承知しているし……、なによりも文章下手だし……。

それでも、地域での表現の現場に接してきて、1980年代以降の、日本の地域社会での美術表現の変遷を——ある程度整理して捉えている自分に気づき——乱暴に言い切ってみたのがタイトルの流れ。

とくに美術の周辺で、表現者が何を問題意識としていじる傾向にあったのか……というようなもの。

僕が大学に入学した70年代後半はまだ「立体と平面」や「具象と抽象」の問題をいじる先輩たちが多く、その問題から「空間」の問題へと興味が移行しつつある時期だったような気がする。

80年代インスタレーション作家が多発し、僕もインスタレーション作家というレッテルを貼られ、それから逃れようともがいた時期もあった。

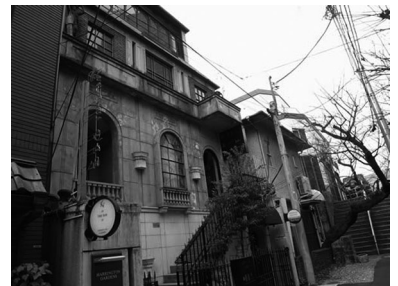
そのうち、「空間」をいじる延長で「場」の問題が輸入される。それが90年前後。

どちらかという僕自身も、「場と空間」の認識に翻弄され、違和感に向き合いながら、極めてまじめに動いた結果、見えてきたのが地域社会の「システム」の問題。

同時にコンピュータとインターネットの普及により、OSという概念を含むシステムという考え方が急激に変化したのも90年代半ばで、いろいろなあり方が急激に変化していった時期と重なる……。

僕自身、地域に内在するシステムに関わる表現に興味を持ち始めたのが95、96年ごろであるが、2000年あたりから、「場」というよりは「システムや仕組み」をいじり、地域社会に介入しようとするタイプの表現が見えるようになってきたと思っている。

1 第4回福岡アジア美術トリエンナーレ2009
<http://faam.city.fukuoka.lg.jp/FT/2009/jpn/index.html>





そして、近年の地域におけるアートプロジェクトの拡がり……。

いろいろなアートプロジェクトを検討する立場で全国各地からいろいろなアートプロジェクトの内容を読み込むと、その参加作家のタイプが未整理で……、企画者側もそのような作家の傾向も認識していないし……。



いまだに地域に壁画という平面をかけたり（シャッターに絵をかくてシャットアウトしようとしたり）、立体を置いたりするプロジェクトを地域のアートプロジェクトとして——もちろん状況によってはそれが悪いわけではないが——それが**地域の若いエネルギーの可能性を阻害する障害物として鎮座することも多い……**。

企画者がその表現の傾向に無自覚にいる状況について……、それでいいのかな……と。

……ところで、これを表現を作品化するシステムのフォーマットで見るとさらにその関係性は興味深い。

平面・立体とか、抽象・具象とかが問題になっていたころのアートシステムは公募展や会員制が中心だったので、そのフォーマットはキャンバスだったり、サイズや材料を限定する規格型のフォーマット。



その後、空間の問題意識の発生は貸し画廊や美術館などのギャラリーシステムが広がった時代と重なり、その時代におけるフォーマットはまさにホワイトキューブを象徴する概念型。

まちに置かれた無口な彫刻物が撤去できない吹き溜まりとなり、公害扱いされはじめ、サイトスペシフィックという言葉が語られ、場の問題が浮上しはじめたのが90年ごろ。それと連動するように、地域にアーティスト主導の現場がポツポツと発生し、必然的に地域社会との深い関係のあり方が模索されはじめ、地域社会のシステムに対話型のフォーマットが発生する。それが地域におけるアートプロジェクトのさきがけ。

そして地域社会システム・対話型フォーマットのアートプロジェクトが大型のうねりとして流通し始めるのが2000年以降。

場の問題から離れ、その地域社会のシステムに介入しつつも、全国のアートプロジェクトに組み込み可能なシステムの問題やネットワークの問題をいじる作品も一般的になってきたのが今の現状。

フォーマットはまさに地域社会のシステムのなかにあり……、あるいは人の関係のあり方にあり……、いわゆるネットワーク型……。

このあたりを論じている詳しい本などがあれば教えてください。

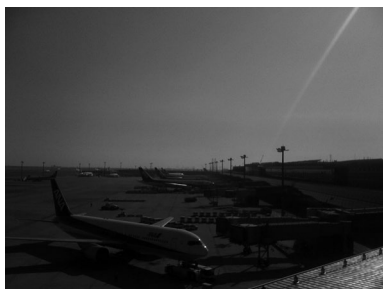
僕も勉強して客観的に捉える必要があるな……。

特に、AAFとか、東京とか、大阪とか、福岡とか……、地域づくりの戦略としてアートプロジェクトを語る人が増えてくる一方で、その前提としての共通認識があまりにもばらつきがあるようで……、困ることもあるんです。

問題はこれからの可能性であることに、変わりはないのですが……。

*写真と文章はまったく関係ありません。





僕らが学生のころ——つまり80年代前半まで——システムとフォーマットという概念は一般的じゃなかったなあ。

ハードとソフトといういわれ方が流行ったのが90年ごろだけど、OSとアプリケーションという概念はまだコンピュータの概念だった。

昔は記録メディアをコンピュータにインストールするとき、必ずOSに合わせてフォーマットするという作業があったけど、最近はフォーマットの必要のないものが増えてその概念自体が希薄になってきた。

……で、最近とくにこのフォーマットという考え方が気になって仕方ない。ただし、地域社会のさまざまなシステムにおけるフォーマットという考え方。

フォーマットというものがなにを意味するかということを問題にしているのではない。

フォーマットがあることによって加速するナニモノかと同時に、それによって束縛されるナニモノかについて……。

意味不明だが……、気になっている。

「夢」というと一般的にはDreamの夢をイメージしがちだが、将来の夢というときの夢はむしろWish (= 意志) に近い意味だと思っている。

しかし、通常、その両者の違いをあまり認識せずに使われることが多いのでモヤモヤしてしまう。

たとえば、**夢**を遠い将来のビジョンのようなものだとすると、**意志**は近い将来に対するベクトルのようなものなのではないか。

ベクトルとは方向性とその強さ。

ベクトルの先の将来のビジョンの類はぼかして見えない場合が多く、とにかく、いま現在の地点での意志のありようが問題であり、それがとても大切だと思っている。

むしろ、将来どうなるかがわからないので興味深く、意味が深いことだと思っているが……、一般的には将来のビジョン——具体的な姿——を思い描くことが大切だとされている。その常識が僕をモヤモヤさせる。

特に若者相手に「夢を持って！ 夢はなんだ？」と自信満々に問いかける大人……。

「将来のことなんかわかるわけがない！」とひねくれてきた僕には意味不明の問いかけだった記憶がある。

遠い将来に目標を持ち、そこに向かうために盲目になることよりも、その次の瞬間にどのように動こうとするのかの意志と行動力、瞬発力、無意識に動いてしまう感性が大切なのではないかと感じてきた。

もちろん、一向に夢見て構わないし、夢やビジョンを持つことでなにかが加速することは確かだが、ビジョンに囚われ、だまされ、大切なことを見失ってしまう場合がある……というのも事実……。

見えないものに向かう勇気を魅力的だと思ってしまうし、その先へ向かう強い意志の連続が結果の連続を連鎖させる現実のほうが興味深いので仕方ない。



無限に広がる未知の可能性に向かうことが可能だとすれば、つねに感覚を閉じずに現状と対話しながら、手探りで……、見えない次の一歩を踏み出す意志こそが大切なのだと思う。

そのとき、遠い将来のDreamとかビジョンに類する夢が常識という壁になって阻害する場合もある。

…

確実に言えることは……、1年後の世界ですら誰も正確に予想することはできないのに、10年後の自分なんて予想することなんかできるわけがないということと……、明日の行動の連鎖が確実に1年後の周辺の状況を変化させているということ。

とにかく……、1年がまたはじまる。

僕の今年の意志は……、じつは弱く、か細く……、揺らいでいる。

……そんな年があってもいいんじゃない？

去年のいまごろ制作したUltra Tower (ウルトラタワー)¹が1年間、どこにも登場することなく前原のスタジオで眠っていて……、そのままひどい環境に放置していたら結構ひどい状態になっていたのもう一度修復しつつ、再制作。

1 「スタジオでの1週間」
2009-02-21 22:58

制作しながら自分自身、ずっとなにをいじっているのかを考えていた。

「なにをいじる性質(タチ)なのか?」という視点で作品や作家を見るとその作家の求めている方向性が見えてくるので興味深いということを最近ようやく認識する。

たとえば、絵描きと一言で言っても、なにをいじっているのかでずいぶんと違う。

絵の具をいじる性質、形をいじる性質、色をいじる性質、風景をいじる性質、湧き出る妄想をいじる性質、画面をいじる性質、絵画の文脈や美術史をいじる性質、あるいは絵画のシステムや権威をいじる性質……。いろいろな性質の人がいるから興味深い。

しかし、絵画という文脈でひとつの地平にならんでいることに大きな違和感……。

建築家にもいろいろな性質がある。素材をいじる性質、図面をいじる性質、空間をいじる性質、歴史や文脈をいじる性質、人の行動や関係をいじる性質……。時代とともに流行があったり、常に新しいいじりどころが登場したり……。

それぞれの性質については時代のなかでの流行り廃りはあっても、別に上下があるわけでもなく——流通するかどうかはさておいて——性質なのだから仕方ない。

僕自身、最近になってようやく自分のなかの性質が見えてきたような気がする。

つねに「状態」をいじっているのではないかな?

彫刻してみたり、空間をつくってみたり、まちに関わってみたり、いろいろなところでディスカッションしてみたり、絵を描いてみたり、



廃墟を掃除してみたり、並べてみたり……。

結局、状態を過剰にいじることで……、ある**特別な状態にすることに喜びを感じる**性質なのでないだろうか？

ということで、ウルトラとかモンスターとか……、通常ではありえない状態にしている作業の結果……。

この冬最大の寒波とかで、福岡でも積雪。そんななか、スタジオでの作業。

例の松ノ木の枝を支持体として、かえっこで集まってしまったおもちゃ類の中からモンスター系のものを繋いでみる。

ということで、モンスタースティックのできあがり！？ ……て、これなんだろう？

なに？ という疑問に対しては……、「monster stick」という名称を与えることで、なんでもないものがある固有のものになる……ということも興味深い。しかし、それは第1段階……。

名称を与えたからといって存在するかというとそうでもなく……、社会のどのシステムにどのように関係を持つかで、その存在が位置付けられる……というのが第2段階？

たとえば……、演劇で使われる小道具になったり、こどもの遊びの道具になったり、地域の祭りの道具になったり……。あるいは新興宗教の象徴になったり……？

それと並列に街でのアートプロジェクトというシステムがあるとして……、その街飾りのツールとして利用された瞬間に……、それは存在しはじめ、新しい関係性をつくりだすことになる（無視されることも多いが……）。

そこからが第3段階……。

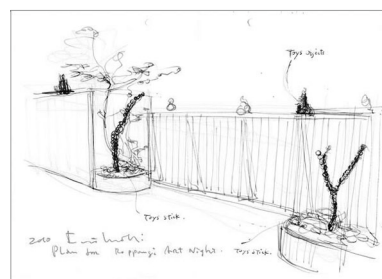
その存在が思いもよらぬ関係と展開をもたらし、そこからいろいろな意識や状態が流通し始める……、場合もある……。

そのあたりが一番興味深いところ。

こんなになんでもないものが……、もの凄くありえない連鎖を引き出したとしたら……。

それはまさに、monster magic？ あるいはart？

1 「松ノ木との再会」
2009-12-21 14:39





1 「自宅の細部を防災の視点で紹介してみる。その1」
2007-12-21 23:57

引っ越し作業もいよいよ大詰め。

1996年のミュージアム・シティ・天神でのプロジェクトで使用して、そのままもらうことになった競艇用のボートを運び出す。

ボートのファサードが外れると、ごく普通の民家が現われる。

うーん、普通にきれいな家だったんだ。

...

しかし……、モノとの戦いの引越しだなー……。

1996年末に、ここにくるまでは、実家を離れて20回以上、結婚してから10回以上引っ越してきた。

そのころまでは所有するモノをかなりコントロールし、モノに束縛されない生活を目指していたというのに……。

そんな生活から、ある意味逃れるために、一度、すべてをストックするというあまりにも単純な試みの結果、いまの苦労がある。

いったい、いくつのモノを無意味とわかりながらストックしているのか？

それぞれのモノの年齢をイメージしながら……。

「僕が所有するモノ年齢を加算するとどうなるだろう？」、……という妄想が頭のなかで渦巻く。

高校時代から使っているコーヒーミルやホットプレート、鹿児島でカフェを始めたときに仕入れた中古のシンクやポットやプレート類……。

30年以上使っているものが100点以上はあるのかもしれない。

それだけでもモノ年齢に数を加算すると3000年。

友人の佐藤君から預かっている古本の平均年齢が30歳として——
1,500冊以上あるので——45,000年度数。

…

このモノ年齢は、あたらしい指標になるのではないか？

家自体が昭和4年のものなので、80年クラス。

それに付随するものが100点はあるので8,000年。

骨董の食器や着物、漆器類が500点あるとして、50年モノとして
25,000年。

いろいろ加算すると10万年度数程度のモノ年齢の家になるのかな……。

…

このモノ年齢って、ある指標として使えるんじゃないかな？

いかがでしょうか？



体をつくるには体のいたるところを動かしてつくる。運動、スポーツ、各種トレーニング。

いつもは使わない体の部分を使うことで体はつくられる。

同様に頭をつくるには、頭を使うことが大切だということは何れも知っている。

考えてみると、小学校以来、いわゆる学校教育において、鍛えられてきたものはおもに頭、そして体。

しかし、心をつくる機会は学校教育のプログラムのなかではほとんどない。

なぜなのだろう？

体や頭をつくるためには、使われていない部分をじわじわと使い、ある程度のプレッシャーを与えながら鍛えるのがいいというのはわかっているが、心をつくる手段というのはそれほどだれも意識していないのではないか。

心を揺さぶり、日常では使わない感情を動かし、プレッシャーを与えながら心を鍛える。

いわきアリオスでホールそのものの存在理由を尋ねる市民の声を聞きながら、鹿児島時代に150人の混声合唱団活動で体験した音楽ホールでの常識を超えた感動（自分の声がまったく溶け込みホール全体と一体になっている感覚……のようなもの）や、学生時代に没頭していた演劇の公演を終えた後の観客との熱気のなかでの感動体験を思い出していた。心揺さぶられ、体全体から涙がこみ上げてくる感覚……。

考えてみると、**絶望と感動の振れ幅の大きさは、そのまま心を鍛えることになっているのではないか……**などと考えながら、思わずディスカッションの会場でマイクをとり、個人的な意見としてその思いをぶつけてみた。

心をつくるトレーニングのようなものはじつは地域教育が担うべき

責務なのではないだろうか？

もちろん、家族関係、兄弟姉妹との生活の激しい喜怒哀楽や、友人関係や先輩後輩との関係での摩擦などは人間の感性や感覚、心のありようが形成されるうえで重要だということは前提としても、いろいろな世代、いろいろな職業、いろいろな人格との関係のなかで感動体験を作り出す仕組みは地域教育に大きな可能性がある。

……ってなことを考えながら瀬戸内海の島々を眺め、新たな舞台に向かう気持ちになる。

うーん、心を揺さぶる作品づくり……か。ハードルは高い。

地域でなにか新しい活動が発生するにはそれなりに新しいシステムが必要なのだと思う。



地域活動のシステム（仕組み）の多くはある時期、それなりの理由があり発生してきた。自治会とか子ども会とかPTAとか敬老会とか婦人会とか青年団とか青少年育成会とか商店街振興会とか連合会とかなんちゃら委員会とかかんちゃら会とか……。

その多くがそれぞれの時代の必要に応じ発生し、それなりの拠点をもちつつ、それなりにその地域活動に貢献してきたのだと思う。



ただし、その時代にOSという概念があったか？ システムは更新されるべきという常識が身に付いていたのか？ 時代の価値観は変化し続けるということが前提としてあったのか？

場合によっては、多くの機能しない仕組みや拠点が、それなりの税金が投入されながら地域に染み付いていたりする。



……それはともかく、とにかく新しい仕組みは必要に応じてつくられるものだが、各地で問題になっているのが拠点づくりが先か、システムづくりが先か……の悩み。

拠点がつくられることで人が集まり、活動が加速し、仕組みがつけられる……という話もあるし、仕組みができることで活動が発生し、それが加速することで拠点がつけられる……という場合もある。

そのどちらがいいというわけではなく、その場その状況なりにそれらのものが発生し、なんらかの活動が動き始める——その状況そのものが一番興味深い。



とにかくビジョンを先につくることに疑問を持っている僕としては——いや、正確には——ビジョンに縛られながら活動を展開しなければならない現場の状況に疑問を持っている僕としては、最近、**アンカーポイントとベクトルをつくる**ところからはじめる……という手法に可能性を感じている。

それは、拠点として展開する可能性のある場をアンカーポイントとし、システムとして形成できそうなベクトルをインストールすると

いう手法。

今回の「藤島八十郎をつくる」という作品はまさにその実験だと捉えている。

でもこのことについてピンと来る人は、そう多くはない。

もうすこし動かないと見えないでしょうね。

地域の活動をつくろうと右往左往する「藤島八十郎の活動をつくる」というシステムによって発生する数々の地域実験と、その「藤島八十郎の家」という拠点。

そして、その活動は編集されることによって初めて作品化される……というところまで……。

だめかなあ……。



青森の国際芸術センターでドローイングとデッサンのワークショップを高嶺と小山田と3人で開催してみる。

大切なのは、描こうとすることでも、つくろうとすることでもなく、自分がなにをいじる性質なのかを自覚することなのではないかと思う。

しかし、それでも、いじる延長でなんらかの形を立ち上げる技術なり手法なりが必要の場合もあり、それは手の延長にある道具類といかに接するか……の基本的な技術や知識があるのは確かだと思う。

そのあたりを意識しながらのワークショップ……のつもりだったが、その参加者から「日常的な行為と表現行為の違いはなんなのか？」との質問がきて、その瞬間、ちゃんと答えられなかったのがずっと頭に残っている。



高嶺の根っこがぶら下がっているツリーハウス作品

そのときは日常的行為を客観視しているかどうか——客観視する延長に表現行為はあること——を話したに留まったが、それではもちろん足りない。自分の性質を客観的に自覚したうえで……、さらに自分の日常とか常識とかを相対的にほんの少しでも超えようとする意志に表現という行為は存在するのではないかと考えている。

自分を超えようとするかしないか。

そこに表現行為と呼べるかどうかの境目がある。

あくまでも個人のなかの相対的なものでしかないが、それを日常的に重ねることに個人のなかには確実に意味が生じてくる。



小山田徹の測量のワークショップの様子

「超える」という**相対的に+ (プラス) の方向**にある場合、その日常が蓄積されると膨大なものになる。

しかし、「超える」という意識がない場合、相対的にゼロかー (マイナス) だとすると、その日常が蓄積されても、ゼロかマイナスでしかない。

表現行為はその蓄積の延長に意味が生じてくるとは思うが、それが個人の領域のままではいくらその表現が凄いものであっても、社会

的に存在することはない。

その意味で作品化のプロセスはまた別の話になるが、その前提としての表現行為というものはそんなことなのかなと……、つくづく感じている。

で、今回の青森で開催された鹿児島県立甲南高等学校美術部出身の3人の展覧会、高校時代はごく普通の日常的な行為を行なう学生でしかなかったが、それぞれの立ち位置でまったく違う方法で、それぞれが自分の日常の行為を超えようと重ねてきた結果なのだと思う。

それぞれいじるポイントはまったく違うが妙にシンクロする面もありながら、確実にそれぞれが自分自身の日常を超えようとした結果、ここにいるのだなと感じる。

そしてそれぞれが活動するアートのシステムも、それに対する編集の仕方も、少しずつズレていながら違うのがまた興味深い。



現場が長いといろいろと書き込みたいことがあるものの、現場にいると時間に隙間がないのでブログを書き込む時間を確保できない。

このブログを書き込むのは大体移動中の新幹線や飛行機の中、あるいは待合室……、というケースが多いので必然的に移動が少なくなるとブログ書き込み数が減ってくる。

この夏、瀬戸内から青森、秋田、鹿児島、熊本、福岡そして豊島……と移動しているものの、書き込む隙間がなくて……と言い訳しとこ。

秋田のゼロダテについても書き込みたいけど時間がないなー。

地域の疲弊感。そこからどうにか脱しようと右往左往している地域は多いが、それが貨幣経済ベースの考え方から抜け出せなかったり、いまだに「活性化」というお題目に惑わされていたり……、発言力のある大物に翻弄されていたり……、なかなか難しい地域と接することも多い。

地域だけではなく、個人が運営している組織や団体、あるいは家庭のなかでもそういう感覚はあるかもしれない。

とにかく、疲弊感というものをじわっと払拭する価値の転換が必要だということを——自分を含め——当事者が一番気づきにくいのかもしれないなあ。

表現活動に関わるシステムの話になると思うが、いくら個人が自分の日常を超えようと表現活動を重ねてみたところで、その表現行為をちゃんと起動できるシステムとフォーマットに出会わなければなんでもない。

いくら素晴らしい表現行為や意識であっても、社会化というプロセスに無関係であれば、周辺に知れることもなく、興味を持ってくれる人に出会うこともなく、批判してくれる敵と戦うこともなく……、存在すらしないことになる。

生物の遺伝子ですら永遠に変化し続けるわけだから……、もちろん時代を超えた完璧なシステムもなければ、完璧なフォーマットもないということを前提とすると……、当然、だれもが表現行為の社会化の段階で、なんらかの不完全なシステムに関与することになり、そのうえで自分の表現行為を客観視することになる。

「モノゴトの価値は『誰と』対峙するかで変わる」という視点でとらえると、とくに、そのシステムがいかなる人や企業、組織などに繋がっているかなどの、いわゆるステークホルダーの違いが問題になってきて、それが個人の表現行為をどのように展開し、予期せぬ方向に連鎖させ、その行為のあり方を変化させ、あるいは加速させるのか……に繋がっているということが重要であることは……、いまさら言うまでもない。

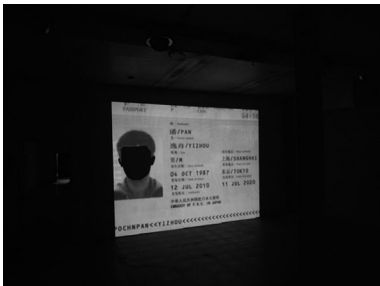
ここで問題にしてみるののは、その不完全なシステムをどのように更



1 「70年代『平面と立体』→80年代『空間』→90年代『場』→00年『システム』……とか?」
2009-12-19 23:06



2 「カテゴリ: 秋田・大館での活動」
2007-08-07 21:18 - 2007-08-11 12:55



新させてゆくのか、その手法と視点の問題。

秋田の大館で毎年開催されているゼロダテという地域づかひのシステムは、今年駅前の「御成座」という映画館跡の場を使い始めたことによって大きな更新を遂げて新しい可能性と期待感を作り出していてとても興味深かった。

僕が最初にゼロダテに関わったのは3年ほど前、そのころから大町商店街というほとんどがシャッターで閉じられた店舗の内部や裏側をかなりの規模で開放したシステムとして興味を持った。

シャッターが閉まっていることが前提で、そこに絵を描いて商店街をいじろうとする方向性は間違っていると感じていたころに行なわれた企画だったので、商店街のシャッターを全部あけようとするこのシステムに興味を持ったし、いろいろな角度からまちを俯瞰できるこの企画の拡がりを期待した。

しかし、商店街の空き店舗というフォーマットは、比較的小規模の閉鎖空間を自由にいじりたい性質の……、どちらかというワークショップ系とか、インスタレーション制作系の表現者にはいいかもしれないが、その空間の質に限界もあった。

それにしても、巨額を投資して風通しの悪いレジデンス施設や街から隔離されたギャラリー空間をつくってそこにアーティストを囲うシステムよりは……、なにか自分を超えたいと思っている表現者にとって、人が暮らしてきたまちの空間をある期間占拠し、寝泊りし、まちの人と関わりながら自由にイメージを立ち上げる活動を行なう場が無数に拡がるシステムのほうがはるかに有効な気がする。

実際にこの期間、秋田の大館の街には全国から多くの若手アーティストや研究者、社会学や都市計画、建築、美術、デザインなどに関わるかなりの数の学生などが長い間滞在し、そのシステムの起動と運営に関わってきた。

それでもなお、個人的にはマンネリ化してしまいがちな空き店舗や空き地の拡がる商店街ベースのシステムにある種の限界を感じていたものの……、ゼロダテはここにきて、駅前徒歩3分に位置する大館唯一の映画館だった場所を使うことに成功した。

市民にとって共通の記憶の宝物が幾重にも重なった映画館跡という場を利用し、ホールのみならず、バックヤードもすべて開放し、これからはじまる活動の拠点として整備し始めている御成座（オナリザ）の姿とそこで熱く語る地元の映画、映像ファンのおじさんたちに接して……。ゼロダテというシステムが新しいシステムとしてバージョンアップし、もしかすると商店街すらも変わるかもしれない……。という期待感すら持ってしまった。

その現場に接して、確信したことは、それぞれのシステムの更新の手法について……。

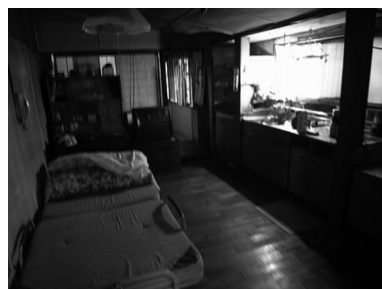
つまり、大きなシステムを大きな視点からバージョンアップしたり、更新しようとしたりするのではなく、あくまでも現状の関係のなかから拡がる些細な関係を見逃すことなく、目の前に立ち現われる問題にちゃんと向き合い対応し、開かれた関係のなかで、既成の常識や肩書きや大義名分、コンセプトや大きな力にだまされず、こつこつとシステムをいじってゆこうとする振る舞いが大切なんだなということ。

現場の周辺にある場や人、組織のなかから、ちゃんと感覚的に信頼できる要素、あるいは重要な問題を見つけだし、そこにちゃんと触れることができるかということ。

そこをいじっているうちに、**そのシステムが大きな束縛を受けていない限りは、そのシステムって自然と更新されてゆくものなんじゃないかな。**

逆に一番よくない疲弊感は——現場の些細な問題も見ようとせずに——大きなシステムそのものを大義名分やコンセプトの側から力のある人がそのフォーマットまでもいじろうとすることから生まれてくるんじゃないかな……。

あれれ？ それって、90年代半ばまで多くの地域で流行していたやりかただったような気がするが……。もう忘れてしまった。





1 東京文化発信プロジェクト「Artpoint」
<http://www.bh-project.jp/artpoint/>

東京文化発信プロジェクトのひとつ、東京アートポイント計画。去年から動き始め、まだ1年半だというのにいろいろな種が蒔かれはじめ、それぞれの現場での問題の一角が見えはじめてきた。

大きな「文化・芸術」という視点に縛られず、地域の小さなポイントに目をつけてそこからにじみ出てくる問題に対峙しながらいろいろな活動の連鎖やネットワークをはかろうとするのが「東京アートポイント計画」……。大きな行政が行なう事業としてはかなり画期的な視点のプログラムとして注目し、僕もそれなりの発言をしつつある。

しかし、なかなか現場は難しい。



2 3331 Arts Chiyoda
<http://www.3331.jp/>

担当者の問題でもなく、個々に関わる現場の問題でもなく……。システム化しようとするときに働く荷重の問題……。なのかな。

それは東京都のような大きなシステムの問題だけではなく、3331²につくられた「かえるステーション」の運営システムのような小さな現場の問題も繋がっている。

最近、荷重の要因のひとつは「数の暴力」なのではないかと考えるようになった。



単純に数が重なると多数になる。多数になると暴力になりえる。

個人のなかに発生する些細な違和感を無視することなく、ちゃんと向き合う態度にこそ——常識や偏見を超えようとする態度にこそ——「つくる」ことの重要性があるということはわかっていながらも、その「つくる」状況をつくろうとする段階で——社会化しようとする段階で——流通の段階で、「数の負荷」が発生する。

そのことにどのように向き合うかが問題の鍵になる。

多数は暴力になりえるということは知っているというのに、相変わらず多数決が原則となっているこの社会のシステムに違和感を抱いている人も多いのではないかな……。

多いということが力になりそう……。ほら。暴力。

多数決の原理に基づく選挙という常識についても……、いつもぶつかる違和感。

そろそろ新しいシステムがイメージ化されてもよさそうだと思うがなかなか見えない現状。

とくに、日常的に……、東京という大勢が動いている現場を離れて暮らしているので、たまに地下鉄や駅、交差点などで大量の人を体験するだけで、暴力を受けているような気がする。

……そういえば、瀬戸内の小さな島で起こっている問題³も、数の暴力と無関係ではないのだろうか。

3 Art Setouchi
<http://setouchi-artfest.jp/>

……昔、鹿児島で経営していたカフェも、かなりイイ空間としてつくったつもりだったけど、来客数が増えるごとにイイ空間は崩れ、数を維持する方向に流れ始め、閉店の道を進んだ。

数の暴力の裏側には貨幣経済、資本主義の原則が張り付いている。

そういえば……、かえっこの基本原則、原初的数の認識、「1、2、3、いっぱい」という数え方に立ち返る。

いっぱいという感覚は数の問題ではなく、相対的な感覚の問題なのだと思う。

この「いっぱい」に対する感覚……、「いっぱい」は「欲」と密接な関係にある。

掘り下げる必要があるな……。

ああ、でも掘り下げるのが苦手なんだよな……。掘り下げようとしてもズレてしまう性質……。

基礎超識という言葉を投稿タイトルについてつけてみた。超識は常識や知識ではなく……、超常識のようなもの……。

たとえば……、僕の台所や八十郎の台所では食器洗いの洗剤の入っていたボトルを醤油さしにしたり、オイルさしにしたりとかなり貴重なものとして利用するのが常識だが、どうやら一般的には超常識らしい。

1 「ドレッシングボトル」
2004-05-25 23:46



食料品のパッケージやペットボトルなど家庭から出る生活廃材はいろいろな活動を作り出す素材として洗って分別して倉庫にストックすることが我が家の常識だが、やっている人はあまりいないらしい。

カセットコンロと電磁調理器を数台必要に応じて机の上に取り出して料理するスタイルが我が家の最近の常識になっているが、それも一般的には超常識らしい。

我が家にはテレビがないが……。それはまあ、普通のことか。

家庭の中にテントを張ってそこで生活しているのも超常識？

そうか。超常識という言葉も常識じゃないんだな。ずいぶん前から、個人的に使っている言葉なので慣れてしまった。

常識でないことを非常識というが、非常識という言葉はネガティブなので、ポジティブな方向に常識を超えている物事を超常識と呼んでみたのが……。10年近く前ぐらいからかな。

超常識をさらに略して超識というのはどうだろう。

常識を知らないがゆえに、個人的にずいぶん前から思い込み、すでに自分のなかでは常識となっているのだが、周辺の人々の常識を超えている状態のものごと？

とにかく、瀬戸内国際芸術祭の現場にいて、僕の常識が周辺の人たちとかなりズレているのだなと思うモヤモヤと出会い、個人的な基礎超識を紹介しなければならないな—と感じている。

そういえば、モヤモヤという言葉も僕のなかの常識——超識——な

のかな。

モヤモヤとはイメージが立ち上がる以前の状態の呼び名。

モヤモヤは違和感やズレから発生すると定義しているが……。それも僕の言葉かな。もう一般化したかな？

モヤモヤからイメージを立ち上げ、イメージが流通し、編集されて価値化されるという時間の流れがある。



芸術祭とか展覧会とかのフォーマットのなかでは、どうしても、あれもこれも「美術作品」と単純に一括りにされ、均一化されて見られてしまうが、じつは作品にも時間軸がある。

発芽の時期があり、旬があり、完熟期があり、保存加工期があり、醸造期があり……、あるいは告別期もあるかもしれない。

もともと博物館は役割を終えた……、ある意味死後の適正な墓場として、その慰霊を尊重し保存、伝承するためのものだったろうし、近代美術館はその意味では保存加工、醸造施設だったのかもしれない。



とにかく、さまざまな活動にはイメージとして立ち上がる瞬間があり、それが時代と関わりうごめきはじめ、存在感を放つことで次の時代の価値観へとつながってゆく流れがある。そこを旬の時期と捉える。

価値化されたもので希少なモノが高額な商品として流通するが、価値化されるプロセスにはいろいろな人の思惑が絡み合う時間の経過がある。それが成熟期とか醸造期とか……かな。

1 「久しぶりに体験する象徴的な安置場……」
2006-06-01 00:04



そうやってつくられたものは確かに多くの人の心や欲望を突き動かしただけのことはあってそれなりに凄い。

多くの具現化された作品はイメージ化されたものだが、イメージ化される前の状態があり（個人的にはそれをモヤモヤと呼んでいるが）モヤモヤからイメージが発生する瞬間がもっとも僕にとっては魅力的だと思っている。



しかし、その発芽物はまだ流通していない意識や価値観なので「なんじゃこりゃ〜」だったり、「じわー」だったり、「ムムム……」だったり「がっぴょーん！」だったり……、とにかくいままで出会ったことのない感情をともなうだけで、その後それがどのような連鎖を引き起こすのか、それがなにを意味するものなのか理解不能のことが多く、それに価値があるのかすらもまったく保証がない。

だからこそ次の時代の価値観の種や卵になりえるし、可能性と期待

感にドキドキする。だからこそ価値がある。

そこに注目する多くの人は価値化され流通してしまった過去の表現作品に多く接するうちに段々と価値化される前のイメージ——つまりまだ見たことのない、まだ体験したことのないイメージ——を求めようになり、そこに会わなければなかなか心が動かなくなってしまうのかも。



…

とにかく、数百年前や数十年前に価値化された美術館の作品から美術の授業が構成され、美術の常識が流通しているために、価値化される前の発芽期や旬の状態の作品について「わかりにくい」との評価で切り捨てようとする常識に違和感を覚える。

わからないから面白いと思う感情こそ小学校で一番教えなければならない感情なのだと思うが……。



…

もっとも、わかりやすいフェイスやスキンのレイヤーをまといつつ理解不能なところで活動している僕自身が言うのもなんだけど……ね。

そうそう。熱烈なアートファンはわかりにくいスキンやフェイスのものを好む傾向にあるよね。

さて、ここで超識1の33年1世代の超識とリンクさせると、一人の人間の時間軸にも3段階の世代の変化があることに注目してほしい。



地域とアートを語るときにそれぞれの時間軸の掛け合わせがキーになると思うのだが……。

*写真は文章とは直接関係ありません。豊島に設置されている美術作品の周辺で撮影してしまったモノたちです。

そもそも美術作品は味わうものだと思うので、美味しいか美味しくないかが問題だと思っている。けっして、わかるとかわからないで判断するようなものではない。



食事をわからないから食べないという人はなかなかいないんじゃないかな。

食わず嫌いというのものもあるが、食べてみないとわからないものほど美味しかったりする。

美味しそうに見せているものには毒が含まれる場合もある（そういえば昔僕の作品をそのように論じた人がいたな……）。

料理と一緒に「どうやってつくったのか、なぜそんなものまでつくったのか？」はわからないもののほうが美味しい場合が多い。

いい食事があるようにいい作品もあるし、悪い食事があるように悪い作品もある。

そして匂もあるし、賞味期限切れもある。腐ったものもあるが、腐ったものほど美味しい場合もある。

味にたとえる感覚に直結しているからかな……？

作品は好き嫌いで食べることもあるし、健康のために食べる場合もある。

美味しいかどうかの判断はその日の体調や前日になにを食べたかにもよる。

1 「おいしさと食材と料理人とレストラン、そしてフードコートとか屋台村……とか」
2009-07-21 23:58

……ってこのあたりのこと。以前詳しく書いた¹のでそちらをぜひご覧ください。

川俣さんとの大型アートイベントに関するトークを終えて、ほとんど語れなかった印象をぬぐえないでいたが、次の日の朝、横浜でアサヒ・アート・フェスティバル (AAF) の関係者と話していて、AAF がサポートしている地域系——どちらかというと小さなプロジェクト——と前日テーマになった大型のアートプロジェクトとの「違いはなんだ？」との視点を問われ——そのとき別のことを答えてしまったような気がして——、その後もモヤモヤが染み付いていた。

で、さらにアートイベントを研究しているという学生から質問がきて、それに答えようとしつつ……、いちばん大事な前提を話していないことに気づいた。

これも僕自身の超識¹だと思うが……。

そもそも地域系のイベントと地域実験はまったく性格が異なる。……というか、前提が異なってくる。

イベントは「成功すること」を前提として成立し、失敗しないことが配慮され物事が仕組まれてゆくが、実験は「失敗することで問題を見出す」ことが前提として仕組まれてゆく。……と考えている。

僕の超識では地域は（もちろん個人や組織も……）もっとさまざまな実験を含む経験を積み重ねることで豊穣化してゆくと考えているので、失敗も含む地域の経験値の増大そのものに価値があるとする……そのことが前提となっている。

地域のなかから新しい価値を見出す活動は実験も経験もなしに「簡単に発生させようとする」こと自体が暴力だと思っているし、成功するために「失敗を見ようとしなさい」視線からはなにも生み出されないのではないかと考えている。

とにかく、アートプロジェクト、アートイベント、フェスティバル、トリエンナーレ、ビエンナーレ、芸術祭など地域をベースとして繰り広げられるさまざまな出来事が並列に語られがちで、混乱してしまう部分もあるが、あきらかに「イベント系であるか、地域実験系であるかの違い」はその呼び方に主催者の意識の違いを垣間見つつも、「なにをもって成功としたか」がどの部分で語られているかを見るとその関係者の意識が明らかになる。



1 「超識ってどうだろう?」
2010-10-08 10:11

地域は多くの表出していない問題を抱えているし、地域で暮らす人はそれぞれ違う問題を多層に抱えている。その見えないモヤモヤ（潜在的問題）がイメージ化され、その解決に向かう「新しいベクトルを見出せたかどうか！」が地域実験における成功だとすれば、「来場者数の増加や経済波及効果の上昇」は地域イベントとしての成功なのかもしれない。

僕は個人的には大型のフェスティバルやアートイベントそのものが、じつは社会実験とも言える大型の地域実験として成立しているという視点で興味を持ち参加している。しかしもちろん、主催団体や実行委員会、あるいは事務局がそれを実験として認識していない場合があってもおかしくないし、小さなアートプロジェクトであってもそのケースはありえる……が、それほど問題だとは思っていない。

ただ、地域実験としての意識を持ち、地域のいかなる問題が浮上し地域のなかにこれまで出会ったことのない新しいベクトルのイメージが発生したかどうか……、それを地域の誰と関係者の誰と共有できたのか！ そして「そこで暮らす人が次に動くべき行動のベクトルと出会えたかどうか！」ということなのではないかと思っている。

そのあたりについてまったく話できなかったんだけど、この部分ってたぶん重要なんだと思う。

そんなことってたぶん常識的じゃないんだろうな……。

評価の話をしていてもそのような話題にはならないし……。

先日の川西市の廃棄物処理場でのトーク¹のときもその話をしていたし、西成でのディスカッション²でも、近江八幡でも話をした。

……去年の夏の豊島の現場でも感じていたモヤモヤ、……中間領域、……ボーダー・エリア (border area=b_a) について。

常識的にくっきりと線引きされ、意図的に、あるいは無自覚に排除されてきたのが (b_a) なのではないかと……。

たとえば、商品あるいは製品から廃棄物に移動するあいだの (b_a)、就学と就職との、国と国の、海と海岸の、作業と労働の、私有地と道路の、就業者と退職者の、友人と恋人との、境界線によって明確に分ける理由は管理上の都合によるのだろうと思う。おそらく法律とか規制とか税金とか責任とか義務とかと無関係ではない。

豊島もそうだったが、地方には「仕事がない」と多くの人が嘆く。実際にそこで十分な現金収入を得ることができる仕事の選択の幅は狭いかもしれないが、じつは膨大な量の「作業」が潜伏している。

先人が開拓してきた棚田をはじめ、田畑に手をいれる作業。

人が暮らすことがなくなった空き家や空き地の草刈りや庭いじりや掃除整備。墓守や伝統的祭事。

森林の間伐や海岸清掃、道路や共有地の清掃整備……。

清掃整備に代表されることだと思うが……、単純に乱雑で荒れ放題の人の手を離れたところに手を入れる作業は、その場の質を変えてしまう。

台所の掃除をするだけでも家族のなかでの妻との関係が少しは良くなるように、作業の積み重ねは周辺環境を変化させ、周辺の人との関係を変えてくれる。

自然成長型の(荒れ放題とも言われる)庭を好んで抱えていた僕としては何度も経験していることだが……、荒れ放題の庭は近隣に暮らす人に不安や不満を与えるが、上手に手入れされた庭を嫌がる人はいない。

1 「兵庫県と大阪府の県境、川西にあるクリーンセンター国崎でのワークショップとディスカッション」
2010-12-23 12:20

2 「大阪・西成でのワークショップとディスカッション」
2011-01-29 23:43



先日、西成の釜ヶ崎周辺を歩いたときのスナップ。窓を眺めて中の部屋の様子を想像してみると興味深い。釜ヶ崎そのものがボーダーエリア。作業したい。いじりたい



とにかく、作業は周辺との関係をよくするという意味でも自分自身の気持ちを豊かにしてくれる。

それが仕事に繋がるかどうかは別の話として、生きるうえで(生きるうえで)とても大切な行為が作業だと思う。

言葉のイメージとしては「仕事」とは「仕えている」事なのだろう(字のままじゃん)。

根が仕事人間だし、濃厚な仕事人間遺伝子を受け継いでいるので体に染み付いている言葉。自分のためではあるが、成長のためとか収入のためとか責任感であるとかと無縁ではなさそう。しかし、仕事を重ねると収入と直結しているイメージがあり、英語だとbusiness。

その収入と直結したイメージがあるために、収入のない仕事を行なうことは許されない気がする。



労働という言葉も嫌いではないし、性質として労働者の類だと思っている。英語のイメージではlaborかな。

なんとなくしんどそうだし、労働という言葉を聞いただけで労働後のおいしい一杯のイメージがこみあげてくる。

それだけにねぎらう(労)べき働きだろうから大変そうでどちらかというとやらされている仕事のイメージがあるし、重たいイメージもある。

苦を労ったり、働きを労ったりとのイメージからだと思うが、大変なぶんだけそれだけ大きな対価を得てしかるべきというイメージがある。



ことばのイメージからするとしんどさでは、作業<仕事<労働だし、対価の大きさでも、作業<仕事<労働……。しかしこれは僕の感覚で、それぞれの体験により、じつはその感覚は人それぞれまったく違うのかもしれない。

とにかく、対価や収入に関係なく、作業は自らを豊かにし、周辺との関係を変えろという事実が地域社会のなかで無視され排除されて

きたのではないかという疑問……。

地域社会にはやるべき作業で溢れているというのに……、仕事と労働の束縛で作業の機会と時間が奪われているのではないか……、とか……。

労働と仕事から得る金銭の束縛が無償の作業から拓がる自分自身の可能性を奪い取っているのではないかという疑念……。

労働には労働基準法があり、いろいろと社会的に多くのフォーマットがあり、社会的に保障がありそうな気がするが、逆に作業についての規制は緩やかながら、保障とかもなさそう……。

もちろん僕のモヤモヤは言葉の問題にあるのではない。

個人的な業を作る「作業」と「仕事・労働」の間に無限に広がるさまざまな社会への関わる態度について。

仕事や労働の常識や法律などによって見えなく隠れている膨大な作業周辺のボーダーエリアになにかが隠れているのではないかという感覚である。

全国各地のプロジェクトの現場で無償の作業に没頭し、それぞれの生活の深みや豊かさを模索する多層な年齢の人々の態度に出会うたび、金銭では買うことのできない貴重な時間の存在を確信する一方で、過酷な労働や仕事に従事し、金銭的対価を多く得ている人ほど、商品化された娯楽の時間をあたりまえのように高額で購入するものだと信じさせられていることが多いのではないかと感じたりもする。

さらに……、釜ヶ崎等が集まる高齢者が求める労働の対価として存在する見えない搾取……。

働けば働くほど奪われてゆくものがあるし、働かなければ失ってゆくものもある。

他人ごとではなく、僕自身についても……、なにを奪われてなにを得ることができているのかを見極めるのはとても難しい。



その答えはボーダー（境界）を見つめることで見えてくるような気がしている。

……いや、たんに、個人的になんでもない領域、ボーダーが好きなのもかもしれない。

もっと厳密に言えば、……なんでもない領域からなにか凄いことを作り出すのがやめられない性質なのかな……。

僕が1997年に出会った福岡の養鶏場跡。

もともと9m×60～100mぐらいの養鶏舎が10棟あり、養鶏を廃業した大家さんがその利用法を模索しているところに出会った。

制作スタジオとして必要なぶんだけ借りれるシステムを模索し、僕がそこで作業を始めると、いろいろな人の利用が連鎖し、みるみるうちに空き鶏舎は制作スタジオに変わっていった。

結局、数十名の陶芸家、木工家、大工、施工スタジオ、造形スタジオ、人形劇団、バイク工房、倉庫等いろいろな人が利用を始め、木工家が共同でギャラリーをオープンしたり、教室を行ったり……。ついには大家さんがダンス・スタジオを手作りしてその利用が活気づいたり……。気づいてみると最近の地元の地図には「芸術村」と表記されるようになっていく。正式名称はRSミサカなのだけれど……。

利用しはじめて数年が経ち、建物の利用が活発になり、空き部屋がなくなりつつあるころ、大家さんに中間領域をつくって欲しいと提案して、現在でもそのまま利用されている。

ここでの中間領域ははっきりいうと**廃材置場**。

廃材置場には基本的に廃棄処分するにはもったいないと思われるものをこの芸術村の利用者は無料で置くことができるし、芸術村の利用者ならば、だれでもここにある素材は利用していいということになっている。

鹿児島の実家の改装で出てしまったたくさんのアルミサッシ（窓と窓枠）も、廃棄処分するにはあまりにもったいなかったのが鹿児島からトラックで運んできて、そこにおいていた。結局、大家さんがダンス・スタジオをつくる時に全部使ってくれた。

僕もたまたま木材とかパネルとか、家の隙間風を埋めるのに利用したりする。

学生時代に廃材置場からいろいろなものを拾ってきて制作に利用したし、大学の近くには秘密の廃棄物置き場があり、これも秘密だが、後輩たちはそこに忍び込んで利用できそうなものを拾ってきてイメー



2003年頃の写真。懐かしい。当時はまだ夕方になると乗馬用の立派な馬が放し飼いで散歩していた。一人で作業しているときとか癒されたなー



ジづくりに役立てた。



廃材置き場には思わぬ出会いがある。

いまの地域社会のシステムではこの廃材置き場に類する中間領域がない。

去年、地元の小学校の体育館の建て替え工事にもなって体育館の床材を処分すると聞いて相当欲しかったのだが、もちろん、無視された。



*写真のグランドピアノの廃材は亡き伝説のパフォーマーの風倉匠¹が福岡でパフォーマンスに使い、その後作品としてミュージアム・シティ・福岡に設置した作品の処分されたもの。廃棄されるのがあまりにももったいなくてしばらく置いてきました。

1 ミュージアム・シティ・プロジェクト「風倉匠」
http://www.asahi-net.or.jp/~RY4h-MYMT/MCF98/JAN/ar_ks.html

先月、家の横の防風林の松の木の植え替え作業をやっていて、相当立派な松の木が何本も廃棄処分されていたが、運搬の手段と置いとくところさえあれば全部もらいたかった。



商品や製品は安全でなければならないという裏側で廃棄物は危険であるというのが常識で、廃棄物には特別な資格をもった者しか出会い使うことができない……のだと思う。そこに中間領域はいまのところ用意されていない。

廃棄物処理場は廃棄物処理法によってつくられた施設であるという縛りから——だと思うが——危険な場ということにして、一般人は立ち入ることができないが、製品と廃棄物の中間領域が社会的に位置づけられることで状況は変化するのだと思う。



この養鶏場跡のスタジオも養鶏場から廃墟のあいだのボーダーエリアにあるともいえる。確固たる常識的な領域にないし、どこまでいっても完成することなく変化し続ける「つくる現場」でもあるし。

そのように考えるとkaekkoのシステムもVinyl Plastics Connectionのシステムも、この製品と廃棄物のボーダー・エリア (b_a) から発生した活動なのかも。

昔から地域に根付いている廃品回収などのリサイクルシステムも、ある意味中間領域だが、リサイクルという単一の価値観ではなくて、もっと新しい可能性を作り出す領域として多彩に深める視点があってもいいと思う。

使わなくなった台所用品や洋服、家電、家具などを廃棄処分、あるいはリサイクルする前に、無料でやりとりできるリアルフリーマーケット（完全に無料でやりとりできる場）のようなシステムも地域には必要だと思うし、これからの大きな課題のような気がする。

たとえば、中心市街地の商業施設の巨大な廃墟ビルが東急ハンズのような品揃えで、まったく無料でやりとりできる現場ができたとしたら、そこに人はいろいろなものを持ち込み、そこからいろいろなものを持って帰る。

少なくとも人が集まる現場はできる。それをどうやって流通に結び付けるかは人と物とお金の動きをつくるマネジメント力であり、それを形にするデザイン力だったりする。

モノをつくってモノを売るという発想ではなく、クラウド的な……、地域社会全体のなかのネットワーク上で動く大きな経済流通のなかに位置づける視座が必要なのだと思う。

いや、単純に「会員制のリアルフリーのゼロバザール」のような場をつくるだけでもいいような気がするが……。

「リアルフリーのゼロバザール」いい響きだなー。使えそうですね。

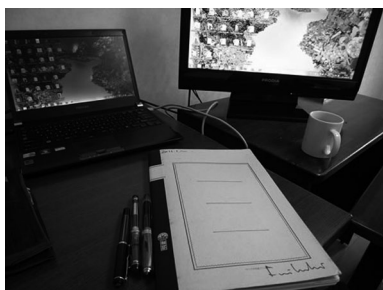
ググってみたけど、**ゼロバザール**という言葉はまだ見当たらないですね……。やったー。リアルフリーはビールとかでありそうだけど……。

そういえば、僕の周りは……。生活空間にせよ仕事仲間にせよ、中間領域ばかりだな……。



PCの画面に向き合うようになってもう20年以上……。

インターネットのサービスが始まるはるか以前に最初にパソコン通信のネットワークサービスに加入したのが1988年だったのでかれこれ23年前か……。

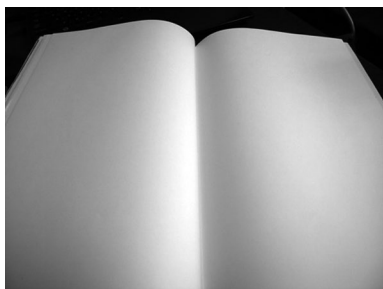


それ以前は自分の時間に向き合うツールはもっぱら書籍とノートだった。

情報を書物とか雑誌とか新聞とかから得て、ひたすら自分なりの考えをノートに記す日々。

それが情報ツールの変化とともに徐々に変化していったことになる。

このブログを使い始めたのが2004年3月。ブログ以前はウェブサイトの利用は情報の検索や閲覧とメールと掲示板、会議室への書き込みでノートと向き合う時間もまだまだあった。



しかしブログを日記代わりに使い始めて時間の隙間がブログの書き込みに費やされるようになり、白いノートのページと向き合うことが少なくなった。

とくに僕が気に入ってずっと使い続けていたココヨの定番のノートのデザインがリニューアルされ、なにか心の拠り所のようなものを失ない、B5版の無印良品のノートを使ってみたり¹、A5サイズのシステム手帳を使ってみたり、スケッチブックを使ってみたり……。紆余曲折しながら、自分と向き合うツールを模索し続けてきた。……ってことは以前書き込んだ²こともある。

1 「誕生日の自分へのプレゼントにノートを買って試してみる」
2006-09-19 19:19

2 「自分に向かい合う時間のためのツール」
2005-07-12 01:15



ツイッターを使い始めるようになり、情報の入り方、書き込み方はまた変化した。

真っ白のノートに向き合う時間は外からの情報は極力制限され、過去の自分の記述の痕跡の連鎖から思考や発想は始まる。

もしくは自分自身の内部と向き合うことから始まり、思考と指先を経由してインクの表情を通してぼくの内部は表出されるプロセスをたどる。

ちなみにそれは……、行為としてとても心地いい。時間として豊かな時間だと思っている。

一方たとえばツイッターなどのソーシャルメディアへの書き込みは、まずはじめに他者の発言が目に入り、一度、脳を経由して、それへの連鎖から発言が始まる。

あるいはモバイル端末のトップ画面を経て、アプリケーションの画面を経てキーをたたくことで言葉を探す——正確には言葉の変換を思いながら——というプロセス。

ちなみに行為としては……、僕にとっては不安定で焦燥感と同居し、疲労感と空虚感をともなう……かも。

前提としてノートに向き合う時は原則非公開でプライベートだが、ブログやソーシャルメディアへのつぶやきは公開……。

そのフォーマットの有効性と魅力を感じながらも、一方で自分の思考を強制する危機感もある。

やはり基本的にノートと万年筆に向き合う時間のなかからしか絞り出すことのできないイメージが存在するという幻想を大切にしたいし……、それでもソーシャルメディアが持つ力の魅力も探ってゆきたいとは思っている。

それにしても、ここにきて……、もしかすると相当いい付き合いになるかもしれないノートと出会った……ような気がする。

ずっと昔からあるのになぜか使ったことがなかった。

ツバメノート社³製のA4サイズの無野のノート。

なぜA4かというと、単純にちらしとか書類とかが貼り付けられる。スクラップやバインダー代わりにもなる。

しかも紙が中性紙フルスという……なに？ 10000年の耐久性!⁴



3 ツバメノート株式会社
<http://www.tsubamenote.co.jp/>

4 土橋正「コンランも認めたツバメノートの魅力」
(2006年8月10日)
<http://allabout.co.jp/gm/gc/197188/2/>

イメージプランを写真にとり画像処理して企画書にするときにいつも罫線が邪魔になっていた。

どうせ、罫線通りに文字を書いたことがないから罫線はいらない。

ツバメノート株式会社というのがなんだかとても信頼できそう。万が一いい落書きができたとしたら、美術館は喜ぶかも……。

ツバメとペリカンという組み合わせもなんだかとてもいい。

……ということで、僕がディスカッションの間とかにずっとノートをとっている姿に違和感を持った人も多いと思いますが……、じつは手を動かさないと頭が動かない性質なんです。

だから余計にこのノート……、いいかも。

とりあえず通販で10冊ぐらい買ってみようかな……。

そうそう。もうひとつ。分類されて並んでゆくのがたまらないんです。これが10年後何十冊と並んでいる姿を想像すると……たまらん。

自分として「こうありたい！」との強い意志を持たず、大きくは流れに身をゆだねているような感じで、誘われるがままに、行動していると、いろいろな物事がシンクロしてきたり、バイアスが見えてきたりする。

過去には渡辺さんと仕事をする事が多い年があったり、ナガタさんと仕事することが多かったり、近年は森さんとの仕事が多かったり……、2008年の書き込みにも森さんとのことが書かれているが……。

1 「タイトルはHappy Forest!」
2008-10-16 11:02

仕事の傾向としても、地域系プロジェクトが多かったり、美術館系が続いたり、廃墟いじりが続いたり……、大学でのレクチャーが続いたり……、その時々でなぜだか偏りが見えてきて興味深い。

で、明日からの出張。やたらと偏っている。

明日、大阪の釜ヶ崎での散歩ツアーのあと、横浜の寿町での2泊の寿合宿。

いわゆるドヤ街のなかでの連続宿泊も希少だと思うが、その後のトークがありえない。

中村政人との3日連続対談。さらに中日を除いて森司と3人で話す……。しかもこれが全部別企画。

初日は日本文化デザイン会議でのフォーラムでの一コマ。テーマはASIA²。日本文化デザイン会議はなぜだか北本で始めたため日比野さんとの関係もあり抜けられなくなってきたが、さらに3331に絡んできたのでさらに込み入ってきた。ちなみに僕と中村政人との最初の出会いが1994年に福岡市美術館で開催された「第4回アジア美術展」。

2 日本文化デザインフォーラム「JIDFフォーラム 3331 Arts Chiyoda」
<https://www.jidf.net/project/archives/others/detail.html?id=009>

このときのアジア各地から参加していた作家の活動がそれぞれ結果としてリンクしていった。

で、次がアサヒ・アート・フェスティバル絡みのAAF Café³。本来ここがコアとなって結果として連鎖した企画。中村政人の秋葉原とか富山、秋田などの活動をAAFの周辺の人に紹介したいし、なんだかいろいろ動いてきてこちらでまた話したいと考えて実現した二人の

3 アサヒ・アート・フェスティバル「AAF Café vol.9」
<http://www.asahi-artfes.net/news/2011/02/aaf-cafe-vol9.html>

トーク。

で、最後の締めが東京アートポイント計画のInsideout/Tokyoの可能性を語るセッション。地域系アートプロジェクトを東京と繋ぐ仕組みを模索するInsideout/Tokyo Projectだが、その拠点や事務局が3331にあるので、3331の代表の中村政人と東京都の森司と……、九州を活動の拠点としながら彼らと相当な時間を過ごしてきた僕が……、ある意味本音で話を深める……のかな？

それにしても……、2011年のこの時点でこれまでの地域系アートプロジェクトのアーティスト側からの仕掛けのプロセスを再認識することは、今後のベクトルを大きくつくるような気がしてならない。

……だれかちゃんと文章化できる人がいればいいのにな。この3日を繋ぐ新しい編集の視線が欲しいな……。

僕としては……。こんなことしてる場合じゃないな……。

珍しく、予告してみました。

そうそう。このようなシンクロやリンク、あるいはバイアスってなにか大きな流れのなかに身をゆだねていると結構頻繁に遭遇する出来事……じゃないのかなってこと。

敵はとても身近なところにおいて、いつもは見えていないのだが、なにかのきっかけで急に見えはじめ、怒りと悲しみがこみ上がり……、闘いがはじまる。

自分が信じていた存在がいきなり裏切り、自分に向かって脅威を剥きだしてくる。

それは自分の内臓や細胞だったり、好物の食べものだったり、自分の信じる家族の病だったり、日常利用しているメディアだったり、日常接している環境だったり……、一般的な常識だったり……。

一度はじまった闘いは問題が深いほど長引き、もとの状態には戻れないが……、その闘いを乗り越えたあと……、積極的に捉えると、自分の愚かさを反省し、自分の見えていなかったものを見極める機会になり、平穩に隠された見えていないものを読み取ろうとする能力は長けてくる。

今回のさまざまな災害も予測されていたことだが、誰も見ようとしなかったし、まさか現実になるとは思っていなかった……と思っていた。

まだ災害は終わっていないのでいまの状態で行う災害をとらえることは不可能だが、隠されてきたものがずいぶんと見えてくるのは確かである。

3.11災害が起こる数週間前、瀬戸内海の玄関口（山口側）に原子力発電所をつくる¹着工の情報がきっかけとなり、氷見でのプロジェクトで知り合いになった鎌仲ひとみさんのドキュメント映画²のDVD2本を妻がネットで購入していて、放射能汚染についての無知を認識しはじめていたところだった。

地震災害は自然災害としてとにかく収まることを願うばかりだが、原子力発電所での放射性物質漏えいの災害は明らかに電力会社と行政の責任にあり、その責任の重さを理解していない関係者の姿や声に触れるごとに怒りが込み上げてくる。

いかなる理由であろうとも生活に被害を受けている人は加害者から補償を受ける権利がある。



- 1 ストップ!上関原発!
<http://stop-kaminoseki.net/>
- 2 鎌仲ひとみ
<http://kamanaka.com/>

今回明らかに見えてきたことは、一度災害が起こると放射能は必ずある程度流出するという事実と、その放射能を受けないために避難し、生活の場を離れたり、あるいは家から出ないような生活を強いられることが起こるという事実。

そして「最悪の事態の場合」どういう状態になるのかの想定を電気事業関係者や政府は語らないという事実。

そして、まだ解明されていない脅威を数多く抱えた存在であり、数世代後には必ず問題を発生させる存在であるという事実。

僕が暮らす地域は玄海原子力発電所から25km圏の海岸にある。たとえばこの距離をどのように捉えて、ここでの危機がどのようなイメージできないようにされているのも、結局だれも本当のことなんて知らないからなのだろう。

これまでもいろいろな現場を体験してきたように……、今回もまた「わからない」「知らされない」ことの不安を実感した。

個人的対人関係でもそうだが、不都合なことは話しながらない。けっして話さないことの奥に一番重大な知るべきことが隠されている。これは資本主義経済の——経済活動を行なううえでの——常識なのかもしれないが、やはり僕らは知ろうとしなければならないし、知らないふりはできない。

違和感を無視できず、それに立ち向かおうとするのは性質なので仕方ない。

「ただちに影響を与えることはない」とされている放射能汚染と人体や地域環境汚染との関係についても、現在の段階では解明されていない——科学的根拠がない。つまりわからない状態……とされながらも癌の発生率の上昇という現象は無視できないし、現実的に放射能汚染された地域の農作物や海産物は地域ブランドとして相当なハンディを背負うことになる。

多くの苦しみが想定されているにもかかわらずそれを「関係ありません。安心です」とすることに対して不信感は募るばかり。

そして具体的な経済的被害や精神的被害に対して国や都道府県、あるいは電力会社がどのような補償を行なうのかという数字は今のところ目にしていない。

そのうち巨額の税金がまたこの補償に投入されるのだろうか……。

災害直後より、災害の状況や被災・困窮している人の状況、そして復旧に必要な情報収集と行動にすべてのエネルギーを注ぐべきところ——にもかかわらず——、自身の身の危険回避のために注目しなければならなかった「原子力発電所の事故」。

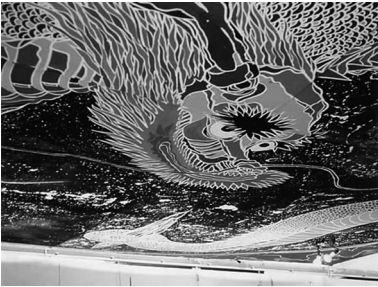
そのことにより情報伝達や救難救助、物資の輸送が遅れ、命を落とした人がどれほどいるのだろうか。そしてその命に対して東京電力の原子力発電関係者はどれほどの責任を感じているのか。

まだまだ続く天災と人災が収まり、その災害について見極めたくうえで、それぞれの間違いに向き合い、数世代も先に危険を引き継がせるようなリスクの大きい社会活動に対しては闘う姿勢を固めなくてはならないのだと覚悟する。

……そしてまた自分の無知と無能を知るのかな。

とにかくいま、現場で闘っている人、みんな頑張れ。……勝たなければならぬ勝負には勝たなければ。

記録は存在している人によってしかつくられない……というのも事実……。



けっして好きというわけではないし、どちらかというと趣味的には避けたいところもある。

あり方としても小さなアマガエルとかヤモリとかポニョポニョして、つるりんとしたもので、なんだか弱そうで、存在感のないもののほうがよっぽど好きなので、その真逆な強そうで巨大な「龍」のような存在はどちらかというと苦手。

しかし、昔からとても——なぜだか——無視できないから仕方ない。

おそらく衝撃的な出会いをしてしまい、無視できなかった最初の「龍」の存在は大学時代の妙心寺の法堂の天井にいる狩野探幽が描いた「八方睨みの龍」で、なぜだか知らなければならぬと信じ込んで、幾度となく法堂に通い、10m×10mのサイズの模写をろうけつ染めで制作するに至ったのが二十歳の頃。

その後、奄美大島の小さな集落で船大工だった祖父がその集落の丘に龍王神社の拝殿をつくったと聞いたことがあり、なんだか遺伝子のなかに龍との縁が組み込まれているのかなと思ったりしたこともある²。

1993年に鹿児島で水害に遭遇して、水は昔の地形の記憶をたどるように流れることを知り、川の流れと治水について考えを深める機会を得て、水辺でのプロジェクトに多くかかわるようになり、いろいろな地域で竜神をまつた神社や祠が目につくようになった。

1996年に広島県の灰塚エリアでダム湖ができるのにもないアートプロジェクトの構想で関わったときに、そのダム湖の形が龍の形をしていることに気づき、それをなんらかのかたちで表現しようとしたこともある。1998年に博多の小学校跡地でプロジェクトを行なうことになったとき、博多にもっとも古くからある禅寺、聖福寺の仏殿の中を見せていただいたときに、その天井にも狩野永真の雲龍図があり、それを素材として灯明で龍を描いたが……、その翌年の6月に博多でも大規模な水害が発生³し、博多駅周辺は水没し、龍の存在する地域と水害との関係を確認するようになった。

龍は現実には存在しない。それが現実には存在しないことをだれもが知っている。しかし、龍は太古の昔より生活のさまざまなところ



1 臨黄ネット「第6回 臨濟宗黄檗宗各派本山 雲龍図」
http://www.rinnou.net/exhibition/ex_06.html

2 「遺伝子の騒ぎどころ!」
2006-11-01 22:16

3 国土交通省「地下空間での浸水、都市水害の新たな恐怖」
http://www.mlit.go.jp/river/pamphlet_jirei/bousai/saigai/kiroku/suigai/suigai_3-3-7.html

に存在する。

神社の手水の水の注ぎ口に、法堂や仏殿の天井や襖絵のなかに、十二支のなかにも唯一の架空の動物として存在する。現在でもラーメンどんぶりのワンポイントとして、ファッションや刺青の強き者を象徴する図柄として、ゲームやアニメのキャラクターとしてまで広くさまざまな表情で浸透している。

人の想像のスケールをはるかに超える規模の「ありえない出来事」は必ず起こるということを知らしめるために、人の力を過信するあさはかな存在を否定するために、太古の昔より龍の存在は語り継がれてきたのかもしれない。

今回の3.11の地震で発生した津波の被害と東京電力の放射能汚染被害の拡大を知るにつれ、「あるはずがない」「想像を超えた」「想定外」と口にする人間がいかに愚かなことであるのかを思い知る。

「ありえないこと」はかならず存在する。

常識を超え、想像力を超えたことが現実に存在することを後世に思い知らせようとする知恵の象徴が「龍」というかたちで伝えられてきたのかもしれないな……と考えながら、「あまり好きではない」大きな存在を登場させようとする作業に没頭するこの1カ月……。

青森ねぶたの廃材の絡まった針金をほぐしながら⁴、やはりねぶた素材の和紙の切れ端でこよりをつくり、それで針金を繋いでゆきながら……、毎日8時間はこの作業に向かうように決めて1カ月。

久しぶりに単純作業に没頭している。

作業に没頭できる状況に感謝……。



4 「カテゴリ：青森&十和田での活動」
2005-01-11 00:25 - 2014-10-30 08:51

1 「学校の先生に向けて書いた原稿」
2008-09-01 12:44

2 「自然の家にある遊具のさびを落とし、塗装する
八十郎」
2010-07-10 18:50



もう5年ぐらい前からだろうか……。関係と存在のあり方についての思いが染み付いていて、なんだかいつもそのことについていろいろな角度から思いを巡らしている¹。

去年、瀬戸内国際芸術祭に出品した「藤島八十郎をつくる²」という作品も存在しない人を存在させることで、関係のあり方を探るような表現から発したものだだった。

で最近、僕のなかに、もうずいぶん以前に亡くなってしまった友人や後輩たちが活き続けていることを自覚するようになった。

彼らはことあるごとに僕に関係してくる。だから余計に彼らの存在は僕のなかで大きくなってゆく。この世のなかに存在していても関係がないと、もちろん存在を知らないし、知っていても、存在を意識することすらない。

今回青森ねぶたの廃材の針金の塊をほぐしながら「龍」をつくって、龍の存在に思いをめぐらす。

存在しないものは関係をつくることで存在するということ。

龍が「ありえない存在」を意図的に作り出すものとしてさまざまな関係を歴史や風習のなかでつくってきた人間の意志を思うにつけ、その裏側で、存在しているが消そうとしてきた悪意の所在を考えざるをえなくなる。

つまりなるべく関係を持たないようにし、なるべく存在感のない状態をつくらうとしている人間の意志があるということ。その存在は密室の中で物事を動かそうとし、閉鎖状況をつくることで保身を保とうとする……。

じつは太古の昔より……。そのような性質の存在が地域社会の仕組みの中枢を作り上げてきたのかもしれない……。閉鎖関係のなかで仕組まれているのかもしれない……。という疑念。

そんな仕組みに対して開示せよといったところで……。開放しオープンなシクミをつぶやいたところで……。届かないのかもしれない。

しかし、そろそろ、そんなシクミ、崩れてもいいと思うのだが……。

隠さなければならないことはそんなに大切なことなのか……。



この1カ月、このブログへの書き込みをまったくしなかった。これは2004年にブログを使い始めて以来はじめてのこと。

自分に向き合うメディアとして10代にクロッキー帳に出会い、20代の前半にココヨのノートになり……、ノートと万年筆というスタイルを続けて20年が過ぎ……、2000年ぐらいからウェブ上の掲示板を使うようになり2004年からこのエキサイトブログを利用してきた。

ノートは公開されないものだが、このブログは公開される。最初はそのシステムが新鮮でいろいろな利用法を模索することにはまってゆき、ほぼ毎日のように書き込むことが義務のようにになっていた時期もある。

メディアに振り回されないように3年前ぐらいから再びノートとこのブログの使い分けを模索するようになり、もっと手を動かすノートに向き合うようにしつつ、意識的にウェブメディアはルーズに使うように心がけ、自分の動き方に合わせて最低限にレポートするように心がけてきた。

そこに襲い掛かってきたのがフェイスブックとツイッター。

最初はそのシクミを理解するために興味本位で利用し始めたが、多くの人がそうであるように3.11以降ツイッターに侵され、自分に向き合い、自分を記述する時間がまったく失なわれ、ひたすら情報を収集した。

そもそも、自転車操業の自営業者には休みという時間がないので、だいたい自分に向き合う「自分の時間」というのは朝食前や昼食後のわずかのあいだだったり、移動時間だったり、就寝前の時間だったり、仕事の隙間のわずかな時間しかない。

そこをツイッターに侵され、つぶやく以上に情報をあさり始めた時期があった。それが落ち着いて数カ月……、おそらく同じような理由だと思うがツイッター利用者がフェイスブックに移動し始めた。

毎日のように届く友達リクエストは結果的にフェイスブックの利用を加速することになり、フェイスブックの複雑な構造を徐々に理解

するにつけ、ブログに書き込む時間と必然性をまったく奪ってしまうことになりつつある。

どうなるのかな、このブログ……と思いながら、夏休みの宿題がまだ終わっていない小学生のような状態で夏以降の僕自身の動きはここにはなにもない。

……ということで、ここにもぼちぼち報告しますが、いまはフェイスブックにいろいろアップしていますのでそちらもよろしくお願ひします。

<http://www.facebook.com>のページで藤浩志で検索してください。

ワークショップや展覧会、あるいはプロジェクトで「プロセス優先か、それとも結果優先か」のような言葉を耳にすることが増えてきたように思う。

もちろん結果も大切だが、そこに至るプロセスが重要視されるようになってきた……ということ。

今回蒲生で行なったワークショップも結果を想定せず、プロセスを作り出すワークショップ。

僕の仕事——いわゆるアートプロジェクトの現場でも最終的なイメージ——つまり、結果を予想できないものとして、その広がりや可能性を担保しながらそのプロセス、あるいは初動のベクトルを提案することに力を入れた提案が——けっして一般的とは言えないものの——それなりに受け入れられてくる素地が見え始めている。

そのほうがいろいろな活動の連鎖が生まれ、関係者の予想を裏切るほど面白い結果が発生する可能性が高いのでは……という経験から導き出された手法のような気もする。

ところが、このプロセス……つまり過程と結果という対立項目の設定自体に罫があることに気づいてきた。

過程と結果というと時間軸の問題に捉えられやすい。ところが視点を変えると……、プロセス重視のプログラムは主体それぞれの自己の内発を促すことが問題視されているのに対して、結果重視・最終形態重視のプログラムは他者の視点を考慮した社会的な効果や訴求力が問題視されている……のではないかな。

つまり時間軸の問題ではなく、自己へのアプローチか他者へのアプローチかの問題……かなと。

そこに先の時間軸が絡んで来るとというのが自然……なのかなと。

つまり……、時間軸でその向き合う視点に変化してゆくという感覚がプロセス→結果の間にはあるという感覚、けっこう重要なんじゃないかと思うんだけど……。そんなことって皆さんの常識なのかな？



1 「藤島八十郎をつくる……というのはだめ?……」
2010-04-22 23:31



問題はその結果のイメージが内発を引きだすイメージとしてオープンにゆるやかに設定されていたらいいのかもしれないけれども、外発——つまり外から発せられたモチベーションとして束縛や重石になって参加者——あるいは当事者の主体的モチベーションの発生を抑圧するようなケースもあることを気づかってほしい。

地域系のアートプロジェクトが結果重視に向かうのもわかるが、それがゆえに外部からのモチベーションをてんこ盛りにすることで地域の主体、あるいは参加者の内発的モチベーションを阻害するプログラムのあり方はいかがなものかな……。

すべてはバランスの問題……ということだ。

*写真は鹿児島県蒲生町で成長してきた日本一大楠どんと秋まつりのワンシーン。25年前に蒲生に太鼓の集団、蒲生太鼓坊主²が発生し、紆余曲折あり韓国との交流が始まり、さらに紆余曲折あり毎年高校生の音楽を通じた交流事業が定着し、韓国の伝統芸能を学ぶエリート高校生が蒲生町に来て地域の祭りとしていろいろな活動が連鎖していて素晴らしい。そのプロセスがいいがゆえに舞台のクオリティが感動するほど高くてびっくり。結果が素晴らしい理由にその過程の素晴らしさがある。しかもそれを地域住民はちゃんと知っていて皆が誇りを持っているがゆえに、新しい地域の祭りは盛り上がっていた。



2 蒲生郷太鼓坊主
<http://www.tekobouzu.com/>

多くの人がそうであるように、この数カ月ずっとモヤモヤし続けている。

とくにいろいろ抱えてモヤモヤしている人との対話を重ねているとさらにモヤモヤは累積する。



この累積をどうにかできないかと考えてきたが……、一番のモヤモヤの原因はこのモヤモヤをアートでどうにかしようという、どうにも違和感ある方向性。

確かにモヤモヤは活動の種だと思っているし、そこからなにか凄い表現が生まれてくる期待感が大きい……。しかし、放射能被害に対してアートも糞もないだろうと内心つぶやき続けてきた。

はっきりいって被害を被ったと自覚した段階で「闘い」だろうと。

いや、事故が発生した段階から闘いは始まっている。しかし……、モヤモヤの問題は被害を被ったという意識が拡散されていることにもある。



意識のどこかで損害賠償請求したいと思っている人は多いが、問題は対象——請求すべき相手——にあるのだなと気づいた。

ちなみに一番精神的負担を抱え損害賠償請求をしなければならないのは当の電力会社の社員や従業員を含め原子力発電所の事故現場に近い人に違いない。そして、一番の受益者はその現場からシステムの上でも遠くに身を置いていながら多くの利益を手に入れている人……。

累積すると精神的被害も含め当事者たちは相当な額の請求ができるだろうが、そのぶん給料をもらっているので相殺される金額も多い。問題はその差額がどうなのか……だと思う。

損害賠償請求貯蓄 プロジェクト

とりあえず損害賠償請求額を計上するアプリケーションをプログラムするプロジェクトを提案したい。

避難にかかった移動費、経費、その後の日常の飲食費、水代・食費、医療費、通院費、通常仕事をしていたら当然入るだろう収入、現実の放射能汚染被害による物損。除去作業の金額や危険作業費、そし

て精神的負担の慰謝料等々……。

それは過去に遡るだけではなく、今後将来にわたりずっと加算されて計算されるべきものなのだろう。

それをだれもが簡単にタッチパネルで入力できるアプリをつくるのはどうだろう。

そしてそれぞれアップロードするとネットワーク上で累積計算され、地域別とかで現在の、あるいは数年後の請求されるべき損害賠償額が見えるシステムの構築が必要だと思う。

それを貯金感覚で累積し、将来必ずもらえる貯金として蓄積してゆき、累積金額が一目瞭然に見えるアプリケーション。もしかするとそれは世代を超えて貯蓄し続けることになるのかも。

問題はそれをどこに請求するのか……だと思う。

それをとりあえず、「放射能汚染を引き起こしてしまった**精神**」に対して請求するのはどうだろうかと考えてみた。

僕のなかにも無自覚に……、原子力発電所周辺の住民はとくに、それを認めていた精神がある。そして多少の利益を受けてきた。

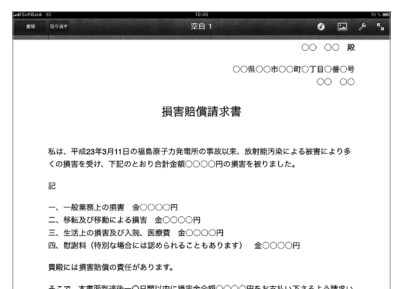
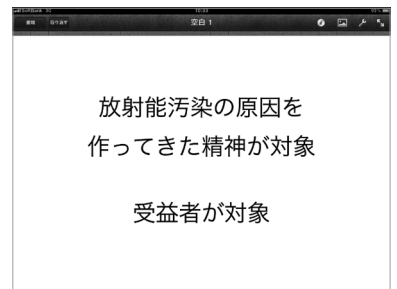
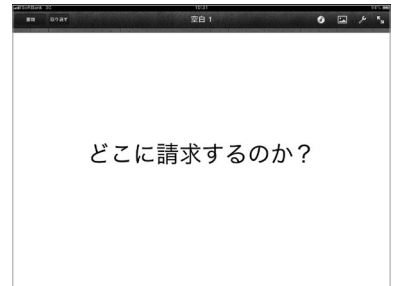
損害賠償請求額の累積からその精神の量に応じて相殺される部分もあってしかるべきだと思う。

原子力発電所建設に反対運動を続けてきた人ならともかく、ずっと無口に無関心を装い無視することで放射能汚染を結果的に認めてしまった**精神**も含めて損害賠償請求を受ける必要がある。

あるいはそれを認め推進してきた知事や市長や議員、あるいは政党を当選させてきた責任もマイナス部分として累積すべきだと思う。

その算出もまたアプリケーションでしっかりフォローする必要がある。

問題はその差額が将来的にいくらになるのか……だと思う。





項目	金額
(8) 後遺症慰謝料	14,000,000 円
(9) 将来介護費	0 円
(10) 損害額合計	100,579,702 円
(11) 過失割合	25 %
(12) 既払額	200,000 円
(13) 請求損害額	75,234,776 円

いつでも金額入りの損害倍所請求書のフォーマットを多くの被害者が持つことのできるとも便利なアプリケーションをつくるプロジェクトはどうだろう？

法律家や専門家の知恵を借りて東京電力が配布している書類や、これまでの損害賠償額の事例や過去のあらゆる慰謝料請求の事例に基づいた現実に応じたアプリケーションの開発はこのモヤモヤを少しは解消してくれるんじゃないかな。

とくに現場で放射能汚染にどのような態度をとっていいかわからずモヤモヤしている人はとにかく一度計算してみて、将来登場して来る「受益者」に請求する用意をするのがいいんじゃないかな。

損害ではなく将来絶対とりもどす「貯蓄」として。

……などと、最近いろいろな人に話をしながら意見を聞いています。

とはいえ……、問題は放射能汚染を除去することなのでしょうが……、数世代抱えなければいけないんですよね。地球全体で……。

……てなことをいわき湯本でもお話ししてしまいました。

こんなのいかがでしょうか？

3.11をどのように過ごしたのか……という自分自身の行動や思い、ありようを客観視することで、なんだかその人の本質的な部分が理解できたり、そのひとの置かれている状況がわかるような気がする。

僕自身は東京のアーツ千代田3331で行なわれてる震災復興関係の展示の仕込みに悩みつつ、案の定モヤモヤしつつ、モヤモヤはなんだか次の「イメージの種になる！」などと言い訳をつけながら、「モヤモヤ会議」なるものを行なって、モヤモヤしていた。

モヤモヤは現状に対する違和感やズレからくる「言葉にならないなんとも居心地悪い中途半端な状態」だけれども、そのモヤモヤを形にしようと「右往左往しつつ作業に没頭すること」はかなり面白い状態を獲得できる。

だからといって、そのモヤモヤに直接答えが出るわけではないのだけれど、確実にもやもやの状態はスリップする。そしてスリップの向こう側で別の課題や作業が発生し、モヤモヤがいつのまにか別のイメージに繋がる。

とにかく、モヤモヤを無視することなく、モヤモヤをいじろうとすることが大切だと思っているし、その向こう側に次のイメージが発生し……、それは必ずしもモヤモヤへの直接の答えではないけれど次のイメージへの連鎖の種になる……という法則。

そもそもモヤモヤはもやもやであって、具体的な問題とか課題ではないので、それでいいんじゃないかなってこと。しかし具体的な問題とか課題がある場合は別でしょうね。

でもでも……、具体的な問題や課題だと思っているその命題そのものや仮定や前提条件が間違っているかもしれないことを思うと……、モヤモヤだよな。

ああ、モヤモヤ。

でもモヤモヤは可能性の始まりだと……、そう思う！



とにかく慣れないことはするべきだ。



そもそも慣れないことだらけのなかで人生は始まっていたし、慣れない状態から自分になじんでくるときの振る舞いの奥底に自分自身の大切な部分が垣間見られるような気がしてビビッドだ。

しかしどうしても時間が経つと慣れてしまうし、慣れてしまうということはなんだか「わかったような気になってしまう」のでそれが気に入らない。

本当はなにも知らないしわかっていないのに、わかってしまうような気がする……。それが一番危険な気がする。

自分自身は自分自身の思い込み（わかっているつもり）によって規制され、束縛されているのだと思う。

以前の僕の周りには時折「わかっている」人たちがいた。「わかっている人」はそれ以上をわかろうとしないし、自分の考えを変えようとしていないので、一緒に話していてもあまり興味を持てなかった。

しかし、わからない人と話をしていると……、いや違う……、わかろうとしている人と話をすると、とにかくいい時間が過ごせる。

しかし、人生せめて死ぬ前ぐらいにはなんだかすべてをわかった気になって死んでみたいと思っている。



そこまでどのような「わからない旅」を連鎖させるのか……に興味がある。

いい時間を過ごすために人生があるのだから、もっと「わかろうとする人」と過ごす時間……に価値がある。

逆転すると……、自分自身が「わかろうとする人」にならなければいい時間は発生しない……のかもしれない。

この1カ月、久しぶりにわからないことだらけ。

あれだけわかっていたつもりの「アート」もたぶんいま一番わから

なくなっているのだと思う。

ちょっと以前の僕であれば「いや、アートはわかるべきものではなく、感じるべきものだったり味わうべきものだったりだから……」と説明していたかもしれない。

しかし、いまはわからなくなっている状態がとてもこちいいかも。

一度「美術館」についてここで語りたいですね。……っていうか、動画にしようかな。しかし、さもわかったように話す自分が嫌だな。

アサヒ・アート・フェスティバル (AAF) がかれこれ10年になるねと話をしはじめたのがもう2年近く前。

そこからなんだかたんなる10周年の記録本とかつくっても面白くないよなあと思い、つついメーリングリストに投げかけた文章から10年本をつくるプロセスがAAF学校というかたちになってはじまってしまった¹。それが去年。

1 「AAFSchool AAF10年の記録を出版するために」
2011-12-04 22:23



いろいろ書籍とウェブの役割について日ごろから考えていることを編集者の影山君とかと話しているうちに同じことを考えている人が数多くいることに気付き、気が付いたら入江さんとかも参加してもらってAAFの10年をいろいろな角度から記録してゆくことが結構重要なのかなという話に拡がってきて、ウェブでのアーカイブのプロジェクトまで進みそう……。

なんだかんだと紆余曲折あり、AAF学校の参加者が全国各地のAAFの現場を訪れ独自のかたちで取材した文章もそろい、そろそろ原稿を書かなければならないというところまできた。

みんなの取材した文章はそれぞれ興味深く重要で、心に響くものばかり。それを横目で見ながら僕は僕でこれまで考えてきたことをまとめて文章化したほがよいということになってきた。

ちょうど……、メルボルンの現場に滞在中で夜の時間はいまのところこうやって原稿に向き合うことができるのでちょうどいいと思っていたのだが、ワードの作文のなかにいると一人ぐるぐる考え込んでしまっただうも文章が暗くこもりがち。

で、いろいろな地域系アートプロジェクトに関係するような文章を再考するために、ここのところめっきり使うことなくなったこのブログサイトを使って整理してみることにした。

いろいろ意見もらいながら書くのもいいのかなと。

ということで、再考シリーズ、これから夜な夜な、レジデンスの部屋で書いてみます。

イイ家族とか、イイ作品とか、いい地域というときのイイという価値について、基本的に子どものころから周辺とぶつかってきた。ぶつかるがゆえに考えざるをえないことも多かった。

僕は即答できるタイプではないので、多くの場合その場では答えられずに、黙ってしまい、そのぶんじわっと抱え込み、かなり時間がたって自分でも忘れたころ、ふと自分なりの考えを思いついてしまう。そのときには周辺の話題や関心はほかに移っていて、だれも聞いてくれないこともしばしば。

イイという価値判断はだれが作りどこから流れてきて、どのように定着しているのだろうか？

イイという価値が大量にメディアや街に溢れ、あるいは先輩や先生から押し付けられ、とにかく濁流に流されているような気がしてならなかった。自分としての価値を考える前に多くの価値が与えられ、そのなかで上手に泳ぎわたることができなかったのだと思う。

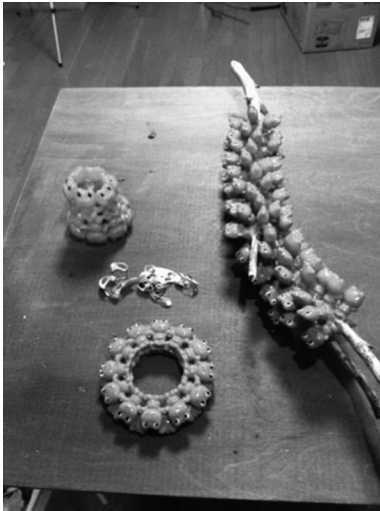
イイという価値観は絶対的なものだという話もあったかもしれないけど、そんな幻想はもう通用しない。誰かにとってイイものが他の誰かにとってはダメなものはいっぱいある。ある人にとってのイイ関係でもほかの人には迷惑な場合もある。

イイという価値観は相対的なものであり状況によって変化する。それを確信してから楽になった。そして……、イイという価値は「誰と」語り合うのかによって一番変化するというあたりまえの事実気付いてから目の前は明るくなった。

駅前に何十年も立ち続けている裸の姿の女性像を具象彫刻を目指している作家と見ると、その表現力の凄さに視線が行き、凄い作品だなと思ってしまうけれども、女性の権利の問題を行なっている人と見ると、女性を裸で立たせていることそのものが問題だと思ってしまう。思春期の子どもとそこを通るときはなるべく見ないようにして無視してしまう。

上質の水が湧き出る自然の泉の横でペットボトルに入った市販の水はほとんど価値がないと思われがちだが、その水の研究開発者というと、自然に湧き出る水よりペットボトルのなかの水のほうが美味





しく感じることもあってある。砂漠の中でペットボトルのなかに入った水はどう考えても貴重品で価値が高いが、横にペットボトル不買運動の厳しい人が登場するとペットボトルに入っていることそのものが悪いのでなんだか水の価値もなくなってしまふ。

いつも通っている見慣れた駅前から次の通りまでの50メートルの通勤路を足の悪い両親と歩く。少しの段差が気になり交通量が気になり、信号の変わる速さにいらだつ。生まれたての赤ちゃんを抱えた妻と歩く。排気ガスと大気汚染が気になり街の騒音と下品な看板を迷惑だと思ふ。社会学・歴史学の専門家と歩く。まちに染み付いている時間の皺がやたらと目につき石碑や表示物や地名を興味深く思ふ。

イイという価値は誰かとの関係のなかで変化する。ということはなにか行動を行なうときに一番重要なのは、誰と行なうかということだということがわかる。

あらゆることをネガティブに捉え、つまらないつまらないとつぶやく人といると、なにもつくりたくなくなってしまうし、面白い面白いとつぶやく人といると、なんだかなんでもつくれそうな気がしてくる。

地域づくりにおいても「誰と」つくるかの関係が変化しつつあるのだと思ふ。なにをつくるかではなく、その前提として、「誰と」つくるのか。そのことが一番重要なのだと思ふ。

イイという価値はそれぞれの層によってまったく違う。圧倒的にイイとされる大きな価値観を持ち込むのではなく、さまざまな層との小さなイイ関係を複層的に綿密に重ねてゆくイメージなのかもしれない。

ミルフィーユ的にじわっと積層された強度。そんな感じかな。

でもイイは時代によってかならず変化し続ける。

*写真と本文はなんの関係もありません。

1 「いいもの、いいところ、いいまち……の条件。あたりまえのことですが……」
2009-07-06 23:03

2 「学校の先生に向けて書いた原稿」
2008-09-01 12:44

これまでにブログに書いた関連記事もリンクしときます。

いいもの、いいところ、いいまち……の条件。あたりまえのことですが……¹

学校の先生に向けて書いた原稿「と」の関係性²

数年前、とある地域でのシンポジウム会場で「土の人」と「風の人」の話題になり、違和感を持ちながら聞いたことがある。いろいろな地域で活動を行なおうとすると、外から来る人に対して「どうせすぐいなくなるのだからなにも期待していない」と拒絶する態度と出会うこともある。その会場では地元の人を「土の人」と呼び、外から来たアーティストを「風の人」と呼んでいたのだけれど……。確かにそういう面もあるが、そう単純なものでもないと思う……。

土・風・光・水・4種類の性質

人にはいろいろな性質(たち)がある。なにか面白い種を見つけると、自分で所有して育てたがる性質。なにかに使えるんじゃないかと思いきまざまなところに運びなにかに役立てようとする性質。その素晴らしさを広く多くの人に伝えたがる性質。自分の楽しみとしてその存在そのものを面白がる性質。人はそれぞれ複雑にいろいろな性格を持っているので、単純に分類はできない。しかし、それぞれ接し方に性質の違いがあり、自分自身がどういう性質なのかについてはその複合度合も含めて自覚してもいいような気がしている。



それを仮に種が発芽し成長するために必要な四つの要素に例えてみる。

- 土の性質：自分のフィールドで育てたがる
- 風の性質：いろいろなところに運びたがる
- 光の性質：いろいろな人に紹介したがる
- 水の性質：とにかく興味関心を注ぎ面白がる

地元で地域のことを憂い考え、なにかしなければならぬと考えている人の多くは土の性質が色濃くあると思う。しかし地域の歴史も含めたさまざまな地域遺産に光をあて、地道に研究、発表している光の性質の人も地域には数多くいる。

地域の内側からは見えにくいかもしれないけれど、地域の特性や面白いものをちゃんとほかの地域で語り広げようと外で活動している風の存在も忘れてはならない。そしてもっとも注目したいのはいろいろな興味深い活動に必ず登場し楽しんでくれる水の存在だと考えている。

土の豊穡化



いわきの田中さんちの田んぼ

土の性質の人は土地に根差している人が多いものの、意外と外からやってきたり、あるいは一度外に出て帰ってきた人も多い。その土壌の質について客観的に捉える視点を持っていて、愛着を感じつつ、そこで活動を育てようとする。

問題はその地域の土の質なのかなと思う。肥沃で豊饒な土地であれば問題はないが、荒れ果てていたり、傷だらけだったり、病んでいたり、枯れていたり、薬漬けにされていたりする場合もある。「文化なんて無縁の不毛の地だ！」と自嘲する声も聞こえるが、じつは地域の豊穡化（ほうじょうか）は小さなきっかけから動き出す。

地域でなんらかの表現行為を行なうことは、苗を植える行為に近いんじゃないかと考えてきた。

仮に開花しなくても、実が収穫できなくても、その苗は枯れて土に戻り、養分になり、つぎの苗の開花に繋がる。そのように考えると無駄な表現行為は一切ないんだと思えてくる。どんな些細なつまらない表現行為でもなんらかの養分として、その土地の経験として蓄積されるのだと考えれば、なんだったってやってみたほうがいい。

まったく閉じた環境にある場合でも、土が熱を発することで上昇気流が起こる。突然、なんらかの要因でその地域に光があてられはじまる場合もある。あるいはその地域で何か事件が起こり、ヒートアップする場合もある。もしくは地域で誰かが動きだし、なにかが始まり発酵し、それが地域の熱になることもある。

とにかく土が熱を運びはじめると上昇気流が生じ、風が吹く。その風に乗るさまざまな人、モノ、情報等が流れ込んでくる。たまには新しい種を運んでくる。あるいは風は雨雲を運び、地域に水を注ぐ。適正な水と適正な光があり、土に十分な養分がある場合、種は発芽し、成長し、開花し、実る。もちろん開花しなくてもその繰り返しのちに地域は豊穡化に向かい、いずれ花は咲く。

そもそも種は地域に多種多様に眠っていると考えるほうが自然なのかもしれない。なんらかの要因で、土の中に深く眠っていたり、光の当たらないところでじっと発芽を待っている。それが外的要因で、

外からの種のために耕され、光があたることで地域の環境が変わり、眠っていた種が地域のなかからさまざまに発芽する。

水の存在の特性と重要性

この豊穡化のプロセスにおいて、あるいは種の発芽・成長においても、水の存在がとても重要であることは分かっているものの、地域における水の存在についてあまり語られてこなかった。

土の存在はすべてを育てるベースとなるので地域の主体として語られる。また風の存在は珍しいモノ、情報、人、意識を運んでくるので話題になりやすい。光の存在はまさに活動そのものに光をあてるメディアであり、助言や批評であり、影響が見えやすい。土、風、光の存在は仕事に直結している場合も多くそれぞれの立場に束縛されてしまうこともある。



しかし、水の存在は仕事上の立場に束縛されることなく興味・関心の範囲で自由に動くことを志向しているので、いいものはいいい、ダメものはダメと利害関係を超えて明確に発言してくれる。その意味ではとても信頼できる存在なのだが。興味を失なうとなんのためらいもなく他のところへ流れてゆくので、名前が残ることが少ない。

そもそも水のあり方もさまざまに土壌の発酵のための湿気であったり、発芽のための水分であったり、朝露であったり、あるいは蒸発して大気に溜まる雨雲であったり、注がれる雨であったり、流れる川であったり、つねに状態を変えて変化し続ける触媒の存在ということも興味深い。

水の在り方が地域の風土をつくる

地域の風土を知るには地域の水のあり方を認識しておくことが大切だと思う。砂漠にも熱帯雨林にも低湿地帯にも文化は育つ。そのあり方の違いは水のあり方、人と水との関係のあり方の違いなのではないかと考えるようになった。

水の流れは濁流になれば多くの文化を破壊する恐怖にもなる。あるいは一見清らかな清流には養分はなく生物は存在せず、淀みのなかに多くの生物が生息する場合もある。ささやかな流れは和みにもな



り、安らぎにもなる。水は感性に直結している存在のような気がする。生きるうえで水は必要不可欠のように、地域活動にも水の存在は不可欠だということがあまり語られてこなかったように思う。

とにかく興味や関心を注ぐ水の存在がなければ、どのような活動も発生することもなければ育つこともないのかもしれない。

なにか些細な活動を思いついた人がいたとして、その人の横で「面白いね」とささやく無名の誰かがいたからあらゆることは動き始めたのだと確信している。

過去の関連ブログとか……

1 「水……か。風土……土と風をつなぐものだな」
2010-10-29 10:58

水……か。風土……土と風をつなぐものだな¹
Miracle Waterについて²

2 藤浩志「Miracle Waterについて」
(2011年10月1日)
<http://mwlab.exblog.jp/16049842/>

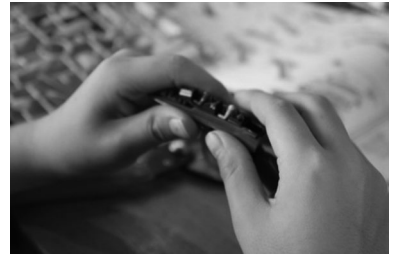
東京事典でのインタビュー「水の溜まりと水栽培」³

3 藤浩志「水の溜まりと水栽培」
<http://tokyojiten.net/presentation/679>

つくる時間を楽しむ。つくっている時間が楽しい。つくっていると、なにかの作業に没頭している時間がとてもいい。あたりまえの話だが、完成してしまうとその楽しい時間はその余韻を残して終わってしまう。

つくる時間はなにかを期待する時間だと思う。少なくともなにかができるという希望に向かっている時間である。

希望が持てない時間にいるとすれば、とりあえず、なんでもいから作業に没頭してみるのがいいと思う。そこには不思議な時間が発生する。



子どものころ、喘息が苦しくなるとプラモデルをつくって苦しみから逃れる技術を学んだ。

とにかく、プラモデルをつくる時間が好きだった。箱に描かれたイメージを目指してバラバラの部品を組み立て始める。いったん組み立て始めると夢中でつくっていた。

しかし出来上がってみるとイメージしていたものとはなんだか違う。こんなもんかな？と箱に描かれた絵と見比べてみるが、なんだか違う。

プラモデル屋の店先に飾られたリアルな模型の数々に刺激を受けて、それなりに塗装し、汚し塗装も覚えて頑張った時期もある。そのときが一番楽しかったかもしれない。



特別な材料や技術を手に入れ、なんでもつくれるような錯覚を楽しんでいた。しかし、そのうち限りなく上の世界の技術と出会い、自分の限界を知りいつのまにか遠のいてしまった。

プラモデルをつくりはじめた小学1年のころ、父親がまだ難しいだろうと横から手を出してつくってしまったことがある。このときほどのショックはなかった。

完成したプラモデルをもらってもなんの楽しみもない。楽しみのすべてをもぎ取られた感覚はいまでも残っている。

住宅や家財道具、家庭生活全般にしても同じかもしれない。



本来生活のすべてを自分でつくることほど贅沢な時間はないとわかっているのに、すべての技術を身に着けているわけではないので、専門家に頼んだほうが良質のものが揃うことを知ってしまった。

しかもつくる時間なんてどこにもない。せいぜい仕事をして稼いだ給料で格安のモノをそろえて生活らしさをつくることで納得しようとする。あらゆる情報を追っかけるだけで日々の時間は過ぎてゆく。



父親や母親が子どものためにとせっせと家庭らしさを購入して揃えていった時期もあったと思う。

揃えてゆく側は楽しいに違いないが、ただ押し付けられた子どもたちはどうなのだろう。なにが楽しいのかなにがありがたいのかさえわからなくなってしまっているのだと思う。一緒に生活をつくる時間をはたしてどれだけ楽しんでいるのだろうか。



まちについても同じことがいえるのかもしれない。

つくるプロセスにおいて、さまざまなコミュニケーションが発生する。それがとても貴重だということは理解していたはずだ。

プラモデルをつくる写真と20年以上前に購入した中古のシンクに組み込んだカウンターテーブルの上の使用歴10年以上と5年以上のなじんだ醤油さし、そして全国初(?)制作中の総ぬいぐるみ断熱の壁

素材や道具と向き合う深いコミュニケーション。自分の感覚や常識とその場とのコミュニケーション。そして一緒につくる人とのさまざまな質のコミュニケーション。

つくる時間をもぎ取られているとすれば、それはコミュニケーションそのものをもぎ取られていることになる。

全国各地でさまざまなかたちで発生しているアートプロジェクトを、地域のなかに「つくる」プロセスを発生させる新しいシステムとして注目してみてもはどうだろうか。

けっして完成することのない地域活動にふさわしく、さまざまなつくる時間を発生させるシステムとしてアートプロジェクトはある。

そこには多層でさまざまな質のコミュニケーションが生まれ、予期しなかった関係が発生する。そしてそこからさまざまな活動の連鎖が生まれてゆく……のではないかなあ。

表現することって自分自身の日常の行為を超えることなんじゃないかなと考えている。

どちらかという流されてしまっている日常の違和感をはたと立ち止まり疑問視して、客観視し、それをなんらかの形として表に現わす。

それはどんな手法でもいいと思うが、それぞれに得意とする、あるいはフェチとする手法があるのだと思う。言葉を使うだとか、楽器を使うだとか、行動で表わすだとか、描いてみるとか……。しかし、その手法すらも、自分自身で決めてしまい固定されてしまっていたり、不自由になっていたりして、経験を重ねればそれだけなお、自分自身を超えるハードルが高くなる。



まったく絵を描いたことのない人が絵筆を持ち、自分の感情を画面にぶつける経験ができたとしたら、その人にとってそれは大きな表現だと思うが、描き始めた絵を毎日のように描き重ねるうちにそれが日常化してしまう。その状態に違和感を抱き、そこに向き合い、自分の感情を超えることができかどうか。それが次の表現となる。

その意味では表現はつねに相対的な行動のなかにあり、連鎖を促す特質のものだと思う。最初から強度のある表現はできないが、表現を重ねることでもんでもないところまで行く場合もある。

それはおいといて、いま、ここでは注目すべきことは表現することで周りとの関係が変わるということだと思う。関係が変わるということは存在の仕方……。あり方そのものが変わるということ……。

日常、料理をしたことのない人が料理という手段を使って表現をはじめるとする。いままで興味もなかった食材、あるいは調理器具、台所との関係が変わってくる。これまでは縁のなかったスーパーの野菜売り場や市場やあるいは畑までもが関係のある重要な場として輝き始める。



しかしそのうち料理は日常の行為になる。最初は自分の食事しかつくらなかった人が周りの人のぶんまでつくるようになるとすれば、それはまた表現だと思う。同居人や家族はありがたいか迷惑がるかわからないが、年齢や嗜好や健康を考え食材や調味料を選ぶようになり、一緒に食べるという時間をつくることになる。さらに表現

が深まり、10人分づくりはじめたとしたら、ホームパーティを開催することになったり、料理のデリバリーをしはじめたり……。関係はさらにとんでもない方向へと広がってゆく。

日常の行為をふと客観視し、日常を超えることで表現は始まり、それは次の表現への連鎖へと導く。

いつもの通勤路をほんの少し早起きして少しだけ遠回りして歩いてみる。それが日常化したら、今度はもっと拡大してみる。降りる駅を変えてみる。あるいは自転車で通ってみる。地図をつくりはじめる。写真をとってサイトにアップしてみる……。些細なことから表現は始まり、それは日常の関係に変化をもたらす。そして、どこまでも連鎖を促す特質を持っている。

地域のなかでさまざまな表現を展開するのはどうだろう。

表現することはなにも絵を描いたり音楽を奏でたりすることだけではない。

地域のなかであたりまえになってしまっている日常をふと見つめ直し、違和感に向き合い、日常を超える表現を試みることで地域のなかのさまざまな関係が変わり、表現の連鎖が始まる。

地域の日常にはさまざまな地域素材があり、活着ているものもあれば、眠っているもの、まだ誰もその価値に気付いていないもの、発芽する前の状態のものさまざまにある。

地域素材にはいろいろな種類のものがある。製品と呼ばれる生産物素材。生産物に付随するさまざまな技術素材、あるいはそこから排出される廃棄物素材。もしくは歴史的遺跡や近代遺産、あるいは空き店舗、空き家、廃墟、個人的な思い出のあるさまざまな建造物素材。公園や河川、海岸、山林、鎮守の森、空地などの空間素材。歴史や伝説、言い伝え、風習も含む物語素材。そしてさまざまな人材等々……。

それらが表現しはじめたらどうなるだろう。これまで関係のなかったものがさまざまに繋がり始め、些細な活動は活動へと連鎖を始める。

(それらのものと自分自身との関係が深まるということは、自分自身の在り方、存在の仕方そのものが変わってくるということをも意味する)

さまざまな実験的な表現を展開できるかなり自由度の高い仕組みとしてアートプロジェクトというフォーマットはあると考えている。

……と書いてみたが、その一方で、表現なんかしなくていいんじゃないか、そのままでいいんじゃないかという意見も聞こえてくる。……まさにそのとおり。表現なんかしなくてもいい。しかしせざるをえない性質の場合、仕方ないんだと思う。それと、関係を変えたいと思っている場合とか……、このままではいけないと思っている場合とか……。

まあ、仕方ないんだろうね。

関連するブログ

日常的な行為と表現行為との違い¹

1 「日常的な行為と表現行為との違い」
2010-08-14 23:02

「自分の内側からイメージが湧き出てくる……」。

美術大学で美術を勉強していたころ、イメージというのはアーティストの内側から湧き出てくるものだばかり思っていたし、そのように教えられているような気がしていた（誰に教えられたのかさっぱりわからないが……）。

確かに周りには自分の内側からイメージが湧き出てくる人もたくさんいて羨ましかった。



しかし、僕の場合、どうも自分の内側を覗き込んでみてもなにかを吐き出そうとしても、たいしたものはなく、自分のなかにはなにもないということを思い知った。

自分のなかから出てくるイメージはせいぜいアニメや漫画で植えつけられたイメージと、どこかで見たことのある教科書やメディアからの知識と、あまり思い出したくないような数々の体験の記憶と……。

とにかく自分の内側から湧き出てくるイメージなんてろくなものではないとあきらめたときから、意外な形でイメージが湧き出てくることに気付いた。

人との対話のなかからイメージは湧き出てくる。場所との、素材との、さまざまな対話のなかからイメージは湧き出てくる。

作家は自分のなかからイメージを作り出すものだという教訓のようなものを無視して、むしろ作家なんかにならなくてもいいと思ったころから、興味深く実現したいと思えるイメージが後輩や友人との会話のなかから湧き出てきた。

やりたいことがあったわけではなかった。「なにかがやりたい」という思いは強かった。自分自身をエネルギーの巨大なゴジラにたとえるぐらい、たんに動きたかった。動ければなんでもよかったんだと思う。

たまたま演劇をやりたいと思っていた友人が横に座っていたので、演劇をやりはじめたし、なにか面白いことをやりたいと思っていた後輩がいたから面白いことをやろうと思った。

劇団の仲間や後輩と嫌になるほどの対話を重ね、演劇空間に対しての対話を始め、その挙句に京都のまちとの対話のなかで活動をつくってゆく面白さに出会い、右往左往して、パプアニューギニアの奥地で社会学者のフィールドワークという手法と出会う。

日本に帰り土地再開発業者・都市計画事務所での修行を経て紆余曲折の後……。

地域のリサーチから始め、地域に対話の場をつくり、そこから出てきたイメージを地域実験として活動を立ち上げるという手法を導き出してみた。

あるとき、イメージが立ち上がる前の状態があることに気づき、その状態を「モヤモヤ」と名付けてみた。

モヤモヤはイメージを作り出す種だとあらゆるところで話はじめると、そのモヤモヤという言葉が一部ではやりはじめた。モヤモヤは個人のなかにも、家庭や企業のなかにも、地域社会のなかにもいろいろなかたちであり、共感する人が多かったのだと思う。

モヤモヤはどこから来るのか。それは日常の対話のなかで抱く違和感やズレのようなものから発生するのではないかと考えるようになった。多くの場合、無視するように心がけている違和感やズレ。それがじつはイメージを発生させる大切な種なのではないか。

あらゆる種類の対話のなかでふと抱く違和感。それを無視することなく、それに向き合い、これを語ろうとする、なんらかの具体的な、具現化された形にしようとする。そこからじつはイメージが発生するのじゃないかな……と思っている。

個人の違和感、地域の違和感をしっかりと、なんらかのイメージとしてしっかり形にできるとすればそれはどのような手法がいいのか。それはさまざまな手段で表現しながら考える……というのがいいと思う。

過去の関連ブログ

イメージはどこから発生し、どこにゆくのか?¹
3331での311のモヤモヤ会議²



1 「イメージはどこから発生し、どこにゆくのか?」
2006-05-07 09:02

2 「3331での311のモヤモヤ会議」
2012-03-11 23:11

地域の活動をつくっていくうえで、活動を作り出すための仕組みとして、アートプロジェクトというフォーマットがとても有効に利用できるのではないかと考えている。仕組みをつくることで、地域資源としてのさまざまな場を使い、いろいろな表現が展開することで、そこから活動の連鎖を促すことができる。



仕組みがなければただの空き地だったり空き家だったり、そこにまさにさまざまなアプリケーションが起動するかのようなOS的な仕組みを組み込むことで、場は活きはじめる。

一方で仕組みをつくるためにはさまざまな人とのつながりが必要だし、活動をつくりたい人を集めるための場——つまり拠点——が必要だという考え方もある。とくにまちをどうしようというのではなく、とにかく場を設けることでそこが吸引力となって面白い人たちが集まってくる。集まることでなにかそこから活動が滲み出てきて、結果的に地域の活動の仕組みができてしまう。

仕組みと拠点の問題は鶏が先か卵が先かの問題で、地域のプロジェクトの現場では必ず論議される時期のくる問題だと思う。じつはどちらがさきかなんてことはあまり重要ではないじゃないような気がする。じつはたぶん、なんらかのかたちで成長する段階でどちらもが必要になってくるのだろう。問題はそのあり方だと思う。



拠点をもたない仕組みの場合、不必要に集まるところや集まる時間がないがゆえに、目的志向の会議、目的志向のイベントになりがちで、不必要な、無駄な要素が排除されがちになる。目的に合致した要素を集めることができても、目的以外の要素は集まりにくい。場を持たないメリットももちろんある。場所の運営費用に束縛されないという面はとても大きく、予算を活動そのものにかけることができる。束縛されるものが少ないので、プロジェクト自体に色が付きにくいこともあり、変幻自在に変化してゆける可能性を持っている。また逆に自由であるがゆえにプロジェクトの継続性を保ちにくい面もある。

一方、拠点をもちつつ運営する場合、いつでも常時、予期せぬ誰かと出会う可能性が出てくる。その場の持つ空気感のようなものが人を惹き付け、こちらから声をかけなくても、場そのものが魅力的だった場合、そこに人が集まってくる。エネルギーを持つ人が集まるとそこから自然と活動は湧き出てくる。一方で家賃、光熱・通信費、

その場を運営するための人件費などの問題も発生する。場を運営してゆくために活動をつくらなければならないという束縛を受けることになりがちで、場の方向性に自然と色や傾向がつくことが多い。

この仕組みと拠点が成長してゆく段階でぶつかる問題……。それはそこで展開される表現の完成度や強度に対する意識との葛藤のようなものかな……。



ここで再認識する必要があるのは、「活動をつくる」ための仕組みであつたり拠点であつたはずだということ。しかしあたりまえのように「しっかり見せる活動」も必要となってくる。

ここで再認識しなければならないことは、「完成された活動を見せる」ための仕組みや拠点とは根本的に異なる性格のものだということ。つまりそこに過去における美術館やギャラリーのシステム、あるいは劇場等のシステムや国際芸術祭などのシステムとは異なり、あくまでも「つくること」にベクトルがあるかどうかによる。ということじゃないかなと思う。

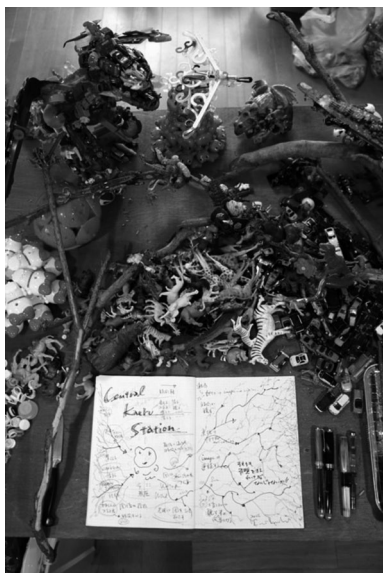
自分自身の活動を振り返り、「つくるための拠点」づくりと「つくるための仕組み」づくりにどれだけの時間とお金を費やしてきたかを考えるとぞっとする。そしてその運営のためにもろもろの右往左往を余儀なくされてきた。

僕自身の性質として、完成されたものを楽しむ時間よりも、つくるというプロセスにいる時間が好きなんだと思う。もちろん完成されたものを楽しむ時間も楽しいし、生活のなかには必要だと思う。しかし、つくる時間にいる面白さを捨てることはできない。だって誰かがつくらなければ、次の時代の完成品はできないんだものね。

仕組みと拠点が車の両輪のように必要だとして、その縦軸に「つくる」ところと「みる」ところはやはり両輪のように必要なのだと思う。その限りなく「つくる」ところに近い現場にもっとも興味があるということだと思う。

6月6日はかえるの日だってことを知ったのは2000年ぐらいに福岡で「福岡かえる展」というかえる好きが集まった展覧会に出品することになったときに教えてもらい、偶然の一致に驚いたことがある。

6月6日という、このブログタイトルにもなっている藤浩志企画制作室という個人事務所の設立記念日。

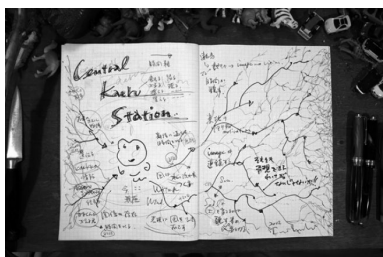


じつは、1992年に青山スパイラルガーデンで当時にしては大規模な個展が6月に決まり、勤めていた都市計画事務所を辞めることにして、なにが事務所名が必要かなと考えて、なんとなくつけた名称が「藤浩志企画制作室」

個人事務所を語ると設立はいつですか？と聞かれることが多くなり、じつはしばらくしてから設立日を設定しようということになり、なんとなく6月6日に雨ザーザー降ってきての絵描き歌が好きだったので6月6日とすることにした。その日がまさか全国的にかえるの日として認定されているとは……。

当時1カ月分の給料すべてで購入した1トンのお米が古くなり、それで2,048匹のお米のカエル（かえるの形のおにぎり）をつくっていたころ。2,048匹のお米のかえるをつくるためにサラリーマンを辞めて、藤浩志企画制作室をつくったわけだから、その設立の日が「かえるの日」という運命に驚いた。

そしてなんとついに20周年。さらになんと……、いまだにかえるを引きずって、この7月15日からはじまる展覧会のタイトルが「セントラルかえるステーション」どこまでもかえるから逃れられない（展覧会は9月9日まで……。あ、9月9日は息子の誕生日だ！）。



十和田に来てみるとなんと十和田市では昔、カエル・ジャンピオン・ジャパンカップなるものを行っていたとかで、街のあちこちにかえるがいる。かえるはずっと追っかけてくる。

それにしても……。藤浩志企画制作室という名称をつけたことで、こんなことになったんだと思う。企画室だったら、もっとちゃんとした企画事務所になっていたかもしれないし、ちゃんと流通を目指していたかも。

あるいは制作室だけだったら、現場をまわることなく、いろいろ作品を制作するスタンスでけっこう売れる作家になっていたりして……。

もともと制作する時間を過ごすのがたまらなくいい。しかしなにを制作するのが自分のなかから湧き出てくるタイプではなかったの、それを企画するのが重要だと思っていた。企画が決まれば制作に没頭できる時間ができる。本当は制作に没頭する時間を企画したかったのかもしれないが……、いろいろな現場を回るうちにいろいろと考えてしまうので、OS的とか地域の主体性とか水の役割とか……、結果として、もろもろの状況をつくることになってきた。



じつはこの企画制作室というのを数年前から離れようとしていた。そもそも、この名称の裏側には藤浩志という自分自身を企画して制作するという意思を名前にしたものの。しかし、最近、その意思が色あせてきた。

もっと流れのなかにあっという間になるようになってきたからかな……。というか、自分自身の抱える素材が膨大になり、制作するべきものが膨大になり、もっと自分とか作品そのものに向かい合う時間が欲しくなったのだと思う。

コアとしての自分をひたすらオープンにするためにはそのフレームすらもう必要なくなったのかも。

とにかく、藤浩志企画制作室20年、おめでとう。しかし、そろそろ僕自身も「かえる」ときかな……。

僕が普通に仕事にコンピュータを使い始めたのが1988年。マッキントッシュのIIfxというグラフィック系の仕事でつかえるマシンが会社に導入され……、でもまだCADはコマンド入力でAutoCADを使っていたし、ワープロは専用のワープロマシンがあった時代。



<https://www.youtube.com/watch?v=PNW8IYMY6x0#t=22>

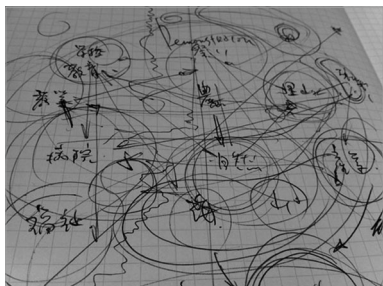
おそらく、88年ぐらいから急激にデザイン事務所ではMacを導入しはじめていたが通信ネットワークはまだこれからという感じで、当時名刺にe-mailアドレスを入れてみたが、ほとんどの人が「なにそれ？」という感じで無視された記憶がある。

僕自身コンピュータの知識があるわけではなく、仕事でとにかく使わなければならないという事情から、使い始めたわけだが、いろいろな考え方が新鮮で、当時の、あるいはその後の僕自身の考え方に大きな影響を与えてしまった。

そのひとつが**OS**というあり方。

いろいろなアプリケーションを起動させるための基本システム。オペレーティングシステム。

ちょうど当時まちづくりとか地域計画のコンサルタント等を行なう、都市計画事務所に勤めていて、地域に主体的な活動をつくるデザインのようなことを考えていたころ、このOSという概念がぴたりときた。



当時行政はハードとソフトという言い方をしている、いわゆる箱モノ行政といわれるハード整備事業に対する批判が出てきて、世間ではソフト事業だと言い出して行政がイベントなどのプログラムに着手し始め、「いや、そうじゃないでしょ。OSをつくらなければならないのであって、アプリケーションつくっちゃいけないでしょ！ソフト事業は民間がいろいろ提案できるような基本システムをつくらなければならないのに……」と独り言のような突っ込みをいれていたが、当時はささやきにもならなかったし、ほぼ無視された。

それを美術の業界に持ち込んで、OS的なのという言い方をしていたが……、モノヤコトをつくるだけでなく、シクミをつくることで空間が成立するということに対して興味を持ち始め、その具体的な例をつくろうとしていた時期もある。その感覚や概念はOSが発

明された以前にはなかった概念だと思っていたので、とにかく新鮮だった。

地域でのアートプロジェクトはまさに地域の多種多様多層なプログラムを起動するためのOS的なものだと考えるとわかりやすいと思う。けっして汎用性のあるOSではなく、地域独自のOSだと思うが、重要な点は更新されてゆくというところにある。コンピュータのOSの寿命はせいぜい5年ぐらいだと思うが、地域のアートプロジェクトのOSも更新してゆかなければならない質のものだと思っていたほうがいい。

そして、**レイヤー（層）**という概念。

CADを使い始めたときに会ったこの概念には相当助けられている。地域を考えると、いや、物事全般のあり方を考えると、このレイヤーの感覚を持っているのとそうでないのでは相当変わってくる。

さきにちらりと言葉でつかってみたが、まさに多種、多様、そして多層な視点でとらえ、それに時間軸を加える感覚が必要なのだと思う。

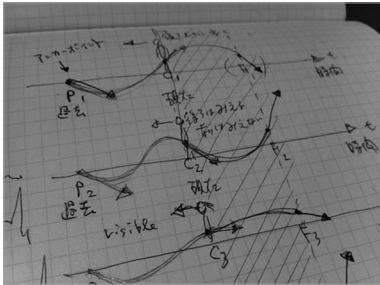
先日書いた拠点と仕組みの話でも、平面的な感覚で考えていたら、それが見せるための拠点なのか、つくるための拠点なのかと二者択一の話になりがちだが、じつは多層な視点を持ち込むことでそれは同居できることになる。つくる施設なのか、見せる施設なのかは平面上のどちらがいいのかという問題ではなく、層のまったく違う問題なので、それぞれの層を考える必要があると捉えることができる。

そして**アンカーポイント**。

アンカーポイントはイラストレータというアプリケーションを使い始めた1989年に会った概念。イラストレータというソフトを使ったことのある人なら知っていると思うが、いわゆる曲線を描くときに曲線の変わり目となる場所を指定するポイントのことで、画面の上にアンカーポイントを打ち、そこに次のポイントへのベクトルを指定することで、曲線を描く。

それまでは曲線を描くときは座標上で連続する点を集合させることで曲線に見えるようにつくるデータであったのに対し、このアンカー





ポイントによる曲線（ベジェ曲線というらしい）は曲線の曲がりどころにポイントを打ち、次に向かうベクトルの属性を与えることで曲線を描くという画期的な考え方だった。コンピュータのシステムのことなんかさっぱりわからなかったが、とにかくこの曲線の描き方には感動した。

当時「アンカーポイントの旅」という詩のような文章を書き、1992年の大阪での展覧会には空間一部屋使ってそのタイトルのインスタレーション作品を展示したほどの入れ込みよう……。

一番なにに感動したのかというと、アンカーポイントで描く曲線を——自分の活動の紆余曲折に例えるわけだが——現在打つアンカーポイントのベクトルの方向と強さによって、過去からここまで来ている曲線の表情が変わるという点だった。ひとつ前に打たれたアンカーポイントには座標とベクトルが与えられているわけだが、座標は変わらないのだけれども、曲線の表情は変わる。

つまり、このアンカーポイントの打ち方次第で過去の意味が変わるという点に気が付き感動した。

人は生まれてから死ぬまで、時間軸をひたすら進むとすれば、後戻りできない一本の曲線を描いているように感じ、なにかどこかの場所でなんらかの表現をするということはアンカーポイントを打ち、次のベクトルを表明することなんじゃないかと思った。強い意志のときは強いベクトルだし、自信のないときは弱いベクトル……。しかし、ポイントを打たなければならない節目がその時々であり、それをどこに打つかでどのような曲線が描けるかが変わる。似たような場所に弱いポイントをとくさん打つようなときもあれば、突然とんでもないところにまったく違う方向性と強い意志でありえないポイントを打つことだってできる。



次に打つポイントの座標とベクトルで将来の曲線が変わってゆくということはイメージしやすいが、じつは次に打つポイントの座標とベクトルで過去、つまりひとつ前に打った座標からの曲線の表情が変わるという現象は、過去は変えれないことがあたりまえだと思っていた考えを覆し新鮮だった。

<https://www.youtube.com/watch?v=Eungd-mfqV8>

過去の活動の事実は変わらないとしても、その意味は変わる——過

去に行なった行動の意味は現在に行なっている行動によって変わる
——という事実を教えてくれた。

このアンカーポイントを打つという感覚はプレゼンテーションのつくり方にも活かされている。僕はアンカーポイントの終着点を設定しないやり方……、つまり目標とか到達点とかいわゆる「こうありたい」とかのビジョンのようなものをなるべくつくらず、活動の連鎖を重視しているので、最終的なイメージを求められることの多いプレゼンテーションでは説得力を失なうことが多い。それに対して——おそらくこれは僕のオリジナルのプレゼンテーションの作り方だと思うが——、過去と現在までの状況を説明したうえで、次のポイントの座標とベクトルを明確に、しかも説得力だけを盛り込んでつくりにしている。……とはいえ、最近ではプレゼンテーション資料すらつくったことがないが……。

とにかく、OS、レイヤー、アンカーポイント……、すべて89年ごろ心に響き、影響を受け、その後もずっとある意味更新されていない概念。

しかし、当時は通じなくて苦労した感覚だが、さすがにそれから四半世紀が過ぎて、これらの感覚があたりまえの世代が地域での活動を動かしている。そのあたりの感覚が前提になっているのはうれしい。

でも、そろそろ更新したほうがいいのかなあ……。いまの30歳ぐらいの人はなにに影響を受けて活動しているのかな……。

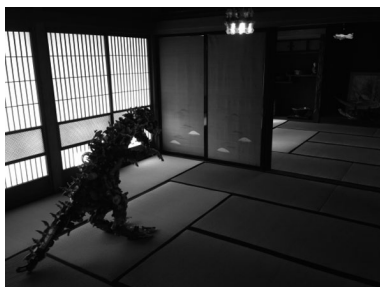
なんだか最近、古い話ばかりですみません。

過去の関連するブログ

秋葉原のアーツちよだ3331の設営3日目¹
ストラクチャル・アート?²

1 「秋葉原のアーツちよだ3331の設営3日目」
2010-03-10 21:48

2 「ストラクチャル・アート?」
2008-10-23 09:33



最近、開くことと閉じることのバランスがとても重要だということが気になって仕方ない。

感情や感覚のあり方、あるいは精神状態のあり方というべきか、心のあり方というべきか。

自分自身の状態を客観視できること。そのことがとても重要な気がする。



作品をつくる行為、あるいは表現に向かう行為、自分自身を客観視し、さらに自分自身を超えようとする行為はあくまでも内側に向かいつつ、ある意味閉じたところから発する質のものなのかもしれない。そしてそれを発表する行為、社会化する行為は、自分の内なるものをいかに開いてゆくかということに繋がる行為のような気がする。

しかしそれぞれにも開く部分と閉じる部分が微妙なバランスでせめぎあう。

内なる自分を超えてゆく行為はまさに自分と周辺との境界を行き来する行為であるし、社会化しようと発表する行為はたんに自分自身を開くだけではなく、ある部分に対して閉じながらある部分を開いてゆく微妙な操作が絡んでくる行為のような気がする。

もしかすると開くと閉じるだけのことではないのかもしれない。

前向きと後ろ向き、上向きと下向き、そして開くことと閉じること……。そのバランスをコントロールできればすごいのだろうけれど……。

あたりまえだけれど、世のなかはそんなに単純ではない。だから面白い。その微妙な開き具合と閉じる具合でいろいろな関係のあり方が変わってくる。

それを自覚できること……。そんなことって子どものころ教えられなかったなあ。

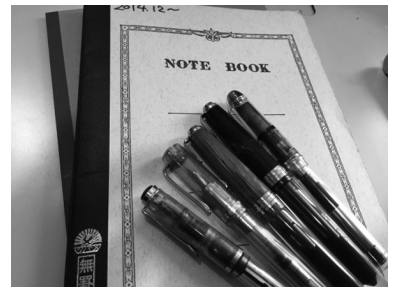
僕は遠くにあるものを探しに出かけて手に入れようとするタイプではない。目の前にあるもの、手の届くものを触りいじりたがる。いじりはじめるとある程度までいじってしまう。ずっといじり続けていると、状態が変化することがある。別にどうしようとか思っているわけではないが、いじるうちに……、もっとこうしてみようかなとか……、もっとこうできるなとか……、そんな思いが湧き出てくるのが面白い。

中学、高校時代に「学習の記録」という日々の学習時間とか感想とかを書き込むという不毛な宿題のようなものがあった。別にまじめに勉強しているわけでもないが、その記録をいじり、毎日の生活の記録を必要以上に几帳面につけて行くと、自分とは別の、毎日ちゃんと学習している賢そうな人格が立ち現われる。そんなことにはまったのかもしれない。

美術大学に入学しクロッキー帳を持ち歩くようになり、持て余す時間で落書きを始め、いろいろ描きはじめた。そのころは色鉛筆とか万年筆とかボールペンとかポイントペンだとか、いろいろな素材をいじる事が面白く、その支持体としてクロッキー帳だったと思う。描かれたものはたんなる落書きだったり、身の回りの風景のスケッチだったりして、文章はほとんどなかった。しかし、ある時特別なノートに出会い、日々そのノートに向き合うようになり、初めて文章を書くようになった。

ノートに向き合う時間は自分に向き合う時間であり、目の前の風景と出来事と自分自身を繋ぐメディアだった。どこに行くにもそのノートと万年筆を持ち歩くようになり、自分自身と向き合う時間を重ねてきた。誰にも見せることのないノートだったので文章もめっちゃくちゃ。校正などしたことはない。そんな時間を20年ぐらい重ねていたと思う。

あるときそのノートのデザインがマイナーチェンジした。メーカーにとっては些細な仕様の変更だったと思うが、僕にとっては魂を失なう重大な事件で、そのノートに向き合うことができなくなった。新しいノートを探してみてもまったく性に合わず、メディア探しの紆余曲折が始まった。そんな時期だと思う。インターネットが普及しはじめ、自分でもウェブサイトをつくるようになり、掲示板サイトが一般的になってきた。

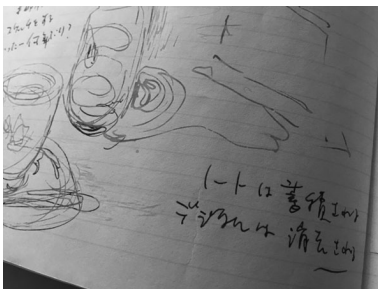


最近使っているノートと万年筆

1 「自分に向かい合う時間のためのツール」
2005-07-12 01:15



自分の掲示板をネット上につくり書き込みはじめたのは2000年の1月。ちょうど精神的に辛い時期だったので、人に言えない自分の不満を吐き出し書き連ねる日々を過ごしたが、そのサイトを数カ月公開しなかった記憶がある。公開することに決めた瞬間、その書き込みをすべて消去した。



ノートに綴る言葉は閉鎖的なものだったので、自分自身の内部と向き合う時間だったが、掲示板サイトは開かれている。自分の考えを周辺の人に投げかけることで、サイトのなかに新しい架空の自分が発生する感覚に興味を持ったのかもしれない。学習の記録の経験のように。

掲示板の使い方にも慣れてきたころ、ブログサイトが登場しはじめた。

それまで日常的に行なっているか把握しづらかった自分自身の日々の記録を分類し、タグ付けし、整理し始め、自分自身を客観視するツールとして使えるのではないかと期待しつつ……、いじりはじめた。それが2004年4月。

ブログ以前は藤浩志がいたいなにして、どのように考えているのかを伝えるのがとても大変だった。それぞれの現場で担当者の経験や思惑はまったく違うので、一人ひとりに向きあって考えをぶつけてきた。ブログサイトを公開するようになり、それぞれの現場の担当者に見てもらい、書き込んでもらったりするうちに、いろいろな現場の担当者同士が共感があったり、繋がりはじめた。ブログを通して現場の違和感や疑問を投げかけたりするようになり、活動が加速した。

藤浩志企画制作室という藤浩志を企画し、制作する個人事務所の立場で働いている時期だったので、日常の業務を報告する上司のかわりにこのブログがあったと捉えることもできる。全国各地にいる仕事のパートナーに向けての報告だったとも言えるし、未来の自分自身への報告だったのかもしれない。

カテゴリーをプロジェクトごとに分けることによってそれぞれの報告書代わりのアーカイブになるなと思い、なるべく記録することを心がけた。

しかし記事を重ねるうちに記事のための活動をしかねないような状況になったり、ブログサイトに個人が縛られるという感覚も味わった時期もある。サイトのなかに立ち上がる藤浩志という別のキャラクターづくりにはまりそうになり、それを避けるために裏切ってみたり、なだめてみたり、離れてみたり……。試行錯誤するうちにSNSが発達し、そちらの利用とブログのバランスを考えてみたりするうちに……。²、ブログから離れてしまった。



2 「ブログから離れていく自分の時間」
2011-10-20 09:15

正直な話をすると……。個人事務所の代表という立場であればなんでも書けたことが、公立美術館に勤めるようになって日常のことが書けなくなったのだ。仕事上、書けないことが多すぎる。どこに行き、誰と会い、なにを話したのか。本音はどう思っているのか……。立場というのは恐ろしい。

で、このブログのカテゴリー「思考雑感/Image Trash」はそもそも、それぞれのプロジェクトの報告のカテゴリーに収まらない、個人的な違和感のようなものを、吐き出し投げかけるところとして分類し始めた。このころ吐き出した考え方や試行錯誤がさまざまな現場でアートに関わる人たちの共通の言葉として定着しているものもあり、今回、東京文化発信プロジェクトが研究対象にするのだとか。……という理由でこの文章を書かされている立場にある。

立場がないと書けなくなってきたのかな……。ああ、固まってきた。

自分自身に向き合うノートとペンはまだ模索中で心を許すものに巡り合えておらず、自分をつくり上げるブログサイトにも向き合うことができなくなり、……。流れるタイムラインに公開できそうな害のない写真と報告だけを繰り返すように墮落してきた今日このごろ……。このままではダメじゃないか！

……。って、こんな感じでいいですか？



1988年に描いたヤセ犬。ブログのヘッターとして使用している

ブログと本とノート——いくつかの使い方

この冊子は「東京アートポイント計画」が展開しているリサーチプログラム「Tokyo Art Research Lab」(以下、TARL)の研究で活用するテキストノートとして——同時に一冊の本として——作成されました。美術作家・藤浩志が書き残した約10年間のアートプロジェクトに関する語録を、情報と言葉を補い編集することに参加しながら、学んでいく研究プログラムを想定したものです。そのためにブログ記事への編集行為を最低限に留め、ほぼ書き記したままのノートとしてこの冊子は構成されています。

教材テキストとしての側面に加えて、もうひとつの役割を持たせてあります。一冊の本としての機能です。紙に出力されたブログの語録を、藤の考え方や活動に興味をもった方々が気の向くままに拾い読みし、藤のバックグラウンドを知る手掛かりとして読まれることも期待しています。藤が10年のあいだにブログに書き記してきた言説の一部を時系列に読むことで「藤語録」がどのように生まれ、いかに発展してきたのか知るとともに、当時の思考のプロセスを追体験することができることでしょう。読者にとっては自らの思考を鍛えるためのガイドとして活用いただければと思います。

考えるためのテキストとして

2000年以降の10年ほどのあいだに、日本各地ではアートプロジェクトが頻繁に行なわれるようになり、アートシーンとして馴染みのある活動になってきました。わたしたちが実施する「東京アートポイント計画」はその一翼を担うかたちで、そうした活動が続いていくための環境整備を続けています。たとえばTARLでは「アートプロジェクトの『言葉』を編む」と題したプログラムにおいて、アートプロジェクトに関わるテキストのアンソロジーを編むための方法を模索してきました。アートプロジェクトの活動を継続してその強度を高めていくにはその歴史を知り自分たちの立ち位置を認識することが大切で、歴史を語るにはそのための言葉を用意する必要があると痛感しているからです。

アートプロジェクトについての記録は、良くも悪くも断片的であることがしばしばです。したがって、その歴史をまとめるためには、必然的にさまざまな書籍、雑誌、新聞、カタログ、報告書などに分散的に残された記録がリソースとなります。ブログやウェブサイトも、ここ10数年の動向を知るための重要なメディアとなるでしょう。今回はそのひとつとして「ブログ」というメディアに着目し、試験的に藤浩志のテキストを収集しはじめたというわけです。

われわれはどこへ向かうのか

アンソロジー構想の歩みを進めるために、わたしたちが知るべきことは多岐にわたります。記録と編集の技術、リソースの保存と活用に関するクリエイティブ・コモンズの考え方、未来の展開を見定めるために必要なアーカイブズの作法——。そして、そのためにいま必要なのは、テキストを読むことで過去を知る機会だけでなく、「残し伝えること」の重要性を認識し、そのための共通言語を構築し共有していく場なのです。

美術作品は、それが成立する背景の知識なくしてその重要性を語ることが困難です。同様に、日本のアートプロジェクトというジャンルの世界的な発信力を高めていくためには、日本の文脈を理解し、その活動自体が深みを帯びて持続的であることが求められます。この冊子を使って生まれる学びの実験は、その知識を養うための基礎トレーニングの場となり、記録をめぐるさらなる議論のスタートとなることでしょう。

*本書はブログ「Report 藤浩志企画制作室」のカテゴリ「思索雑感/Image Trash」をもとに作成した。本ブログは2004年3月にスタートし、全549本の記事が50以上のカテゴリに分類されている(2015年2月27日現在)。本書はその一部である。収録に際してブログ執筆時の原文に固有名詞の訂正と最低限の表記統一を施した。初出URL=<http://geco.exblog.jp/i14>

*本文背景の着色は原文のリンクと対応している。リンク先の情報は欄外に注釈として記した。参照ページが同ブログ内の場合は「タイトル」と「更新日時」、外部サイトの場合は「サイト名」または「筆者とタイトル(執筆日)」とURLを記載した。2015年2月18日の時点で参照ページが存在しない場合は無記名とした(ただし同一サイトに関連ページが存在する場合はその情報で代替した)。なお本文中の太字はブログ掲載時の着色やイタリックによる強調文字を表現している。掲載した図版はすべて著者による撮影または作成。

<p>Report 藤浩志企画制作室 geco.exblog.jp</p> 	<p>トップ ログイン</p> 
<p>藤浩志の活動を検索レポートします。ぜひコメントください。一筆以上のreportの部分をリンクするとブログ全体の記事ページへと行ききます。</p>	
<p>by Fuji Studio ブログ内で検索 検索一覧</p>	
<p>このブログを研究のネタに使うんだって。</p>	
<p>僕は遠くにあるものを手に取って手に入れたとするとタイプではない。目の前にあるもの、手の届くものを取りたいが、いじめるもとある程度までじつとあつとじつと削いでいる。収縮が可能なところ、削いでみたらどうなるかわからない。削いでみたらどうなるかわからない。削いでみたらどうなるかわからない。</p>	
<p>中学、高校時代に「学習の記録」という日々の学習時間と感覚との書き込みという不毛な記録のよすががあった。別にまじめに執筆しているわけでもないが、その記録をいじり、毎日の生活の記録を必要以上に精緻につけて行く。自分とは別の、毎日ちゃんと学習している賢そうな人物が立ちあがられる。そんなことはまったかもしない。</p>	<p>< February 2015 > S M T W T F S 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28</p> <p>現在のサイトは 5/5 http://www.geco.jp</p> <p>カテゴリ</p> <p>全体 二葉内/Information 練習稿/十和田での活動 練習内/国際芸術祭・横浜 六ヶ所 ①埼玉・北本ダレン ②大阪・中之島での水都大 展 ③大阪・北花アーツファ ム ④大阪・新世界での活動 ⑤福岡・筑紫深江での活動 ⑥イギリス/スイス/イタ リヤ ⑦ケニア/一言での活動 ⑧Kaosko System 練習/タラシエ/アン ル/マンダラデザイン/エ ンター ⑨夢の島 Dreaming/Bl ind ⑩イギリス/ケルラン</p>
 <p>美術大学に入学した頃から一冊を持ち歩くようになり、持て余す時間で落書きをはじめ、いろいろ書き始めた。その頃は鉛筆と万年筆とボールペンとがメインだったが、いろいろと便利になる事があつた。その支那筆としてタンス一冊だったと思ふ。描かれたものは筆になる書きだかり、あの頃の風景のスケッチだった。文章はほとんどなかった。しかし、ある特別なノートに出会い、日々そのノートに向き合うようになり、はじめて文章を書くようになった。</p> <p>ノートに向き合う時間は自分に向き合う時間であり、目の前の風景と出来事と自分自身を深くメタディ だ。ぶに正しくもそのノートと万年筆を持ち歩くようになり、自分自身と向き合う時間を重ねてきた。描くも書くもそのノートにたつたので文章ももちろん、校正などとはない、そんな時間を20年くらい重ねてきたと思う。</p>	

「Report 藤浩志企画制作室」
URL=geco.exblog.jp

本書は「東京アートポイント計画」のリサーチプログラム「Tokyo Art Research Lab」の一環として実施している「アートプロジェクトの『言葉』を編む」の一環として制作されました。

Tokyo Art Research Labは、アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。
www.tarl.jp

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。
www.bh-project.jp

*「東京文化発信プロジェクト室」は、2015年4月1日より「アーツカウンシル東京」と組織統合する予定です。



藤浩志 (ふじ・ひろし)

1960年鹿児島生まれ。美術家。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志し京都情報社を設立。京都市内中心市街地や鴨川などを使った「アートネットワーク'83」の企画以来全国のアートプロジェクトの現場で「対話と地域実験」を重ねる。同大学院修了後青年海外協力隊員としてパプアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て92年、藤浩志企画制作室を設立。各地で地域資源・適正技術・協力関係を活かしたデモンストレーションを実践。福岡県糸島市在住。NPO法人プラスアーツ副理事長。十和田市現代美術館館長。秋田公立美術大学教授。http://geco.jp

「思索雑感／Image Trash」2004-2015：校正用ノート

2015年3月20日 発行

著者 藤浩志

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階
TEL: 03-5638-8800
FAX: 03-5638-8811
E-mail: info-ap@bh-project.jp

造本 戸塚泰雄 (nu)

編集 メディア・デザイン研究所

印刷 昭和情報プロセス株式会社